元総社蒼海遺跡群（142）

2022・2

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群（142）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022. 2

前 橋 市 教 育 委 員 会

元総社蒼海遺跡群（142）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022.2

前 橋 市 教 育 委 員 会

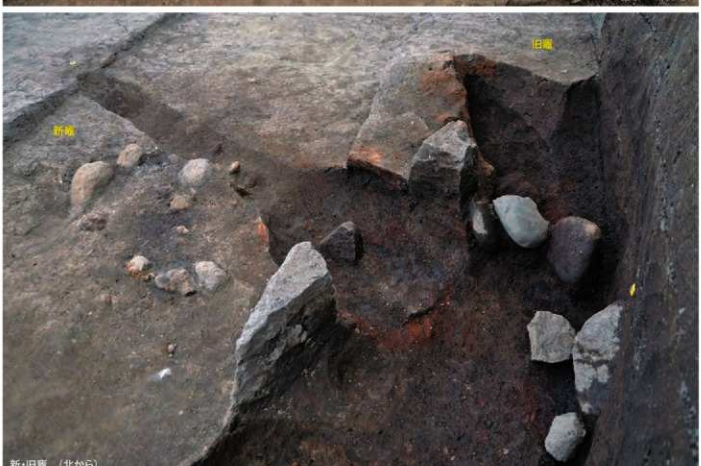
元総社蒼海遺跡群上空から望む榛名山（南東から）

手前中央に（142）調査区。中央を横断するのは関越自動車道。区画整理事業の進展に伴い、急速に宅地化が進む。
中央左半を関越道に絡んで伸びる緑地は、榛名山中腹を源とする染谷川。本遺跡付近で南に大きく流れを変えている。

東方上空から見た元総社蒼海遺跡群（142）調査区全景

調査地点は遺跡内を北西から南東方向に横切る低地帯にかかっており、基層となる総社砂層上面では、南西が高く北東は低い。
低地帯は染谷川の旧流路由来と思われ、この地が積極的に開発される古墳時代後期には埋没していた。

元総社蒼海遺跡群（142）調査区（垂直・上が北）
調査区北半は低地帯にかかるため、グリッドを設定して二面調査を行った。



H-5 竪穴建物跡と新・旧の竈

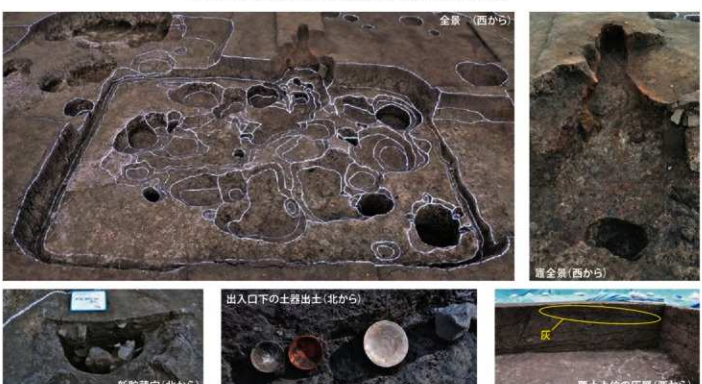
煙道部の短い旧竈の焚口部前は石で封鎖されており、煙道の長い新竈の右袖となっている。
本遺構竪穴部の上位には As-B が堆積することから、11 世紀後半の事例と考えられる。

H-10 竪穴建物跡

10 世紀後半。竪穴部壁沿いに床面から掘られた土坑が多数あり、竈材の白色粘質土を採掘した土取坑と考えられる。
竈は煙道部が長く、煙道入口に硬砂ブロックを架していた。その底面には構築時の詰め物の名残と思われる炭化物が確認された。

H-13 竪穴建物跡

10 世紀中頃、床面には多数の土取坑がある。緑釉陶器片が出土した。



H-15 竪穴建物跡

10 世紀中頃。多数の床下土坑。柱穴と貯蔵穴から二時期が想定される。覆土上位の灰層は窪地利用の廃材処理か。

竈　使用面（西から）

竈　煙道入口の石組（西から）

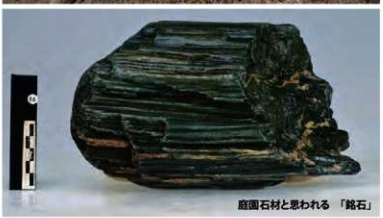
竈　検出平面（東から）

H-9 竪穴建物跡

8世紀前半。四本主柱穴から壁柱穴へ改修。竪穴部規模に比して大きい竈は煙道入口部両脇に石組をもつ。

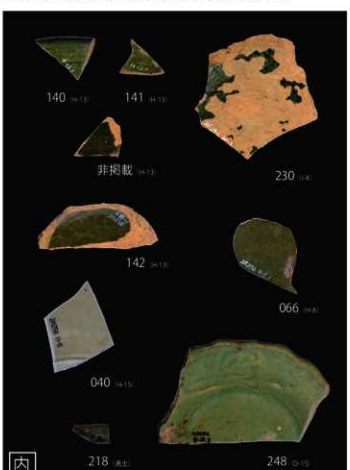
中世墓２基

顔を西に向けて屈葬されている。共に成人女性と推定され、懐あたりからは六道銭、D-4 墓は刀子とカワラケ、D-15 墓は後頭部から青磁片出土。



庭園石材を出土した平安時代の井戸跡 I-4

調査終盤に重機によって断ち割ったところ、美しい縞模様の緑泥片岩が発見された。庭園遺構の存在を暗示していると思われる。



調査区出土の緑釉陶器と白磁・青磁

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東七名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（142）は古代上野国の中枢地域の調査であり、調査成果に多くの注目を集めております。今回の調査では、奈良・平安時代を中心とする竪穴建物跡などが確認され、国府域を特徴づける多量の土器・陶磁器の出土が見られました。こうした調査成果の積み上げが国府や国府のまちの姿の再現に繋がると考えております。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和４年２月

前橋市教育委員会

教育長　吉　川　真由美

例　言

1.本書は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（142）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2.発掘調査は、前橋市（主管課:都市計画部区画整理課）の委託を受け、前橋市教育委員会事務局文化財保護課の指導・助言のもと、山下工業株式会社（代表取締役　山下 尚）文化財事業部が実施した。

3.発掘調査から報告書刊行までの作業は、前橋市の費用負担で実施した。

4.発掘調査の要項は、次のとおりである。

遺跡所在地　群馬県前橋市元総社町 1348-1　他

遺跡略称　2A256　　遺跡番号　0142　　調査面積　687㎡

期間　【現地調査】令和３年４月 19 日～同年８月 16 日　【整理】令和３年８月 17 日～４年１月 31 日

調査担当者　永井智教　　調査員　関口信夫

5.遺構写真は関口・永井が撮影し、空撮は清水龍太（クリエイトＲ）による。

6.遺構測量及び平面図作成は、黒岩拓也（天田安平商店）が行った。

7.現地調査において、竈の調査については外山政子（元榛名町史編纂室）の指導・助言を受けた。

8.現地調査作業員は、以下のとおり。（五十音順）

岩崎のぞみ・榊澤礼子・川田馨秋・斎藤茂二・中野光男・畠山孝四郎・樋下田千鶴・広瀬敏彦・和田 進・渡辺寿美子

9.整理作業は永井指示のもと、石塚久則・青木利文の助力を得て青木ゆかり・川邉みずき・谷藤龍太郎・富田和美・樋下田が行った。

10.本書の執筆については、１が前橋市教育委員会事務局（文化財保護課 寺内）、人骨鑑定は谷畑美帆（明治大学文学部兼任講師）、縄文時代の遺物を関口が行った。他は永井である。

11.本書の編集は、永井監修のもと川邉・谷藤が行った。

12.発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。

13.調査及び報告書の作成にあたっては、下記の機関・諸氏からご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）

池田敏宏　高橋清文　中村岳彦　野村 満　前原 豊　山本良太　三浦京子　山下歳信　吉田智哉

株式会社甲セオリツ

凡　例

1.遺跡、全体図におけるＸ・Ｙ値は、平面直角座標Ⅸ系（日本測地系）の座標値、挿図中の北は座標北である。

2.挿図中で用いる遺構等の略称は以下のとおりである。

【竪穴建物跡】H　【溝跡】W　【土坑】D　【ピット】P　【井戸跡】I　【カク乱】K

3.遺構図は 1/2,000・1/200・1/100・1/60・1/30、遺物実測図は 1/4・1/3・1/2 とした。

4.遺構図・遺物図の網掛けについては、個々の図中に凡例を明示した。

5.本書で用いる火山噴出物の略称と年代については以下のとおりである。

【浅間山Ｂ軽石】	As-B	天仁元年（1108）
【榛名山二ツ岳 - 渋川テフラ】	FA	５世紀末
【浅間山Ｃ軽石】	As-C	３世紀末～４世紀初頭

目　次

巻頭図版

巻頭1　元総社蒼海遺跡群上空から望む榛名山（南東から）
東方上空から見た元総社蒼海遺跡群（142）調査区全景

巻頭2　元総社蒼海遺跡群（142）調査区（垂直・上が北）

巻頭3　H-5　竪穴建物跡と新・旧の竈

巻頭4　H-10　竪穴建物跡

巻頭5　H-13　竪穴建物跡
H-15　竪穴建物跡

巻頭6　H-9　竪穴建物跡

巻頭7　中世墓2基

巻頭8　庭園石材を出土した平安時代の井戸跡I-4
調査区出土の緑釉陶器と白磁・青磁

はじめに
例言・凡例・目次

Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
1．遺跡の位置　2．地理的環境　3．歴史的環境
Ⅲ　調査の方針と経過……9
1．調査の基本方針　2．調査経過
Ⅳ　基本層序……11
Ⅴ　検出された遺構と遺物……13
（1）原始・古代の遺構と遺物　（2）中・近世の遺構と遺物
Ⅵ　人骨鑑定報告……21
Ⅶ　発掘調査の成果と課題……23

参考文献
写真図版・報告書抄録

挿図目次

Fig.1　遺跡の位置……1
Fig.2　周辺調査地点とグリッド設定図……2
Fig.3　元総社蒼海遺跡群（142）の周辺遺跡……4
Fig.4　蒼海城周張図……8
Fig.5　元総社蒼海遺跡群（142）全体図［中世面］……10
Fig.6　近隣調査区と旧地形……11
Fig.7　元総社蒼海遺跡群（142）全体図［古代面］……12
Fig.8　中世墓人骨3Dモデル……22
Fig.9　H-1・3・4・16・23、I-4……25
Fig.10　H-5・6……26
Fig.11　H-7-9……27
Fig.12　H-9・10……28
Fig.13　H-10・11……29
Fig.14　H-12-14……30
Fig.15　H-15……31
Fig.16　H-13・14・15・22　遺物出土状況……32
Fig.17　H-17-22……33
Fig.18　古代の溝跡・土坑……34
Fig.19　中世の土坑・井戸跡……35
Fig.20　中世墓関係……36
Fig.21　出土遺物（1）……37
Fig.22　出土遺物（2）……38
Fig.23　出土遺物（3）……39
Fig.24　出土遺物（4）……40
Fig.25　出土遺物（5）……41
Fig.26　出土遺物（6）……42
Fig.27　出土遺物（7）……43
Fig.28　出土遺物（8）……44
Fig.29　出土遺物（9）……45
Fig.30　出土遺物（10）……46
Fig.31　出土遺物（11）……47
Fig.32　出土遺物（12）……48
Fig.33　出土遺物（13）……49
Fig.34　出土遺物（14）……50
Fig.35　出土遺物（15）……51
Fig.36　出土遺物（16）……52
Fig.37　出土遺物（17）……53
Fig.38　出土遺物（18）……54
Fig.39　出土遺物（19）……55
Fig.40　元総社蒼海遺跡群（142）出土の鉄滓系遺物……60

挿表目次

Tab.1　周辺遺跡一覧……5
Tab.2　竪穴建物観察表……24
Tab.3　古代の井戸観察表……24
Tab.4　古代の溝観察表……24
Tab.5　古代の土坑観察表……24
Tab.6　古代のピット観察表……24
Tab.7　中世の井戸観察表……36
Tab.8　中世の土坑観察表……36
Tab.9　中世のピット観察表……36
Tab.10　出土遺物観察表（1）……56
Tab.11　出土遺物観察表（2）……57
Tab.12　出土遺物観察表（3）……58
Tab.13　出土遺物観察表（4）……59
Tab.14　竪穴建物跡出土土器・陶磁器・瓦一覧表（重量比）……60

写真図版目次

PL1　H-1　完掘（西から）
H-1　遺物出土状況（西から）
H-1　掘方調査状況（西から）
H-1　竈上面遺物出土状況（西から）
H-1　竈調査状況（北西から）

PL2　H-3　調査状況（西から）
H-3・4・23　完掘（北東から）
H-4　遺物出土状況（南から）
H-23　遺物出土状況（西から）
H-5　完掘（東から）
H-5　完掘（北から）

PL3　H-5　竈（北から）
H-5　竈（垂直・上が南）
H-5　竈　上層断面（東から）
H-5　竈遺物出土状況（垂直・上が南）
H-5　遺物出土状況と上層断面（東から）

PL4　H-6　完掘（西から）
H-6　竈　完掘（西から）
H-6　竈　燃焼部壁面（西から）
H-6　竈　煙道部壁面（南から）
H-6　竈　燃焼部壁面（西から）
H-6　竈　燃焼部上層断面（南西から）
H-6　竈　煙道入口の上層断面（西から）
H-6　竈　煙道部上層断面（南から）

PL5　H-7　完掘（西から）
H-7　床面中央の遺物出土状況（西から）
H-7　竈　完掘（西から）
H-7　竈前面の被熱状態（西から）
H-8　完掘（西から）
H-8　調査状況（東から）
H-8　竈　完掘（北西から）

PL6　H-9　完掘（西から）
H-9　掘方（北から）
H-9　竈　調査状況（南から）
H-9　竈　完掘（西から）
H-9　竈　煙道口の立石（西から）

PL7　H-10　完掘・遺物出土状況（西から）
H-10　土取坑内遺物出土状況①（北から）
H-10　土取坑内遺物出土状況②（南から）
H-10　土取坑内遺物出土状況③（北から）
H-10　竈（西から）
H-10　竈　調査状況（西南から）
H-10　竈　煙道底検出の炭化物層（北から）

PL8　H-11　完掘（西から）
H-11　土層断面（西から）
H-12　完掘（西から）
H-12　土層断面（西から）
H-13　完掘（西から）
H-13　遺物出土状況（西から）
H-13　旧貯蔵穴（西から）
H-13　竈残骸（西から）

PL9　H-14　完掘（西から）
H-14　遺物出土状況（西から）
H-14　遺物出土状況（南から）
H-14　竈　調査状況（南から）
H-14　竈　完掘（西から）
H-14　竈　煙道部（東から）
H-14　完掘（南西から）

PL10　H-15　完掘・掘方（西から）
H-15　竪穴部　南壁際遺物出土状況（北から）
H-15　旧貯蔵穴　調査状況（北から）
H-15　竈　完掘（西から）
H-15　煙道部（東から）

PL11　H-16　完掘（北から）
H-17　調査状況（西から）
H-17～20　調査状況（垂直・上が西）
H-18　調査状況（南から）
H-21　竈（西から）

PL12　H-22　完掘（東から）
H-22　遺物出土状況（北から）
W-2　完掘（南西から）
W-2　上層断面（西から）
W-2　遺物出土状況（西から）

PL13　D-11　（南から）
D-16　（南から）
D-17　（北から）
D-18　（西から）
D-19　（南から）
D-20　（南から）
D-21　遺物出土状況（南から）
I-4［旧H-2］　土層断面（南から）
I-4［旧H-2］　（南から）
I-4［旧H-2］　断ち割り（北東から）

PL14　D-2　（南から）
D-3　（南から）
D-5　（南から）
D-6　（南から）
D-7　（東から）
D-8　（南から）
D-9　（東から）
D-10　（南から）

PL15　D-1　動物埋葬遺構（東から）
D-4・15（東から）

PL16　D-4　人骨検出状況（東から）
D-15　人骨検出状況（東から）

PL17　I-1　（東から）
I-1　土層断面（東から）
I-2　（東から）
I-2　土層断面（東から）
I-3　（東から）
I-3　土層断面（東から）
中世遺構確認面（北から）
中世遺構確認面（南から）

PL18～29
出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、23 年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和２年４月 10 日付けで前橋市長　山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施予定のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。翌年３月 22 日付けで前橋市と民間調査組織である山下工業株式会社との間で業務委託契約が締結されるとともに、両者に市教委を加えた三者で協定を締結し、発掘調査に着手した。なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（142）」（遺跡コード：2A256）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「(142)」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。　（文化財保護課）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

今回発掘調査を実施した元総社蒼海遺跡群(142)は、前橋市西部の元総社地区に位置する。一帯は俗に「利根西」と呼ばれ、かつては市内でも開発の遅れた地域と言われていたが、昭和 40 年代の国道 17 号高前バイパスの開通、次いで昭和 50 年代の関越自動車道前橋インターチェンジ共用開始と共に周辺地域の区画整理が継続的に実施され、市街化と共に大きく変貌を遂げた。今回の調査原因となった前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業もそうした流れで実施されるもので、事業も終盤に差しかかろうとしている。本地区南方では西部第一落合土地区画整理事業も開始され、街の変貌をより加速度的に進めるものとなるだろう。

Fig.1　遺跡の位置　　「国土地理院発行　数値地図 1/200000）を改変

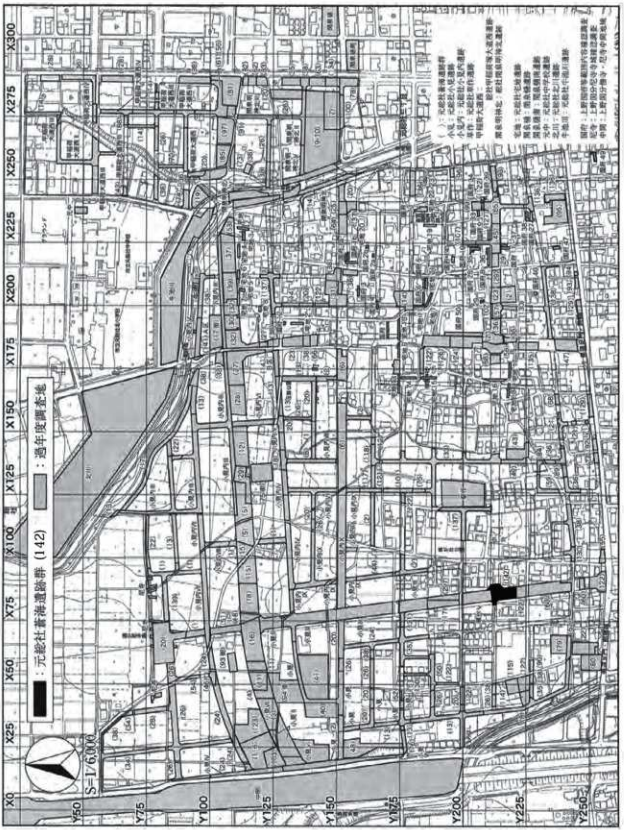


Fig.2　周辺調査地点とグリッド設定図

「元起社蓄海道跡群（141）P6」を改変

2　地理的環境

遺跡は榛名山東麓の末端に位置し、約 13,000 年前の榛名山系の山体崩壊である「陣場岩屑なだれ」によって形成された広大な扇状地形である「相馬ヶ原扇状地」最末端でもある。岩屑なだれ層下には、約 20,000 年前に形成された「前橋泥流」が堆積しており、南東に広がる前橋台地の基層をなしている。

岩屑なだれや前橋泥流の上には、「前橋下部泥炭層」の堆積後、浅間 - 板鼻黄色軽石（As-YP・約 13,000 年前）・浅間 - 総社軽石（約 11,000 年前）を含む「前橋上部泥炭層」が堆積し、それを洪水性堆積物である「総社砂層」が厚く覆っている。総社砂層上には黒ボク土が生成された後、浅間Ｃ軽石（３世紀末降下）以降複数回に及ぶ火山灰を被っている。地形を詳しく見ると、扇状地の等高線に直行して下る中小の河川が顕著で、北から八幡川・牛王頭川・染谷川・牛池川等がある。これら河川は総社砂層の供給源となる半面、砂層を深く抉る部分も多く、総社周辺の地形を左右したのだろう。また、古墳時代後期の榛名山活動期には、火山灰を泥流として押し流して谷筋を埋堆させ、今日に近い比較的平坦な地形を造り出した。

3　歴史的環境

総社周辺は、先述の「総社砂層」堆積後、地表面が安定して黒ボク土が生成され始めた縄文時代前期以降、遺跡の分布がみられるようになる。以下、本遺跡の主体となる古墳～奈良・平安時代の考古学的な経緯について、やや広域でまとめておきたい。

弥生～古墳時代中期前半　総社地区では積極的に弥生時代に遡る遺跡は知られて無いが、南方約２㎞の高崎市日高遺跡（21）や新保田中村前遺跡（20）では弥生中期～後期の集落が知られている。特に日高遺跡（21）では浅間Ｃ軽石下から水田跡が確認されている。総社砂層の堆積範囲の南端に相当する地形変換部に相当し、湧水を狙った集落設営とすれば当該期遺跡の在り方を示すものとして興味深い。

古墳前期になると総社地区にも遺跡が進出し、元総社普海遺跡群では前方後方形の可能性をもつ周溝墓も確認されているが、集落共々小規模なものである。同様の事例は井野川水系の高崎市熊野堂遺跡(30)にもある。なお、当該期の主要な古墳はより標高の低い前橋台地縁辺に集中（朝倉・広瀬古墳群中の前橋天神山古墳や八幡山古墳、高崎市元島名将軍塚古墳）することから、中心となる生産基盤も当然前橋台地上に求められよう。総社地区の古墳前期の遺跡は、通常は低地を指向する当該期の在り方よりも、谷津田に依存するような弥生後期社会の延長線上にあったものと考えられる。

古墳中期前半の遺跡は、総社地区では不鮮明であるものの、前期からの継続的様相と考えられる。総社古墳群中の大小路山古墳（へ）が、過去に採集された埴輪から当該期の可能性が指摘されているが、未調査であり詳細は不明である。中期前半の古墳は高崎市倉賀野地区等の烏川流域に集中していることを考えれば、総社地区周辺に遺跡が少ない点も合点がいくところである。

古墳時代中期後半～後期前半　中期後半になると、総社地区とその周辺には遺跡が急増する。南西方向の高崎市井出村東遺跡（31）も同様で、標高の高いエリアに開発の手が伸びるようである。高崎市三ツ寺Ⅰ遺跡（32）や北谷遺跡（36）では、「豪族居館」と言われる河川を取り込んだ大規模な遺構が検出されているが、これを単に豪族の住まいではなく、祭祀権と水利権を豪族が具象化する施設と読み替えれば、当該期における開発の到達点を示していると言えるだろう。古墳についても総社古墳群中の遠見山古墳（ホ）や地図外だが保渡田古墳群の井出二子山古墳、八幡塚古墳、薬師塚古墳等、大規模な前方後円墳が築造されており、三ツ寺Ⅰ遺跡（32）周辺の集落遺跡群に対する保渡田古墳群などは奥津城と呼ぶに相応しい。これらの遺跡・古墳からは渡来系遺物の出土も確認されており、当該期に高標高エリアへと開発の手が伸びる現象の背景として興味深いものがある。

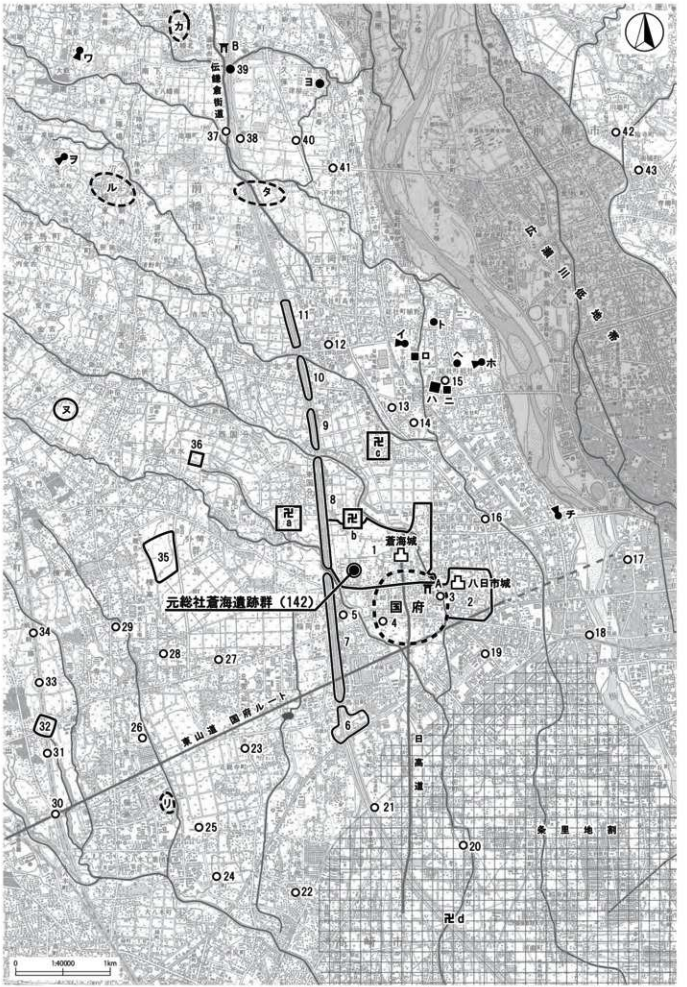


Fig.3　元総社蒼海遺跡群（142）の周辺遺跡

「元総社蒼海遺跡群（127）Fig.3」を改変

Tab.1　周辺遺跡一覧

集落											
		14	大屋敷遺跡	28	榛高村北遺跡	42	日輪寺観音前遺跡	ヲ	高塚古墳		
1	元総社蒼海遺跡群	15	総社町屋敷遺跡	29	榛高南八幡街道遺跡	43	南橋東原遺跡	ワ	大蔵城山古墳		
2	元総社寺田遺跡	16	大渡道場遺跡	30	熊野堂遺跡	古墳・古墳群		カ	南下古墳群		
3	大友屋敷遺跡	17	前橋城	31	井出村東遺跡	イ	総社二子山古墳	ヨ	三津屋古墳		
4	天神遺跡	18	石倉下宅地遺跡	32	三ツ寺Ⅰ遺跡	ロ	愛宕山古墳	タ	清里長久保古墳群		
5	弥勒遺跡	19	元総社稲葉遺跡	33	三ツ寺Ⅱ遺跡	ハ	宝塔山古墳	神社			
6	中尾遺跡	20	新保田中村前遺跡	34	三ツ寺Ⅲ遺跡	ニ	蛇穴山古墳	A	総社神社		
7	鳥羽遺跡	21	日高遺跡	35	榛高遺跡群	ホ	遠見山古墳	B	三宮神社		
8	上野国分僧寺・尼寺中間	22	小八木村東遺跡	36	北谷遺跡	ヘ	大小路山古墳	寺院			
9	国分境遺跡	23	正観寺遺跡Ⅰ～Ⅳ	37	池端北耕地下ノ割遺跡	ト	稲荷山古墳	a	上野国分寺		
10	北原遺跡	24	小八木志志貝戸遺跡	38	七日市遺跡	チ	王山古墳	b	上野国分尼寺		
11	下東西遺跡	25	正観寺西原遺跡	39	大久保Ａ遺跡	リ	諸口古墳群	c	山王廃寺		
12	柿木遺跡	26	中原原十内遺跡群	40	熊野・辺玉遺跡	ヌ	金古如来古墳群	d	新保廃寺		
13	村東遺跡	27	菅谷万年貝戸遺跡	41	金竹西遺跡	ル	長久保古墳群				

後期初頭には、それまでに円熟した社会を榛名山の火山災害が覆う。榛名山二ツ岳形成期の火山活動に相当するこの火山災害は Hr-FA と呼ばれ、大規模な火砕流による火山灰降下と、その後の洪水堆積物として認識される。特に後者は河川の谷筋に沿って厚く堆積しており、その直下から水田跡が検出される事も普遍的である。逆を言えば可耕地の多くが埋もれてしまい、中期中頃からの開発が進んだ社会は一旦のリセットを余儀なくされる。総社地区では河川の刻む谷筋が深い為、谷津田は埋没して放棄されているが、集落自体は影響も少なかったのか存続している。周辺では FA を鋤き込んだ畝状遺構が広く検出されるので、水田から畑へと、生産基盤を変えて復興を果たしたのかもしれない。

後期前半の墳墓として、総社古墳群南端の王山古墳（チ）は初期横穴式石室を備えた前方後円墳で、火山災害の軽微だった地域の復興期に築造された記念碑的存在と考えられる。また、後期中頃には標高 220 m前後に榛東村高塚古墳（ヲ）や吉岡町大蔵城山古墳（ワ）といった中規模の前方後円墳が出現しており、標高の高いエリアの開拓を進めた歴代指導者の奥津城と言えるだろう。

古墳時代後期後半　榛名山火山災害後の復興的様相がさらに発展し、標高 150 m程度まで大小の集落遺跡が連綿と点在する様相へと至る。今回報告する元総社蒼海遺跡群とその周辺では、これまでの調査で夥しい数の竪穴建物跡が検出されており、大形竪穴建物跡を複数軒伴うような「普通」では無い集落遺跡の片鱗が見えつつある。

後期後半の墳墓としては、総社地区の北部に総社二子山古墳（イ）と総社愛宕山古墳（ロ）が相次いで築造されている点は示唆的である。**総社二子山古墳**（イ）は全長 90 mを超える前方後円墳で、葺石・埴輪をもつとされる。後円部に角閃石安山岩の加工石材を用いた横穴式石室、前方部に安山岩乱石積の一回り小さい横穴式石室をもつ。２つの石室に時期差が存在するか否かは明らかにし得ないが、前者は６世紀中葉に榛名火山から噴出した軽石を加工して用いる特徴的な石室構造で、高崎市綿貫観音山古墳（全長 98 mの前方後円墳）に代表され、利根川中流域に広くその分布をもつ。一方の後者は榛名山南東麓に通有のもので、榛東村高塚古墳（ヲ）等がそのプロトタイプとなろうか。つまり２系統の石室を一つの墳丘に内包する総社二子山古墳（イ）は、２系統の集団によって構築された前方後円墳であった可能性が考えられる。なお、前方部石室からは過去に頭椎大刀の優品が出土していることが絵図によって知られるが、一般にこの種の大刀が物部氏との関係で議論されることがある点は興味深い。続く**総社愛宕山古墳**（ロ）は一辺 56 mの大方墳で、近年の調査で幾重にも墳丘を覆う葺石が確認され、後期初頭の王山古墳のそれを彷彿とさせるものであった。安山岩乱石積の大規模な横穴式石室内には畿内にも引

けを取らない精美な刳抜式家形石棺が納められているが、残念ながら副葬品は不明である。とは言え本古墳が方墳であること、前方後円墳である総社二子山古墳（イ）に次いで築造されたと考えられることは重要である。同時期の畿内に目を転じると、奈良県桜井市赤坂天王山古墳が墳形・規模、家形石棺をもつという点で酷似しているが、葺石や横穴式石室構造に在地の伝統が見え隠れしている。なお、赤坂天王山古墳は崇峻陵であるという森浩一の説が有力視されているが、崇峻天皇が蘇我馬子と深い関係にあった点は興味深い。何れにせよ、畿内中枢部と深い関わりを持っていた事は確かであろう。

古墳時代終末期（飛鳥・白鳳期） 集落遺跡は元総社地区に広がり、竪穴建物跡の数は増加の一途を辿る。当該期後半には元総社蒼海遺跡群（9・10）で長大な掘立柱建物跡や区画溝が、山王廃寺（c）下層からは規則的に並ぶ掘立柱建物跡群も確認されており、これらは正方位に斜行する地割を指向している。特に後者建物跡群については、豪族居館や群馬評衙ないしはその前身である屯倉に関係する遺構群との理解があり、南方の元総社蒼海遺跡群等で夥しく確認されている同時期の竪穴建物跡についても、これに付随するものと考えられる。

墳墓として、まず総社古墳群中の宝塔山古墳（ハ）と蛇穴山古墳（ニ）について確認する。**宝塔山古墳**（ハ）は一辺 66 mの大形方墳で、三段築成で葺石をもつ。複室構造の横穴式石室は截石切組積の精美なものであるにも関わらずさらに漆喰を厚く塗って仕上げており、玄室に納められた脚部をもつ特異な刳抜式家形石棺には格狭間の意匠があしらわれている。格狭間は仏教文化の影響とされており、墳墓の事例としては大阪府太子町の聖徳太子墓の棺台が知られる程度である。また、横穴式石室はその平面形態が奈良県奈良市帯解黄金塚古墳（一辺 30 mの方墳）と酷似していることが指摘されている。帯解黄金塚古墳は蘇我石川麻呂の墓であるという奥田尚の説があり、総社愛宕山古墳（ロ）共々、蘇我氏との関わりが見え隠れする点は魅力的である。**蛇穴山古墳**（ニ）は一辺 44 mの方墳ないしは長方墳で、近年の調査では二重周溝で法面に葺石をもつ中堤の存在や、愛宕山古墳同様に幾重にも墳丘を覆う葺石の存在が明らかとなっている。石室は硬質の加工石材をパネル状に組み合わせた玄室と截石切組積の短い羨道とハの字状に開く前庭部という特殊な構造であるが、これは後世の改変であり宝塔山古墳同様の石室構造であったという話もある。石室内には漆喰が塗られ、玄室中央には棺台とされる大きな加工石がある。

群集墳については、元総社周辺では確認されておらず、総社古墳群北方の稲荷山古墳（ト）等、小円墳数基が点在する程度である。また、元総社地区を流れる染谷川・牛池川・八幡川・牛王頭川の上流部には榛東村長久保古墳群（ル）・前橋市清里長久保古墳群（タ）・吉岡町南下古墳群（カ）・高崎市金古如来古墳群（ヌ）があり、長久保古墳群（ル）は後期後半からの継続で、数十基が裾を重ねる程に密集し小規模前方後円墳を群中に伴う等、典型的な後期群集墳の様相を示しているが、清里長久保古墳群（タ）は小円墳の点在で石室内から鉄釘を出土する例が、南下古墳群（カ）は宝塔山古墳（ハ）に類似する截石切組積の精美な石室を伴う円・方墳が数基点在、金古如来古墳群（ヌ）は帯金具を多量に出土するものを含むといった様相で、元総社周辺集落に対する墓域とも考えられる。また、吉岡町三津屋古墳（ヨ）は明確な八角墳で截石切組積の横穴式石室をもち、やはり元総社地区との関係で理解すべきと思われる。

白鳳期には総社古墳群北方に**山王廃寺**（c）が建立される。前期評段階に創建された寺院としては上野唯一のもので、昭和・平成の二回におよぶ確認調査が行われ、出土瓦に見られる線刻・押印から旧寺名が「放光寺」であった可能性が考えられる点、塔跡周辺から出土した大量の塑像から畿内中枢部の寺院と深く関わる寺であった事が判明している。また、先述した**下層遺構を豪族居館や評衙・屯倉**とした場合、そうした重要施設を移動させて造営していることになり、極めて特異な事例である。また、塑像はその造形技術の水準が高く、作風は斑鳩法隆寺塔本塑像に類似しているという。奇しくもここで再び蘇我氏の影を見いだせる点は、総社愛宕山古墳（ロ）から蛇穴山古墳（ニ）への流れに沿う事象と言い得る。

また、**東山道駅路**の開鑿もこの時期で、今日までの研究によって「牛堀・矢ノ原ルート」→「下新田ルート」

→「国府ルート」へ3時期・3ルートの変遷が定説となっている。最初の「牛堀・矢ノ原ルート」は太田―伊勢崎―高崎の平野部をほぼ東西の直線で通ることが発掘調査により判明している。元総社エリアからは遠く南方であり、その間を南北に繋ぐ連絡路として「日高道」が以前より指摘されているが、開鑿時期については不明である。

奈良時代　元総社蒼海遺跡群の南東、総社神社に近い一帯で竪穴建物跡が姿を消す。代わりに正方位の区画溝や掘立柱建物跡、基壇建物が出現する。無論、元総社エリア内に以前より推定されている**上野国府**との関わりで理解されると考えられるが、国府域の一角に設けられたと考えられる**群馬郡衙**も視野に入れた調査が望まれる。現在前橋市教育委員会による確認調査が継続中であり、今後の動向が注目されるところである。また、やや標高の高い前橋市池端北耕地下ノ割遺跡（37）では廂をもつ大規模な掘立柱建物跡が単独的に検出されており、その性格については不明であるが、前時代の南下古墳群（カ）や三津屋古墳（ヨ）等が近傍であることを勘案すれば、国府の出先施設等の可能性もある。他にも高崎市棟高南八幡街道遺跡（29）では、布掘の掘立柱建物跡や大形竪穴建物跡からなる公的な雰囲気をもつ遺構群が検出されており、郷の中心的な施設である可能性も考えられる。

推定国府域の西方には、**国分寺**（a）**・国分尼寺**（b）も建立される。上野国分寺（a）は昭和の調査成果からある程度の整備が行われていたが、近年群馬県教育委員会の再調査で伽藍配置が異なることが判明しており、その研究は新たなスタートラインに立っている。国分尼寺（b）は近年高崎市教育委員会によって確認調査が進められており、これまで不鮮明であった伽藍配置が判明しつつある。

一方で国府周辺域を含め、古墳時代以来の生産域の再編が行われる。前橋・高崎台地とその間の井野川低地帯を包括する**広域条里**の施工である。前橋市南部拠点地区遺跡群№ 11 では坪交点からまとまった土器の出土が確認され、施工年代を示している。また、条里の施工に伴い**用水路網**の整備も行われており、前橋台地では広瀬川から取水した用水路網（女溝や川曲大溝）が、高崎台地から井野川低地帯では榛名白川から取水した用水路網（後の長野堰用水）が開鑿されたと考えられる。これらの用水路からは発掘調査によって「物部」と記した遺物が出土している点は注目される。また、交通網の整備も行われたと考えられ、高崎市倉賀野地区や新保・日高地区では条里余剰帯を利用した道路跡と推定される遺構が検出されている。当該期前半に想定される東山道駅路の「下新田ルート」も現状広瀬川以西では未確認だが、おそらく条里余剰帯を利用したものであったと推定される。なお、当該期における条里施工は確実であるが、先行する飛鳥時代にその設営に関わると推定される短命な集落遺跡が点在していることは興味深い。本地域における条里施工時期は今後も検討を深める必要がある。

平安時代　国府域やその周辺では、集落・寺院・条里は前時代からの継続と理解されるが、集落は標高の高いエリアに集中する傾向が指摘できる。高崎市棟高遺跡群（35）や吉岡町大久保A遺跡（39）はその規模も大きく、多くの施釉陶器や瓦塔の出土は注意される。これら標高の高い位置に新たに成立した集落はその生産基盤に水田以外を想定せざるを得ないもので、畑作や馬匹生産を視野に置く必要があるだろう。特に大久保A遺跡（39）については、関越自動車道建設に伴う調査・報告時に「有馬島牧」の可能性も示唆されたが、その後渋川市半田中原遺跡から「有牛」墨書土器が出土したことで牧関係遺跡説は否定された経緯がある。現状では三宮神社（B）が北に隣接して鎮座していることや、古代伝路の可能性がある「鎌倉街道」沿いに位置する点から、群馬郡桃井郷の中心的集落であると考えられる。何れにせよ、それら集落の成立背景は条里水田の荒廃と対をなす現象と言えるのだろう。

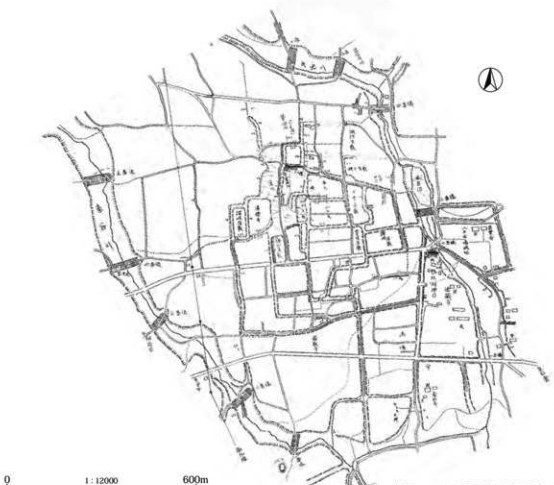
古代末～中世　元総社地区に蒼海城が築城される。その詳細な時期や成立過程については不明な部分が多いが、『上野伝説雑記拾遺』「総社記」には長元元年（1028）に城館の存在を示す記述があり、実際の発掘調査成果でもこれを肯定しうるような古代末の遺構・遺物の集中が蒼海城中枢部で確認されている。しかしながら大規模な堀を巡らし高い土塁を伴うようなイメージのものではなく、遺跡としての実体は「区画溝に囲まれた何か」であり、居宅のようなものと推察される。また、『吾妻鏡』には、治承四年（1180）に元総社地区を支配していた源

氏方の千葉常胤の居宅を平氏方の足利俊綱が焼き払ったとの記述があり、まさにその千葉氏の居宅が蒼海城初期の姿であったと思われる。

その後、建武四年（1337）に山内上杉憲顕が上野国守護となり、上杉氏の家宰である長尾氏が 14 世紀中頃までに入部したと考えられ、長尾氏は白井城の白井長尾氏と蒼海城の総社長尾氏とに分立し、守護代として栄えていく。享徳三年（1454）に始まる享徳の乱は東国全域を巻き込んだ戦乱となり、上野国でも長尾景春の乱（文明九年・1477）や長享の乱（長享元年・1487）が相次いで勃発する。これらの戦乱を契機に蒼海城は防御機能を強化し、城郭化したと考えられている。

大栄七年（1527）には北条氏綱方の白井・総社長尾氏と箕輪・厩橋長野氏の間で抗争が勃発、蒼海城は長野方業の攻撃を受けている。後に両長尾氏は上杉家との関係修復を果たすも、長野氏とは依然緊張関係が続いた。永禄九年（1566）、甲斐国の武田信玄によって箕輪城が落城、翌年には蒼海城も攻略されて上野国西部は武田氏の支配域となる。

その後、元総社地域は武田・上杉・織田・北条の支配が繰り返され、天正十八年（1590）の小田原城落城によって徳川家康の支配域となる。蒼海城には同年に諏訪頼忠、慶長六年（1601）にはその子である諏訪頼水に替わって秋元長朝が入部する。秋元氏は荒廃した蒼海城を捨てて父景朝ゆかりの地である上野勝山（現在の総社町）に新城を築くことを選んだようで、新城が完成するまでの間は蒼海城の東方牛池川対岸の八日市城に居住し、慶長十五年（1610）に完成した新城である総社城に入城した。これをもって蒼海城は廃城となった。総社に「元」がつく地名の由来もここにある。



山崎一　1978『群馬県古城塁址の研究　上巻』より作成。

Fig.4　蒼海城縄張図

Ⅲ　調査の方針と経過

1　調査の基本方針

今回の発掘調査は、区画整理事業地内の道路新設に先立つものである。直前までアパート二棟が建っていたが、それ以前は水田であり、従って厚い盛土層上にアパートは建てられていた。こうした経緯もあり、南北の道路部分の発掘調査（元総社酋海遺跡群（122）・元総社草作Ⅴ）の成果を参考に、事前の確認調査は行わずに本調査となった。

現地調査は先ず、昭和後半と思われる厚い盛土層をバックホウによって後退しながら掘削し、ダンプトラックで南方路線内へ搬出した。盛土下は昭和の水田耕作土で、その下には灰褐色の旧水田耕作土、さらにその下からはAs-Bを多量に含む黒褐色砂質土(いわゆるB混土)が確認された。B混土は調査区北側に向かって厚くなっており、地形的には調査区北半は埋没谷にかかる事が先行トレンチによって予想された。ひとまずこのB混土直下で掘削を止め、中世面として遺構確認と調査を行った。なお、この中世面はそれを覆うB混土の下面という条件設定であった為、As-Bの混入する遺構以外の検出は絶望的であった。掘り上げた中世遺構の底面や近年の攪乱坑には、古代の竪穴建物やそれに伴う竈が見える状態で、中世面直下は厚さ10cm前後の遺物包含層的な黒色土であることもわかった。

このような状況から、以下の古代以前の遺構調査に際しては公共座標に準拠した4ｍピッチの格子状にベルト（土層観察畦）を残して掘り下げ、細かい遺物はグリッド単位で一括取り上げ、大きい遺物は位置記録を作成した。遺構の様子がおぼろげながら見えてくるとベルトは邪魔となるが、残される遺構覆土が薄いことから新たに遺構毎にベルトは設定せず、基本最初のベルトを優先させた。

2　調査経過

令和３年４月20日、表土除去開始。表土は調査区南方の道路用地へ搬出。膨大な排土の為、４月28日まで実施。連休明け５月６日から作業員を投入して人力精査。中世面調査。

中世遺構調査後、調査区南半で既に確認される古代の竪穴建物跡の掘り下げに着手すると共に、５月18日からは北半にグリッドに沿った方眼ベルトを残し、小型重機を用いて総社砂層上面まで掘り下げ。

６月、空梅雨で作業は順調に進んだが、７月に梅雨明けした途端に頻繁な雷雨被害を度々受ける。特に駐車場・事務所用地としていた調査区北側道路予定地は谷地形の影響で低く、１ｍ近い浸水も数回あった。調査区も壁面の崩壊や土砂の流入によって作業は進まず、遺構掘り下げがほぼ完了した７月16日にはドローンによる空撮、中世竈の人骨を発砲ウレタンで保護して取り上げ、７月28日には文化財保護課の完了立会いを受けた。なお、完了立会い直後、残る記録作成と思った矢先の豪雨は最悪で、発電機は水損、調査区の復旧も数日を要した。乾燥を待って８月７日には埋め戻し開始、平行して古代の井戸跡の断ち割り調査と、水路北側狭小部のトレンチ調査を行った。この北トレンチの西端からは古代の土坑（土取坑か）が１箇所確認されたが、確認面まで深い上に湧水が激しく、精査は断念し平面記録の作成に止めざるを得なかった。埋め戻しは転圧を行いながら、８月12日まで要した。

北トレンチの様子

整理作業と報告書作成は、調査終了後直ちに開始、９月末までには遺物の水洗・注記・接合、10月から遺物実測に着手、点数多く11月まで要した。文化財保護課と区画整理課との協議を経て履行期間延長の変更契約を締結し、報告書作成と編集は翌令和４年１月末まで行い、２月末日に本書の刊行に漕ぎつけた。

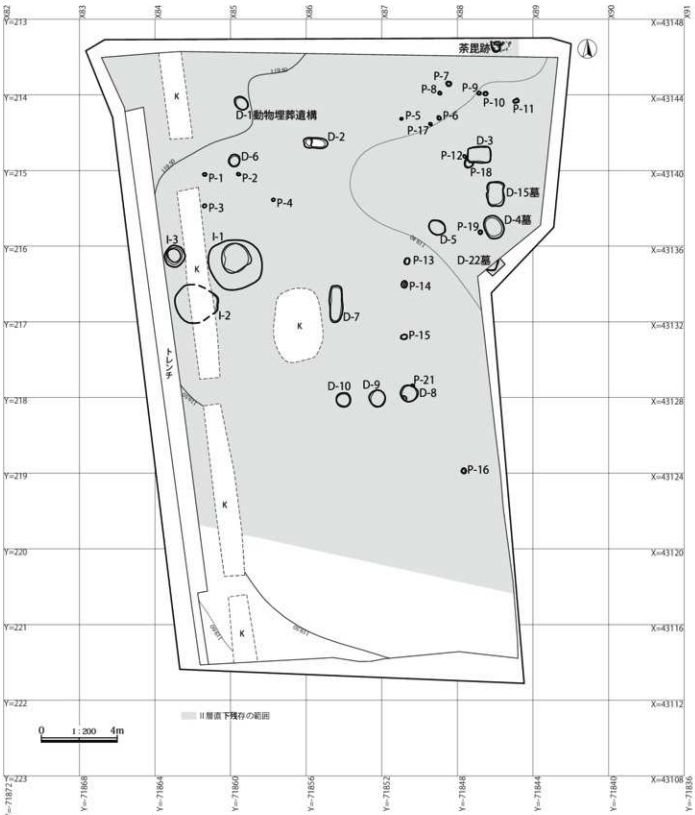
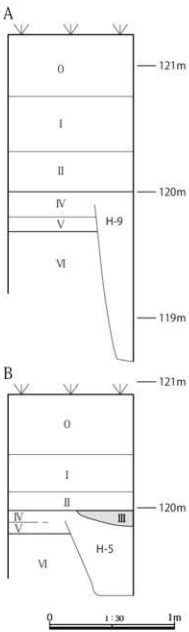


Fig.5　元総社蒼海遺跡群（142）全体図〔中世面〕

Ⅳ　基本層序

調査区は染谷川の旧流路由来の埋没谷にかかり、かつ調査直前までアパートとして土地利用がなされていた為、全体として深く、遺構の保存状態も良好であった。以下、本地点における基本層序を示す。

0	砂礫土	昭和後半の宅地造成に伴う盛土。	Ⅳ	黒褐色土	As-C を含む。いわゆる C 黒。
Ⅰ	灰褐色土	As-A 等を含む砂質土壌。旧耕作土。	Ⅴ	淡黒褐色土	しまり強い。いわゆる黒ボク。
Ⅱ	暗灰褐色土	As-B 軽石を含む。いわゆる B 混。	Ⅵ	淡黄褐色土	総社砂層。
Ⅲ	灰褐色砂	As-B 軽石。			



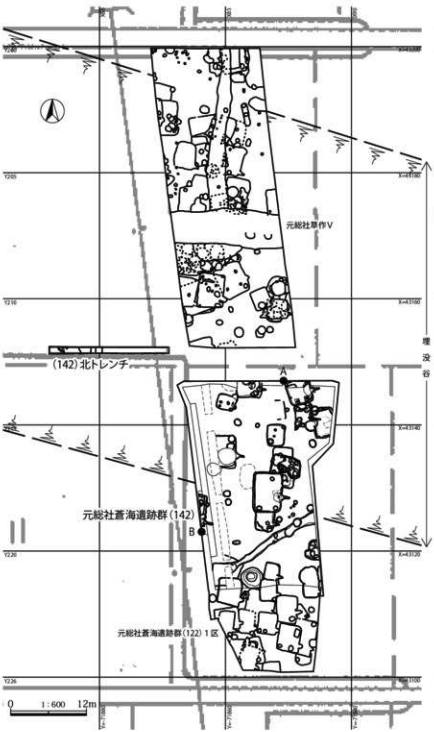


Fig.6　近隣調査区と旧地形

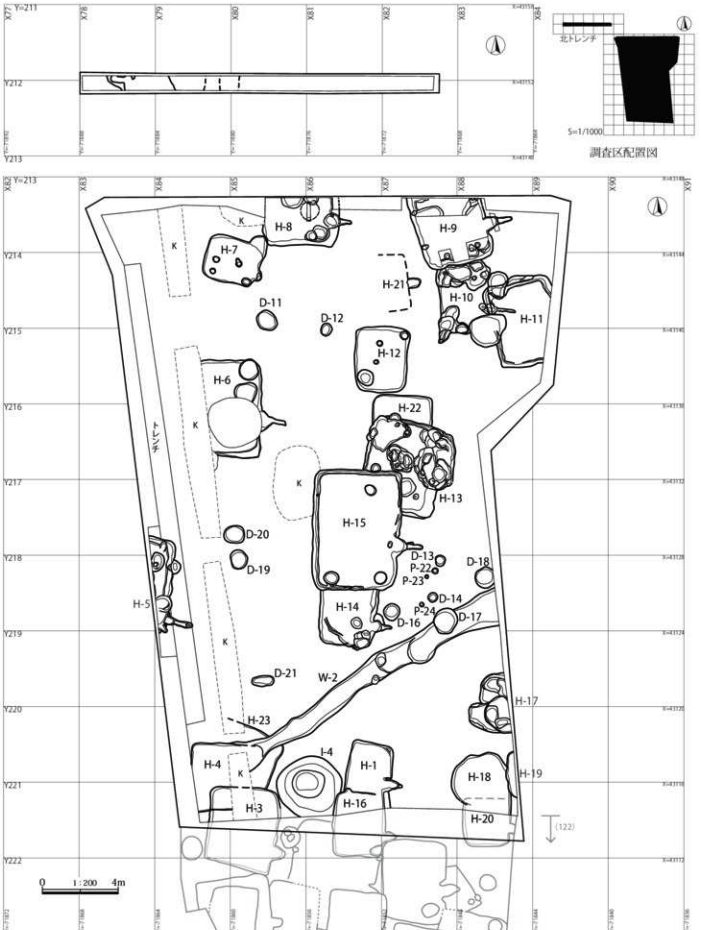


Fig.7　元総社蒼海遺跡群（142）全体図〔古代面〕

Ⅴ　検出された遺構と遺物

今回の調査区は、南に平成 28 年度実施の元総社蒼海遺跡群（122）1 区が接し、北には現行の水路を隔てて平成 14 年度実施の元総社草作Ⅴ遺跡が位置しており、検出遺構や出土遺物といった成果は予め予想可能な状況での着手であった。実際の発掘調査は谷地形の中に位置することもあり、火山灰の関係から都合二面で実施し、上を中世面、下を古代面として扱った。遺構としては古代面で古墳～奈良・平安時代の竪穴建物跡と溝跡・井戸跡・土坑が、中世面では土坑・墓跡・井戸跡等が検出され、出土遺物としては遺構こそ検出されなかったが縄文時代まで遡る。本章では遺構と遺物について、調査面に準じて説明する。

（1）　原始・古代の遺構と遺物

今回調査区の中心的存在で、上野国府域と目される元総社蒼海遺跡群の中でも主体となるものである。計測数値等については一覧表を参照されるとし、各遺構・各遺物について説明を行っていきたい。

①　竪穴建物跡　合計 23 軒、竪穴状遺構の可能性があるものを含む。H-2 とした遺構は調査途上で確実に井戸跡であることが判明したが、混乱を避ける意味で欠番扱いとする。以下、遺構毎に説明する。

H-1 竪穴建物跡　調査区南端に位置し、H-16（（122）1 区 H-12 と同一遺構）を切っている。竪穴部は南北に長い長方形であるが、南壁は（122）1 区の調査により失われていた。従って長辺長（南北長）については不明である。床面は竈前を中心に硬化し、浅く円形の土坑が床下から確認されたが、本遺構に伴うかは不明である。柱穴については確認出来なかった。竈は東壁の中央やや南寄りから検出された。竈内と前面からは多数の瓦片が出土しており、構築材として使用されたものと考えられるが、竈廃棄の際に破壊されたようで構築部材としての位置を留めると判断できるものは無い。また、竈に向かって左右で竪穴部壁下端は食い違っており、右側には棚状施設があったと判断できる。遺物については、先の竈に関わる瓦片以外に、比較的残存率の高い土師質土器の坏類や灰釉陶器皿、羽釜片、不明銅製品が床面上や床面からやや浮いた状態で出土している。本遺構は遺物から 10 世紀前半に位置づけられる。

H-3 竪穴建物跡　調査区南西隅に位置する。南過半は（122）1 区 H-12 として調査され、鉄製馬具（轡）が出土していた。竪穴部は南北に長い長方形、竈は（122）調査で東壁の南寄りに確認されている。また、H-4・23 を切り、中央は（122）調査以降に設置された下水管の埋設によって南北方向に大きく攪乱・破壊されている。炭化材の検出によって焼失建物であることが知れるが、上屋構造について明らかにしうる状態では無い。機能停止後の焼却処理の可能性も十二分に考えられる。柱穴は確認出来なかった。遺物は灰釉陶器の埦・有段埦・内黒土器の埦があるが、（122）の調査では先述の馬具以外に羽釜や厚手の武蔵型土師器甕も出土している。遺物から 10 世紀前半に位置づけられる。

H-4 竪穴建物跡　調査区南西隅に位置し、H-23 を切り、H-3 に切られ、中央は下水管埋設で攪乱・破壊されている。竪穴部はやや南北が長い正方形気味の長方形のようで、複数面の貼床を断面で確認したが、柱穴は確認できなかった。竈は位置関係からすると下水管埋設によって破壊されたらしい。遺物としては須恵器高台付坏や土師器坏・土釜・灰釉陶器長頸壺・環状鉄製品が出土している。土釜は H-3 に伴う可能性がある。残存率の良い須恵器坏を根拠とすれば 9 世紀後半に位置づけられる。

H-5 竪穴建物跡　調査区西壁中央に絡む位置で、大半は調査区外となる。覆土土位には As-B の一次堆積層があり、竪穴部はやや南北が長い長方形と推定、柱穴は不明、床面は不明瞭で、床面から掘り込まれる土坑が複数存在し、壁際には棚状の掘り残しが巡る。竈は南東隅に新旧 2 箇所確認され、新竈は長煙道で煙管状であるが袖は確認出来なかった。旧竈は短く小振りであるが良く焼けており、構築材と思われる丸瓦と羽釜片が重ねて伏せ

られ、焚口側は複数の瓦石によって閉塞されたかのような状況であった。竈の在り方、竪穴部壁際の棚状施設の存在からは入籠状に2軒重複している可能性も考えたが、断面観察の所見では否定的であった。遺物は旧竈出土の瓦と羽釜（甑か）・土釜以外に、棚上から出土した土師質土器の小皿、覆土中から出土し白磁碗片、大型の釘か鎹と思われる鉄製品がある。著しく小型化した土師質土器小皿の形態からは11世紀代、覆土上位のAs-B堆積を重視すれば11世紀後半と考えたい。

H-6 竪穴建物跡　調査区北西に位置し、中世の井戸跡I-1・2に切られ、下水管埋設によって1/4を失っている。竪穴部は南北に長い長方形、南壁には棚状施設がある。床面には浅く円形の土坑が2基（D1・D2）掘り込まれていた。柱穴は確認できなかった。竈は東壁中央やや南寄りから検出された。前面は中世井戸によって失っているが、燃焼室奥から煙道にかけては良く遺っていた。煙道が煙管状を呈する長煙道タイプで、燃焼室奥の横断面土層観察では、空焚きに伴う被熱の内側に煙道口が確認できた。燃焼室の手前は大きく単層の範囲が確認でき、廃絶時に破壊された結果と思われた。遺物は覆土中を中心に土師質土器の皿、灰釉陶器埦、羽釜、須恵器甕片（竈内下層）、不明鉄製品が出土している。灰釉陶器埦の一つには口縁部に油煙が多数付着しており、灯明として長く使用されたことが窺われる。本遺構は遺物から10世紀前半に位置づけられる。

H-7 竪穴建物跡　調査区北端近く西寄りに位置し、H-8を切っている。竪穴部は東西にやや長い長方形で北側の一部は張り出し状に不整形を呈する。浅く小型であるが、柱穴1箇所、貯蔵穴が確認された。竈は東壁の南寄りから検出された。馬蹄形で壁以外に竈前面に被熱範囲が広がっていることから、竈外でも調理等を行っていた可能性がある。遺物は床面中央と竈内から土師質土器の小皿が、床面中央の石も作業台として使用された可能性がある。本遺構は遺物から11世紀代に位置づけられる。

H-8 竪穴建物跡　調査区北端中央に位置し、H-7に切られている。また、調査区壁の断面には別の竪穴建物跡の断面がある（H-8bとする）。北側が調査区外となる為に全容は不明だが、竪穴部は方形、床面から貯蔵穴1箇所（浅く皿状の部分と円形土坑状の組み合わせ、新旧の可能性もあるか）と床下土坑1、床面からの土坑2が確認された。竈は東壁の南寄りから検出され、両側には棚状施設がある。貯蔵穴は竈の右側に相当する。竈は門柱状の立石（硬砂ブロック、左側は抜き取られている）による幅広の焚口、燃焼室手前には火床面、その奥に支脚状の立石が2石並立し、一段立ち上がってやや長い煙道部に至り、煙道出口は被熱で赤化している。遺物は竈内から貯蔵穴にかけての床面付近から土師質土器の坏・埦・羽釜が出土しているほか、覆土中から灰釉陶器の埦・段皿・短頸壺、古青磁碗の破片が出土している。また、南西床面上から須恵器大甕片を転用した作業台？や河原石の菰編石もある。本遺構は遺物から10世紀前半に位置づけられる。

H-9 竪穴建物跡　調査区北端東寄りに位置し、H-10に切られ、北側が調査区外となる為に全容は不明だが、竪穴部は方形である。床面はあまり硬くなく、この面では壁際から柱穴（壁柱穴）が3箇所確認されただけであったが、部分的に掘方を剥がしたところ新たに柱穴（主柱穴）を3箇所確認した。終盤に水害を受ける中で不満足な調査であったが、壁柱穴と主柱穴に2箇所一対となる状況があること、床下から主柱穴が遅れて確認された状況からは、対角線上に4箇所配置の主柱穴で上屋を支持する段階から、壁柱穴の段階へと改修されたものと考えられる。床面が硬くない点もこの改修との関係が窺われる。竈は東壁の南寄りにあり、一回り大きい掘方内に部分的に石を使用して構築していた。袖部はわからなかったが、竪穴壁延長上に火床があり、燃焼室奥で一段上がって長い煙道部へ至る。掘方内の石は煙道入口両側に相当する。空焚き時の被熱は右壁で顕著であったが、使用時の造作については判然としなかった。竈の右手前の竪穴部隅は貯蔵穴が疑えるが、掘方調査でも判然としなかった。遺物は竈崩壊土上や床面上から土師器甕・坏、須恵器坏が出土しているほか、床面上からは不明銅製品（鋲部分、蛇尾か？）も出土している。本遺構は土師器の様相（武蔵型甕と北武蔵型坏の組み合わせ）から、8世紀前半に位置づけられる。

H-10 竪穴建物跡　調査区北東に位置し、H-9・11を切っている。竪穴部は概略正方形であったようだが、後

述するように床面上から土坑が5基開削され、そのプランを歪めている。中央部分は床面が残存しており、硬化していた。床面からの土坑は竪穴部壁を狙って掘削され、鍋底状である。土坑は基本的に基盤の総社砂層上位の白色粘土化した粘質土を採掘したようで、複数回掘削した状況や、ブロック状に切り出した雰囲気の窪みもあり、基本的には土取坑と呼ぶべきものである。しかしD-4としたものについては、規模も小さく、竪穴部の外に向かって抉り込まれており、貯蔵穴の可能性がある。竈は土取坑が両側に迫っているが残されており、意図的に避けたように思われた。左袖は廃絶時に撤去されたのか残存していない。右側は土取坑に背面を切られているものの残存しているが、上位は焼土塊が乱雑に覆っており、廃絶時に大きく破壊されたようである。燃焼室の奥は少し上がり、細長く煙道出口に向かって上った後、直に立ち上がる。煙道は断面方形で、両側面は土師器の如く焼結し、底面は被熱こそしていないが藁状の炭化物が残されていた。空焚きの結果と思われるが、その方法を考える上で興味深い。つまり藁束のようなものを詰め物として煙道天井を被覆し、焼いてこれを取り除いて固めたように思われた。煙道部の入口には硬砂ブロックが高架された状態で確認されたが、これは恐らく燃焼室の天井材の一番奥の一つと考えられる。遺物は土坑や竈から多く出土しているが、特に貯蔵穴と疑われるD-4や竈右脇のD-3には竈材と思われる硬砂塊や石材が多かった。出土遺物から本遺構は10世紀後半に位置づけられる。

H-11 竪穴建物跡　調査区北東端に位置し、H-10に切られ、東側の一部が調査区外となる。竪穴部は南北にやや長い長方形で、比較的硬化した床面で、壁周溝が巡るが柱穴は検出できなかった。竈は調査区外となるようで未確認であるが、床面の硬化状況からは東壁の南寄りにあると考えられる。遺物は床面から少し浮いた状態で竪穴部中央にややまとまる他、南壁下の出入口直下と推定される位置から土師器坏や土師器甕片が、南西隅からは菰編石が13点集積されたかのような状態で出土している。本遺構は土師器の様相（武蔵型甕と北武蔵型坏の組み合わせ）から、H-9とほぼ同時期、8世紀前半に位置づけられる。

H-12 竪穴建物跡　調査区中央北寄りに位置する、竈の無い小規模な竪穴である。底面には土坑・ピットがあるものの平坦で、硬化面等の床として使用された痕跡は確認できなかった。中世の方形竪穴のような半地下倉庫か、あるいは掘削途中で放棄された竪穴建物の可能性もある。覆土上には調査段階でW-1と付した、As-Bの一次堆積で認識される短い溝があった。この溝状の窪みは耕作痕の一種と考えられたので欠番とするが、1108年段階での本調査地点が畑であったことを傍証するものとして興味深い。建物としての根拠は薄いがピットや土坑を伴っているので竪穴建物跡とした。遺物は覆土中から少量出土しており、灰釉陶器長頸壺片や土師質土器皿底部を転用した土器片製円盤、軒平瓦片がある。本遺構はAs-Bの堆積を重複し、11世紀後半に位置づけておきたい。

H-13 竪穴建物跡　調査区中央やや北に位置する。竪穴部は南北に長い長方形で、H-15・22を切っているが、H-15を切る部分は床面が不鮮明で上手く掘り上げられなかった。本遺構は複数の土取坑によって床面はおろか、竪穴部の平面形も歪められている。土取坑は複数の小土坑の拡張を繰り返したもので、部分的に抉り込んで白色粘質土を掘削したような箇所もあった。かような状態からか、明確な柱穴は確認できなかった。竈は東壁南寄りから残骸と言えるような皿状の焼土分布が確認されたが、これがはたして竈であったのかは疑わしい。むしろ土取坑によって失われた部分に本建物跡に伴う竈が存在していた可能性の方が自然と思われた。竈の対面、竪穴部の西壁沿いからは貯蔵穴と考えられる円形の土坑が2箇所確認され、旧貯蔵穴としたものは上に床面が貼られていた。遺物は覆土中に分布しており、特に南東側から投棄されたかのような分布の偏りがある。土師質土器の高台埦や小皿・羽釜のほか、灰釉陶器の埦・皿・瓶、小片だが緑釉陶器の埦も出土している。本遺構は遺物や切り合い関係から10世紀中頃に位置づけられる。

H-14 竪穴建物跡　調査区中央南寄りに位置する。竪穴部は南北に長い長方形で、H-15に切られている。また、断面のみの確認であるが本遺構とH-15には土坑が1基存在していた可能性があるが、後述するようにH-15の壁構築に伴う造作の可能性もある。床面は比較的硬く、浅い円形の窪みと溝状の窪みが確認されたが、柱穴は無かった。竈は東壁南寄りにあり、袖は確認できなかったが丸みを帯びた幅広の燃焼室とそこからすり上がる煙道

構造で、煙道入口付近には瓦片と石がブリッジ状に遺っていた。竈の右側、竪穴部の南東隅には貯蔵穴があるがあまり深くなく、数回掘りなおされた形跡がある。遺物は床面や竈内から散在的に出土しており、炭化物の存在から焼失ないしは撤去時の焼却処理の可能性がある。土師質土器の高台埦や小皿・羽釜、須恵器大甕片、灰釉陶器の埦、瓦、紡錘車と思われる鉄製品もある。本遺構は遺物や切り合いから 10 世紀初頭と考えられる。

H-15 竪穴建物跡　調査区のほぼ中央に位置する。竪穴部は南北に長い長方形で、H-14 を切り、H-13 に切られている。先述したように H-14 側の壁背後にもう一つ立ち上がりが断面で確認されたが、本遺構の壁を構築する際に柔らかい部分を改良した痕跡（単なる壁構築土も含む）の可能性がある。床面はあまり硬くなく、調査時の冠水によって断面確認となった部分も多い。その断面観察所見では浅い土坑上に床面の貼り土があり、基本的には床下土坑と呼ぶべきものである。掘方調査の結果では床下土坑自体の切り合いも認められるので、床を掘って埋める行為が累積された結果と理解され、湧水対策（除湿）がその意図ではなかったかと思推される。床面には被熱した部分もあり、火を使う何らかの作業がここで行われていたことを伺わせる。柱穴は対角線上で 5 箇所確認され、特に南側の 2 箇所は掘え換えや位置を変えた状況であることから、少なくとも改修 1 回を見込める。床下土坑の累積も改修を挟んで比較的長期にわたり本遺構が使用されたことに起因するのだろう。竈は東壁南寄りにあり、幅広の燃焼室から緩く昇り勾配の煙道出口は垂直に立ち上がり、煙管状をなす。袖は短く確認され、右袖に硬砂ブロックと土器片が使用されており、燃焼室左奥にも同様のブロックが使用されている。燃焼室の焚口部には火床が形成されており、その下には焼土塊を含む土で埋まるピットが確認された。おそらく改修時の造作と思われ、床面や柱穴と同様の所見である。竈の右側である竪穴部南東隅とその対面である南西隅には貯蔵穴があり、竈脇が旧貯蔵穴、対面が新貯蔵穴である。旧貯蔵穴は上を床構築土が覆っている。なお、本遺構堆積土上位には薄い灰層がレンズ状に確認され、埋没途上の窪地が廃材等の焼却処理の場に供されていたことを予想させるが、一般集落遺跡ではあまり見ない状態である。遺物は土師質土器の高台埦や小皿、灰釉陶器の埦・瓶、軒丸瓦（国分寺）、刀子や鏃と思われる鉄製品のほか、鐸等の可能性がある鋳造鉄器片もある。本遺構は遺物と切り合い関係から 10 世紀中葉に位置づけられる。

H-16 竪穴建物跡　調査区南端中央に位置する。H-1 に切られ、大半は（122）1 区で H-12 として調査されている。既調査部分も含めて見ると、竪穴部は南北に長い長方形で、竈は東壁南寄りにあって、竈右側の南東隅には貯蔵穴がある。今回調査部分の北壁には小さく張り出す部分があるが、これは H-1 の床下にあるため、つまり掘方の影響も排除できない。遺物については少量の土器破片があったが、図示するに至らなかった。（122）報告に順じ、9 世紀後半に位置づけられる。

H-17 竪穴建物跡　調査区南東端付近に位置し、東側が調査外となる。複数の土坑が重複した状況で、調査段階では竪穴建物の竪穴部から土取坑が掘り込まれた結果と考え、今もその可能性を捨てきれない。とは言え南北幅が 3 m程度と小さく、竪穴部が東西軸の長方形としない限り不自然なのも事実である。竪穴状遺構とすべきかもしれない。遺物は土師器坏がある。時期については土師器坏の形態から、7 世紀前半に位置づけられる。

H-18 竪穴建物跡　調査区南東端に位置し、H-19・20 に切られている。調査終盤に集中豪雨による冠水被害を受け、平面形態の詳細を検討することなく崩壊してしまったが、結果として隅丸方形か不整円形のプランとして掘り上がった。床面は平坦であったが、竪穴状遺構とすべきかも知れない。竈はその有無を含めて確認できなかったが、あったとすれば H-19 によって切られたと思われる。遺物は土師器高坏と甕の破片、馬歯が出土している。時期については土器の形態特徴から 6 世紀後半と考えられた。

H-19 竪穴建物跡　調査区南東端に位置し、H-18 を切り、東側の大半が調査区外となる。調査中に集中豪雨の被害を受け、調査区壁の土層観察をする間もなく崩壊してしまった。図示できる遺物も無く、時期不明とせざるを得ないが、規模・深さは隣接ないしは切り合う H-17・18 に通じるものがあり、竪穴状遺構の可能性は高い。古墳時代後期と推定される。

H-20 竪穴建物跡　調査区南東端に位置し、H-18 を切る。南側の大半は（122）1 区 H-10 として調査されている。それによれば東壁南寄りに竈、南東隅に貯蔵穴のある小型の正方形プランである。今回調査分からの明確な出土遺物は無く、既調査分では緑釉陶器段皿片が 1 点報告されているのみで、遺物の少なさは特徴的ですらある。時期については（122）報告に従い 10 世紀代とする。

H-21 竪穴建物跡　調査区北東に位置し、H-9・10 の西側至近に位置する。竈のみ単独で確認された。竪穴部が確認できず、Ⅴ層上面で竈周囲を精査したものの形態の安定しないⅣ層の範囲（＝耕作痕？）を確認したのみで、床面を思わせるような硬化面や柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。今一つ説得力を欠くが、平地式建物に伴う竈か、屋外に単独に構築された竈の可能性が考えられる。竈自体は煙道部を欠くものの一般的なサイズの燃焼室で、火床もある。遺物は竈内から土師器の丸甕（武蔵型）、竈脇から須恵器小型甕片が出土しているが、後者は位置からして本遺構に伴わないと思われる。時期については断じ難いが、丸甕の普遍的な時期、つまり 8 世紀代と考えられる。近傍で時期の近い H-9・11 と補完関係にある可能性も考慮される。

H-22 竪穴建物跡　調査区中央北東寄りに位置し、H-13 に切られ、北に近接して H-12 がある。おそらく半分以上を失っており、隣接の H-12 より一回り大きい竪穴部が想定される。深さも同様に浅く、遺構の性格も同様に通常の竪穴建物では無いと思われる。北壁近くのほぼ床面上から土師質土器高台付坏と灰釉陶器埦、丸・平瓦が破片で出土している。切り合い関係や遺物から、10 世紀前半に位置づけられる。

H-23 竪穴建物跡　調査区南西隅に位置し、H-3・4 と W-2 に切られている。北に対して東に軸が振れる隅丸長方形プランで浅く、柱穴や竈、貯蔵穴は確認できなかった。丸みを帯びた平面形態や、切り合いが多いとは言え竈の存在が疑わしい状況からは、東方の H-17 ～ 19 と同様に竪穴状遺構とすべきかも知れない。北西寄りの床面で土師器甕が潰れた状態で出土している。遺物から 7 世紀末頃に位置づけられる。

②　溝跡　調査段階では 2 条を認識したが、先述したように W-1 は耕作痕と考えられた為に欠番とした。確実な溝跡である W-2 は調査区南にあり、北に対して 50°程度東に振れた斜めの走軸で、南西から北東へ向かうに従い幅が広くなり、土坑状に窪む部分やピット状の小窪みが存在している。また、H-23 と D-17 を切るが、H-3・4 との切り合いは不明である。同様の軸方向の遺構は調査区内には無いので区画溝とは考えにくく、谷地形に対して直行（つまり高い方から低い方へ）するものの恒常的な水流痕跡は確認できない。敢えて関係を疑うとすれば I-4 井戸跡で、井戸で使用した水を低い方に逃がした排水路のような性格と考えられる。遺物は 7・8 世紀代の土師器坏、打製石斧もあるが、須恵器坏と灰釉陶器埦が比較的状態も良く、本遺構に伴う遺物と思われる。馬歯も伴う可能性が高い。出土遺物と切り合い関係を根拠に、10 世紀前半以降に位置づけられる。

③　土坑　堆積土の特徴（As-B を含まない）を根拠に、合計 10 基を古代の土坑とした。D-21 が不整楕円形である以外は円形で、D-17 は W-2 に切られている。遺物は D-17 から須恵器高台付の埦、D-18 から土師質土器の坏、D-21 から土師質土器の坏と鉄製の刀子が出土している。出土遺物から、土坑は竪穴建物と同時期に存在していたものと考えられる。

④　井戸跡　I-4 井戸跡　当初は H-2 として調査を開始したが、早々に古代の井戸跡であることが判明、混乱を避けて H-2 は欠番として調査したが、報告では新たに I-4 と付番した。平面円形で断面漏斗状、H-16 を切っている。調査終了後、埋め戻し時に 0.45 クラスのバックホウで断ち割り調査を行い、確認面から約 4 m掘り下げたが、湧水が激しく底面は確認できなかった。遺物としては中・上層から羽釜や台付鉢、耳皿、高台付埦、灰釉陶器の埦・皿、緑釉陶器の埦が破片となって出土した。下層からは自然石が回収された。陣馬岩屑なだれ層に含まれるような赤みを帯びた塊石や、利根川由来と思しき砂岩質の河原石と共に、緑泥片岩の河原石が確認された。

青緑色で白い縞模様の美しい「銘石」と言えるような見かけで、石器等として加工・使用された形跡は無く、自然石の状態で持ち込まれたものと考えられる。本遺構は出土遺物から 10 世紀後半に位置づけられ、傍らに開削された W-2 と共に機能していた可能性が考えられる。

⑤ **ピット** H-14・15 の東側から 3 基確認した。出土遺物は無く、覆土に As-B を含まないことを根拠に古代の遺構としたものである。その性格については明らかとし得なかったが、いずれも小規模で浅く、建物の柱穴とは考え難い。

⑥ **古代の遺物** 各遺構出土の遺物については前節において雑駁な説明を行っており、個々の遺物の諸特徴については観察表を参照して頂くとして、ここでは特徴的な遺物について補説しておきたい。

奈良時代（8 世紀代）の土器群 H-9・11 が該当する。土師器は武蔵型甕（上武型甕）と北武蔵型坏によってほぼ構成されているが、坏については 81 のような皿とでも言うべき器種の存在と、104 ～ 109 に見える法量差が注意される。前者は形態的には前時期の模倣坏の形態を引きずる中で成立した器種と思われ、絶対数は少ないものの、8 世紀末頃までの群馬から埼玉県北部の集落遺跡から出土する。北武蔵型と別次元のシステムで、細々と生産された土器として、今後地域性の有無を検討すべきものと考えられる。後者はいわゆる重埦を意識したものと考えられ、官衙遺跡に目立つように思われる。『律令的土器様式』が北武蔵型坏の生産にも影響を及ぼしていたであろう事は容易に想像されるところである。何れにせよ、今回の調査区が国府のマチが開発されていく中に組み込まれていた事を示しているのだろう。

平安時代（9 ～ 11 世紀代）の土器群 今回報告する竪穴建物跡の中で、主体となる時期は平安時代であった。前時期に成立した国府の周辺にマチが形成され、衰退するまでの期間である。国府のマチである国府域の実態については、これまでの膨大な発掘調査資料の割に分析はあまり進んでいないようである。今回改めて国府域の一角の土器を扱った率直な感想としては、高級食器である青磁・白磁といった貿易陶磁器や緑釉陶器・灰釉陶器が比較的普通に出土する事実もさることながら、須恵器・土師器・土師質土器といった素焼きの器における手持食器の比率の高さと、相反して煮炊きに使用された調理具の少なさに気が付いた。手持食器の中には白色土器とも言われる、平安京域の器の影響が窺われる一群の存在も興味深い。調理具の少なさは、厨屋からの給食を受けたからとも思われるが、通年居住しての日々の生活がここには無かったことを教えてくれる。白色土器の出土は、都への憧れがこれを生んだのかも知れない。

今後は国府域の各所で出土する該期の土器組成を精査し、人的活動の実態を炙り出す作業が望まれる。同時に土器の供給の問題である。白色土器は鉄分を多く含む東国の土壌では、かなり土を選ばないと表現できなかったと思われる。生産（製作）に使用者の意識が強く働いていた特注品と考えれば、その生産（製作）の体制は一般的な土器づくりとは異なる、特注的・特設的な雰囲気下で行われた可能性が考えられる。なお、今回の調査で確認された平安期の土取坑は総社砂層上位の粘質土を対象としたもので、竈材に供された可能性を指摘したが、この粘質土は地下水の影響で生成された「水付き粘土」で、水の作用で脱鉄も進んでいると考えられ、焼いてもあまり赤く発色しない土と推察される。ここでは白色土器の素材を採掘した形跡である可能性も指摘しておきたいが、今後は基礎的な実験や胎土分析等を駆使した検討が望まれることは言うまでも無い。

平安時代の陶磁器 今回の調査では、図示し得ただけで 34 点の灰釉陶器と 3 点の緑釉陶器、4 点の磁器が出土している。池田敏宏氏に実見の上鑑定して頂いたところ、灰釉陶器は東濃窯産が主体で、時期判定し得たものは 9 世紀前半から 10 世紀後半までを確認できるが、10 世紀前半がその出土数のピークとなる。緑釉陶器は全て尾北窯産と推定され、10 世紀前半と後半があり、そのピークは灰釉陶器に遅れる可能性がある。磁器は全て中国産で、9 世紀後半の古越州窯産の古青磁碗、11 世紀後半の荆州窯産と推定される白磁碗がある。特に白磁

碗の出土した H-5 は、部分的な調査とは言え灰釉陶器の出土は小片 1 点のみで、やや恣意的ではあるが磁器が陶器に替わる存在となった可能性が考えられる。

瓦　平安時代、特に 9 世紀後半以降の竪穴建物跡からは、竈構築材等に使用されたであろう瓦が多数出土した。今回の調査では文様瓦が少なく不明瞭であったが、その調達は北東至近の国分寺・国分尼寺における落下瓦であろうことは疑い無いが、同時にこれを国分寺・国分尼寺の荒廃と理解することもできる。一方で 9 世紀後半以降に瓦の転用が頻繁となる背景には、弘仁九年（818）の地震の被災によって多量の落下瓦が生じたからという説明も可能だろう。また、国分寺・国分尼寺の寺域から瓦を持ち出すという行為が、国府域に集う人々の宗教心にどれほどの影響を与えたのか、興味の尽きないところである。

鉄製品　今回の調査区では、量という点ではさほどではないが鉄製品の出土があった。ほとんどは刀子と考えられたが、大釘や、風鐸片の可能性がある鋳造鉄器もあった。瓦同様に国分寺・国分尼寺からの持ち出しであろうが、瓦と異なるのは転用＝鋳つぶして別の製品を新たに作るという事であった点に注意しておきたい。

井戸跡から出土した「銘石」と共伴遺物　10 世紀後半の井戸跡である I-4（旧 H-2）の底から出土した緑泥片岩自然石（234）は、現在の藤岡市鬼石地区で戦前より庭石として採取され高額で流通した「三波石」そのものであった。石器等の使用痕跡が認められず、この石材が如何なる意図をもってこの地にもたらされたのか、その経緯が興味惹かれるところである。今回調査区が国府周辺域ということを勘案すれば、やや飛躍する理解ではあるが当該石材を配する庭園遺構が存在していた可能性もあろうか。同井戸跡の中・上層から出土した遺物中に緑釉陶器・灰釉陶器といった施釉陶器が目立つ点は奢侈的と言えるもので、耳皿の出土は箸を使用した饗宴を想起させる。台付鉢については、鉢部底面に小孔をもち台部との屈曲部に鍔状の突帯を巡らせる特殊な形態で、類例としては玉村町福島曲戸遺跡で 10 点以上、高崎市田端遺跡で 1 点がある。また、鉢部底の小孔を欠くとは言え同様の器形のものが、本遺跡の（103）地点や月夜野窯跡群深沢 B 支群 2 号窯にも知られている。その使用方法については不明だが、類例を集成した笠原仁史によれば寺院や公的施設との関係が指摘されており（笠原ほか 2016）、形態的に仏具（香炉等）を想定できなくも無い。本遺構における「銘石」や施釉陶器・耳皿との関係は定かではないものの、灯火具と仮定すれば庭園との関係もあり得るだろう。今後の検討に委ねたい。（永井）

⑦　縄文時代の遺物　今回の調査において、縄文時代の遺構は検出されなかった。しかし、縄文時代の遺物は調査区内各所から出土している。

土器は小破片であり図示していないが、H-10 覆土中から集合沈線紋の諸磯 c 式土器が、H-12 覆土中からは磨消し縄文での帯状構図の縄文後期中葉の土器が、他に遺構内出土ではないが磨消し縄文の加曽利 E 式土器も調査区内で採集されている。

石器については、黒曜石の凹基無茎石鏃（220）や石核（221）が表土掘削中に出土したほか、I-4 覆土中からは撥状石斧（233）、W-2 からは短冊形石斧（207）が出土している。

撥状石斧は片面に自然面を残し、上部は敲打によって形状を整えている。撥状の歯部には、打撃による剥離面の稜線が摩耗する使用痕が認められ、短冊形石斧にも同様な使用痕がみられる。今回調査地点の北東には縄文中期後葉の集落遺構があり、これら石器についても同様の時期が想定される。（関口）

（2）　中・近世の遺構と遺物

今回調査区からは中・近世の遺構も検出されている。調査区周辺は蒼海城西方に相当し、北側隣接の元総社草作遺跡Ⅴでもこれに伴うと推定される大規模な堀跡や井戸跡、土坑と共に数基の墳墓関係の遺構が調査されている。今回調査区でも土坑と共に井戸跡と墓関係遺構が確認された。計測数値等については一覧表を参照されるとし、各遺構・各遺物について説明する。なお、ピットについては割愛した。

① **土坑**　合計８基確認した。明確な出土遺物は無かったが、As-A を含む灰褐色の覆土をもつ D-2 は近世、それ以外は全て As-B を多量に含む基本層序Ⅱ層を覆土としており、中世であることは確実である。円形が多いが、長方形や長楕円形のものもある。

② **井戸跡**　３基確認している。近接して位置しており、全て安全面から２m程度で掘り下げを中止しているために全貌は不明、明確な出土遺物も無かったが、覆土に As-B を含むことを根拠に中世と判断した。口径が大・中・小と三様であるが、掘り下げた範囲での堆積状況や断面形状から、崩落によって見かけ上大きくなったようで、I-3 が基本的なサイズであったと思われた。同時存在とは思い難い程に近接しているため、基本的には崩落が進んで井戸としての機能が危ぶまれると、隣に新たに開鑿が繰り返された結果と想定される。先述の土坑と共に、農業関連遺構ではないかと考えられる。

③ **動物埋葬遺構**　**D-1**　調査区北西に位置する。楕円形プランで、獣骨以外の出土遺物は無かったが、土坑と同じⅡ層相当の覆土であることから、中世と判断される。獣骨は坑底に横たわっており、頭骨は欠いているが前後足と背骨は残存していた。明治大学樋泉岳二氏に写真判定して頂いたところ、イヌとして間違いないとの回答を得た。骨格の検出状態からみて埋葬されたことは確かであるので、覆土特徴から見て、井戸や土坑のある畑地の一隅に穴を掘り、飼い犬を埋葬したものと考えられる。

④ **中世墓**　D-4・15・22 の３基を確認したが、D-22 については調査終了時に調査区壁面で確認し応急処置したもので、詳細な記録を作成することは叶わなかった。他に調査区北壁から茶毘跡１基も確認している。D-4・15 については発砲ウレタンで梱包して室内に持ち帰り調査（3D 計測も実施）したので、比較的詳細な情報収集を果たすことができた。人骨の詳細については Ⅵ章を参照されたいが、ここでは遺構形態や遺物出土状態について説明しておきたい。

D-4　楕円形プランの土坑で、坑底に頭位を北、顔を西に向けて屈葬されていた。遺物は副葬品と思われる鉄製刀子が肩付近から、重なった銭６枚と被熱した石（温石？）１点が腰付近から、遺体の上面西寄りにカワラケ５点（大３・小２）が出土しており、供献と考えられた。カワラケの形態から、15 世紀後半に位置づけられる。

D-15　やや歪な長方形プランの土坑で、坑底に頭位を北、顔を西に向けて屈葬されていた。後頭部付近から青磁皿の 1/2 程度の破片が１点出土している。また、腹部に抱かれる位置から重なった銭が６枚あり、これについては副葬品と考えられる。青磁皿の特徴から 15 世紀後半に位置づけられる。

茶毘跡　Ⅱ層直下、上面を切られた状態で確認され、北半は調査区外となる。東側に焚口と考えられる突出部をもつ楕円形で、焚口と僅かに立ち上がる壁を中心に被熱による赤化が認められた。坑底には炭化物と共に多量の焼骨が検出され、室内での水洗選別の結果、被熱して変形した銭が２枚確認された。焼骨を含む炭化物層の上にはカワラケが２点正位で置かれたような状態で出土しており、茶毘の後に供献されたものと考えられた。カワラケの形態から 16 世紀前半に位置づけられる。

⑤ **中世の出土遺物**　カワラケと青磁、鉄製刀子と銭がある。中世墓 D-4 出土のカワラケ５点は大小の差こそあれ全体に厚手で、小型のものは油煙の付着から灯明皿として使用されたことがわかる。大型の３点は見込に指頭によるナデを入れる共通した手法をもち、同時製作された特注品である可能性が高い。茶毘跡のカワラケ２点は対照的に薄手で精美なもので、胎土も精良である。D-15 の青磁は舶載品で、型押し成型の蓮華文輪花皿で龍泉窯産と考えられるものだが、半分弱の破片である。混入とは考え難いので、破片を副葬したと考えておきたい。鉄製刀子は残存状態が悪く本来の形態は不明瞭だが、刀身は反っており、脇差のような小刀とすべきと思われる。銭は判別できたものは全て輸入銭で、中世墓２基各々から６枚が纏まって出土していることから、六道銭として遺体に添えられたものであろう。

Ⅵ　人骨鑑定報告

元総社蒼海遺跡群（142）出土人骨について

谷畑美帆（明治大学文学部兼任講師）

D-4 墓　全体として人骨の遺存状態はよくない。右頭側骨を下面にし、頭蓋骨は横向きになっている。頭蓋骨は頭蓋冠を中心とした出土であるが、土圧で変形しているため形態的特徴については詳述することはできない。腰椎付近に銭が数枚、上肢骨付近には鉄製品が副葬されており、鎖骨から膝関節付近にかけてカワラケが数枚散乱した状態で出土している。下肢骨を湾曲させた姿勢（屈葬？）で埋葬されている。四肢骨を含めて全体として華奢である。頭頂骨の厚みなどから成人個体とみなされるが、詳細は不明である。外後頭隆起はあまり発達しておらず、四肢骨が華奢であることから女性と推定される。

D-15 墓　全体として人骨の遺存状態はよくない。右頭側骨を下面にし、頭蓋骨は横向きになっている。頭蓋骨は土圧で変形しているため形態的特徴については詳述することはできない。腰椎からやや離れた位置、および前腕骨の近位端および上腕骨の近位端付近から銭が出土している。四肢骨は上下肢骨共に湾曲させた姿勢（屈葬？）で埋葬されている。肩関節の上部付近から陶磁器が出土している。歯の遺存状態は下記の通りである（写真）。歯の咬耗はエナメル質にとどまる（Broca Ⅰ）。

左　8 7 6 5 4 3 2 1　1 ―――――― 右

U 7 6 5 4 3 ② ①　①② ――――――

○　エナメル質減形成
―　歯槽破損
U　未萌出

歯牙の咬耗のみで年齢推定を実施するのは難しいが、咬耗を見た限りでは壮年（20 代後半から 30 代）となる。寛骨および四肢骨は取り上げていないが、遺存している部位（大坐骨切痕の一部）や外後頭隆起の発達が著しくないことなどから、女性と推定される。

茶畑跡　多量の炭化物と共に人骨が破片状態で出土している。総重量は 850g であり、成人 1 体の総重量は約 3 kg であるため、焼成により乾燥・破砕した結果、本個体の場合、1 体分とすると全体の約 28 %が遺存していることになる。

5 mm から 9 cm 程度のサイズの骨片が出土している。遺存部位として頭蓋骨片（頭頂骨・側頭骨など）・肋骨・背骨（椎弓および椎体部）・上肢骨（橈骨・尺骨など）・中指骨・寛骨・下肢骨（大腿骨・脛骨）・右膝蓋骨・中足骨などが確認できている。一部の長骨や頭蓋骨片には亀裂がみられ。色調は、黒色から灰色、および白色を呈しており、部位によって焼成温度が異なっており、左上顎骨および左上顎歯は火を受けていないが、下顎切歯などは白色を呈し一部変形しているため、比較的高温で焼成されたと考えられる。歯の咬耗はエナメル質にとどまる。

性別は不明であるが、頭蓋骨の内板に静脈溝の圧痕など加齢に伴う所見が確認できないことから壮年（20 代後半から 30 代）に相当する個体と推測される。

骨の色調にバリエーションがあるのは、焼成時の火の当たり具合に関係しているとみなされるが、1 体以上の出土が考えられるため、これ以上、記述することはさける。

Fig.8　中世墓人骨 3D モデル

Ⅶ　発掘調査の成果と課題

今回の発掘調査では、6世紀後半から11世紀後半までの竪穴建物23軒をはじめ溝跡1条・土坑10基・井戸跡1基、中近世の土坑8基・井戸跡3基・動物埋葬遺構1基・中世墓3基・茶毘跡1基を確認し、縄文時代・古墳時代後期～平安時代・中世の土器・陶磁器・鉄製品・銅製品・石製品・石器が出土した。

縄文時代草創期に堆積した総社砂層が形成した台地上における遺構・遺物のほぼ全てが、断片的とは言え確認された調査であったと総括される。奈良～平安時代の遺構から出土した遺物群は、国府と国分寺・国分尼寺の中間という古代上野国の中枢部に相応しい内容であったし、中世墓関係遺構はその埋葬様式もさることながら、蒼海城西方における土地利用という点でも興味深い成果であった。

奈良～平安時代は国府段階とも換言できるもので、Ⅴ（1）⑥で触れたように舶載品を含む陶磁器の出土量の多さは一般集落と比べて圧倒的な差がある。井戸跡から出土した庭園を窺わせる石材も含め、奢侈的と言い得る状態であった。また、手持食器の比率の高さは通常の生活を感じさせず、上野国における一般村落と比べると「非日常」な場であり、ここで活動する人々の「都ぶり」を垣間見ることができる。竪穴建物跡で観察された、位置を変えて設けられた新旧の貯蔵穴や柱穴は、一つの建物が時期を変えて利活用されたことを示すものであり、人の集散が頻繁な国府域の様子を窺わせた。国分寺から持ち出されたと思われる瓦や鉄資源の出土は、ここで活動していた人々の秩序・道徳・宗教心がかなり混沌としたものであったという想像を掻き立てる。反面、竪穴建物廃絶後に掘削された土取坑で想定される竈材や土器製作の原材料採取は、この場所が旧流路由来の窪地で粘質土が発達する環境であったことに即した土地利用で、理に適ったものと言える。特に土器製作の原材料採取の可能性については、今後機会を見て基礎的な実験によって実証を試みたいと考えている。

中世墓と茶毘跡は、Ⅴ（2）に補足すると、井戸・土坑の覆土がAs-B混入量が多いことを根拠とすれば墓に先行する可能性が高い。つまり井戸・土坑が形成する農地の一角が墓域へと転換する可能性が考えられ、中世墓と茶毘跡が南北ほぼ一直線上に並ぶ様子からは、農地の地境に共同墓地が形成された可能性を想起させる。なお、動物埋葬遺構については覆土特徴が土坑と類似しており、農地内の一隅に土地所有者が飼い犬を埋めたものと想像される。今回は下層の古代遺構の調査との兼ね合いから中世農地の区画を解明する調査は果たせなかったが、今後同様の条件下（谷地形等で堆積環境が良好な場合）において時間的な折り合いがつく調査の機会があれば取り組みたいと考えている。

以上、今回の調査の成果について、事実記載であるⅤ章と不可分な内容となってしまったが述べた。これまでに継続されてきた、隣接地における発掘調査区内容との擦り合わせを経た上での分析が不可欠であることを痛感すると共に、日々の怠慢もあって断片的に思考していることを羅列した、抽象的な内容となってしまったことは反省点である。

元総社蒼海地区の区画整理に伴う発掘調査も終盤に差し掛かり、関越自動車道建設に伴う鳥羽遺跡と国分寺・国分尼寺中間地域の大規模調査以来、増加する一途であった発掘調査成果も落ち着きを見せ始めた段階である。関わった調査者も大勢おり、自分も含め各人が報告書で成果の全てを出し切れなかったという、いわば消化不良の気持ちを抱えていることも確かであろう。調査者としてこれからも付いてくる責任を改めて確認し、本書の結びとしたい。（永井）

参考文献（直接参考としたものに限定）

笠原仁史ほか 2016『元総社蒼海遺跡群（103）』前橋市教育委員会
佐野良平ほか 2010『元総社蒼海遺跡群（31）』前橋市教育委員会
神宮　聡ほか 2017『元総社蒼海遺跡群（122）』前橋市教育委員会
高橋清文ほか 2021『元総社蒼海遺跡群（140）』前橋市教育委員会
永井智教ほか 2019『元総社蒼海遺跡群（127）』前橋市教育委員会
中村岳彦ほか 2016『元総社中学校遺跡』前橋市教育委員会
中村岳彦「推定上野国府周辺の古代景観 -元総社蒼海遺跡群の溝と道 -」『群馬文化』332　群馬県地域文化研究協議会
長谷川一郎・土生朗治「元総社小見Ⅲ遺跡　元総社草作Ⅴ遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
山崎　一 1978『群馬県古墳墓地の研究　上巻』 群馬県文化事業振興会

Tab.2　竪穴建物観察表

番号	時期	位置（グリッド）	平面形	規模（m）	長軸方向	壁	柱穴	炉（位置/位置/深さ）	切り合い/廃絶等	カマド位置	備考
H-1	10C前	X63・Y308	長方形	22.14×（-）	N・91°・E	浅・直	—	—	H-16を切る	東辺・南壁	
H-2	—									—	欠番→14に変更
H-3	10C前	X64・Y307	—	35.55×（-）	—	浅・直	—	—	H-4、H-23を切る K-1に切られる	調査区外	
H-4	9C後	X61・Y306	—	36.23×（-）	—	浅・直	—	—	H-3、W-2、K-1に切られる H-23を切る	—	
H-5	11C後	X61・Y306	—	—	N・101°・E	浅・直	—	—	—	東辺・南壁	
H-6	10C前	X79・Y307	長方形	31.53×（-）	N・102°・E	浅・段	—	—	11、12、K-1に切られる	東辺・南壁	
H-7	11C	X77・Y307	長方形	29.00×22.97	N・110°・E	浅・直	4	南東隅/カマド右/浅	H-8と重複	東辺・南壁	
H-8	10C前	X76・Y308	—	38.65×（-）	N・95°・E	浅・直	—	南東隅/カマド右/浅	H-7と重複 K-1に切られる	東辺・南壁	
H-9	8C前	X76・Y310	長方形	35.84×（-）	N・79°・E	浅・直	5	—	H-10を切る	東辺・南壁	
H-10	10C後	X77・Y310	長方形	—	N・96°・E	浅・段	—	—	H-9、W-11に切られる	東辺・南壁	
H-11	8C前	X77・Y310	長方形	43.0×36.8	—	浅・段	—	—	H-10を切る H-10と部分に切られる	調査区外	
H-12	11C後	X79・Y308	長方形	34.8×27.9	—	浅・段	—	—	—	—	掘り込遺構か
H-13	10C中	X79・Y309	長方形	49.0×40.8	—	浅・直	—	—	H-22を切る H-15に切られる	—	貯蔵穴あり
H-14	10C中	X81・Y308	—	30.6×（-）	N・94°・E	浅・段	—	南東隅/カマド右/浅	H-15に切られる	東辺・南壁	貯蔵穴あり
H-15	10C中	X80・Y308	長方形	63.1×44.3	N・92°・E	浅・直	4	南東隅/カマド右/浅	H-13、H-14、K-1を切る	東辺・南壁	貯蔵穴あり
H-16	9C後	X84・Y308	—	—	—	浅・直	—	—	H-1、H-2を切る	調査区外	
H-17	7C前	—	—	—	—	—	—	—	—	—	掘り込遺構か
H-18	6C後	—	—	—	—	—	—	—	—	—	掘り込遺構か
H-19	古墳後	X83・Y310	—	—	—	浅・段	—	—	H-20を切る	—	掘り込遺構か
H-20	10C	X84・Y310	—	—	—	浅・段	—	—	H-19に切られる	—	
H-21	8C	X77・Y309	—	29.55×（-）	N・86°・E	—	—	—	—	東辺中央	
H-22	10C前	X79・Y309	—	31.8×（-）	—	浅・段	—	—	H-13に切られる	—	
H-23	7C末	X83・Y307	—	—	—	浅・段	—	—	W-2、H-3、K-1に切られる	—	

※単位（深：30cm以上・浅：10～30cm・浅：10cm以下）（壁：垂直・直・緩斜・段・有段）
※（ ）は現存値、（ ）は推定値、不明は－

Tab.3　古代の井戸観察表

番号	位置（グリッド）	時期	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	平面形状	出土遺物	備考
I-4	X83・Y308	—	5.28	3.27	4.12上	円	土師・須恵・石製	H16上、H-16に切られる

※（ ）は現存値、（ ）は推定値、不明は－

Tab.4　古代の溝観察表

番号	位置（グリッド）	時期	主軸方向	規模（m）	出土遺物	備考
W-2	X83・Y307 X81・Y310	—	N・58°・E	長さ：16.22 上幅：0.91 下幅：0.73 深さ：0.22	土師 須恵 石器 瓦塔	D-17と重複

※（ ）は現存値、（ ）は推定値、不明は－

Tab.6　古代のピット観察表

番号	位置（グリッド）	時期	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	平面形状	出土遺物	備考
P-22	X81・Y309		0.31	0.30	0.44	円形	—	
P-23	X81・Y309		0.19	0.19	0.30	方形	—	
P-24	X81・Y309		0.23	0.22	0.17	円形	—	

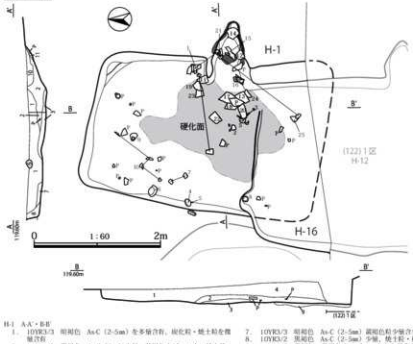
※（ ）は現存値、（ ）は推定値、不明は－

Tab.5　古代の土坑観察表

番号	位置（グリッド）	時期	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	平面形状	出土遺物	備考
D-11	X77・Y307		1.12	0.98	0.08	不整方形	石玉	
D-12	X78・Y306		0.66	0.59	0.11	方形		
D-13	X81・Y309		0.58	0.51	0.39	方形		
D-14	X81・Y309		0.51	0.50	0.16	方形		
D-16	X81・Y309		0.90	0.85	0.20	方形		
D-17	X81・Y309		1.34	1.27	0.44	不整方形	須恵器	W-2と重複
D-18	X81・Y310		(1.06)	1.09	0.36	方形	須恵器	一部調査区外
D-19	X81・Y307		1.00	0.88	0.14	楕円形		
D-20	X80・Y307		1.09	0.91	0.06	長方形		
D-21	X82・Y307		1.17	0.57	0.14	長方形	須恵器・鉄器	

※（ ）は現存値、（ ）は推定値、不明は－

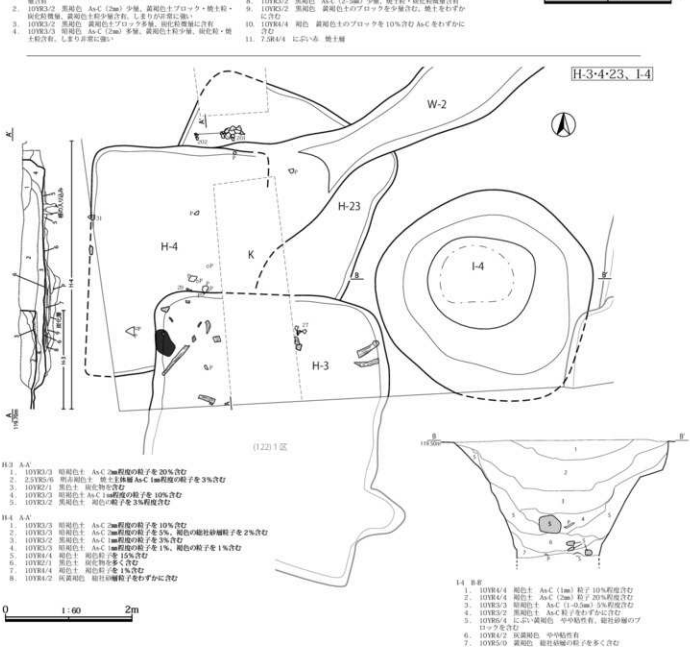
H-1・16



H-1 A-A'・B-B'
1. 10YR3/3 暗褐色 As-C (2-5mm) を多量含有、炭化粒・焼土粒を微量含む
2. 10YR3/2 黒褐色 As-C (2mm) 少量、黄褐色土ブロック・焼土粒・炭化粒微量、黄褐色土粒少量含む、しまりが非常に強い
3. 10YR3/2 黒褐色 黄褐色土ブロック多量、炭化粒微量に含有
4. 10YR3/3 暗褐色 As-C (2mm) 多量、黄褐色土粒少量、炭化粒・焼土粒含有、しまりが非常に強い
7. 10YR3/3 暗褐色 As-C (2-5mm) 黄褐色粒少量含有
8. 10YR3/2 黒褐色 As-C (2-3mm) 少量、焼土粒・炭化粒微量含有
9. 10YR3/2 黒褐色 黄褐色土のブロックを少量含む、焼土をわずかに含む
10. 10YR4/4 褐色 黄褐色土のブロックを10%含む As-C をわずかに含む
11. 7.5R4/4 にぶい赤 焼土層

H-01 竈 A-A'
1. 暗褐色 粘質土ブロック主体天井構築土ア
2. 暗褐色 1 層に比べ焼土粒子少量含む
3. 暗褐色 焼土粒子微量、炭化物微量、遺品少ア
4. 暗褐色 焼土粒子、As-C粒子含む
5. 暗褐色 焼土粒子、炭化物多く含む（炭化物は層状に今すく層確）
6. 赤褐色 焼土粒子主体、且炭化物土少ア
7. 暗黄褐色 粘質土ブロック主体、カマド奥壁構築材
8. 暗灰褐色 含有物なくしまり弱い
9. 暗褐色 土居層土

H-3・4・23、I-4



H-3 A-A'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を20%含む
2. 2.5YR5/6 明赤褐色土 焼土主体層 As-C 1mm程度の粒子を3%含む
3. 10YR2/1 黒色土 炭化物含む
4. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を10%含む
5. 10YR3/2 黒褐色土 褐色の粒子を3%程度含む

H-4 A-A'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を10%含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を5%、褐色の細砂礫粒子を2%含む
3. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 1mm程度の粒子を3%含む
4. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を1%、褐色の粒子を1%含む
5. 10YR4/4 褐色土 褐色粒子を15%含む
6. 10YR2/1 黒色土 炭化物多く含む
7. 10YR4/4 褐色土 褐色粒子を1%含む
8. 10YR4/2 灰黄褐色 細砂礫粒子をわずかに含む

I-4 B-B'
1. 10YR4/4 褐色土 As-C (1mm) 粒子10%程度含む
2. 10YR4/4 褐色土 As-C (2mm) 粒子20%程度含む
3. 10YR3/3 暗褐色土 As-C (1-0.5mm) 5%程度含む
4. 10YR3/2 黒褐色土 As-C粒子をわずかに含む
5. 10YR6/4 にぶい黄褐色 やや焼色有、細砂礫のブロックを含む
6. 10YR4/2 灰褐色 やや焼色有
7. 10YR5/3 黄褐色 細砂礫の粒子を多く含む

Fig.9 H-1・3・4・16・23、I-4

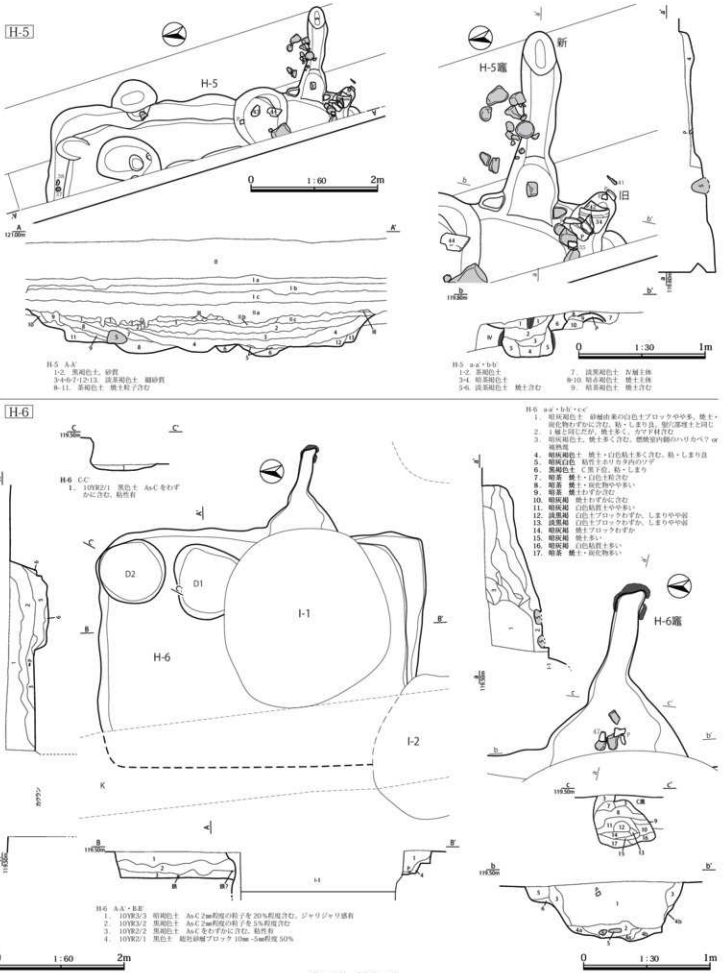

H-5
H-5
0 1:60 2m
H-5 A-A'
1-2. 黒褐色土 砂質
3-4・6・7・12・13. 淡茶褐色土 細砂質
8-11. 茶褐色土 焼土粒子含む
H-5 a-a'・b-b'
1-2. 茶褐色土
3-4. 暗茶褐色土
5-6. 淡茶褐色土
7. 淡黒褐色土 灰層主体
8-10. 暗赤褐色土 焼土主体
9. 暗茶褐色土 焼土含む
新
H-5竈
旧
0 1:30 1m
H-6
H-6 C-C
1. 10YR2/1 黒色土 As-C をわずかに含む、粘質有
D2
D1
I-1
H-6
I-2
H-6 A-A'・B-B'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を20%程度含む、ジャリジャリ感有
2. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 2mm程度の粒子を5%程度含む
3. 10YR2/3 黒褐色土 As-C をわずかに含む、粘質有
4. 10YR2/3 黒色土 超焼砂礫ブロック (10mm-5mm)程度 50%
0 1:60 2m
H-6 a-a'・b-b'・c-c'
1. 暗灰褐色土 砂礫混来の白色土ブロックやや多、焼土・炭化物わずかに含む、粘・しまり良、粒径茶褐土より同じ
2. 1層と同じだが、焼土多く、カマド材含む
3. 暗灰褐色土、焼土多く含む、燃焼室内側のハリカベ? or 補修用
4. 暗灰褐色土 焼土・白色粘土多く含む、粘・しまり良
5. 暗褐色土 粘質土がリカ多内のリデ
6. 黒褐色土 C層下位、粘・しまり
7. 暗茶 焼土・白色土粒含む
8. 暗茶 焼土・炭化物やや多い
9. 暗茶 焼土わずか含む
10. 暗灰褐 焼土わずかに含む
11. 暗灰褐 白色粘質土やや多い
12. 淡黒褐 白色土ブロックわずか、しまりやや弱
13. 淡黒褐 白色土ブロックわずか、しまりやや弱
14. 暗灰褐 焼土ブロックわずか
15. 暗灰褐 焼土多い
16. 暗灰褐 白色粘質土多い
17. 暗茶 焼土・炭化物多い
H-6竈
0 1:30 1m

Fig.10 H-5・6

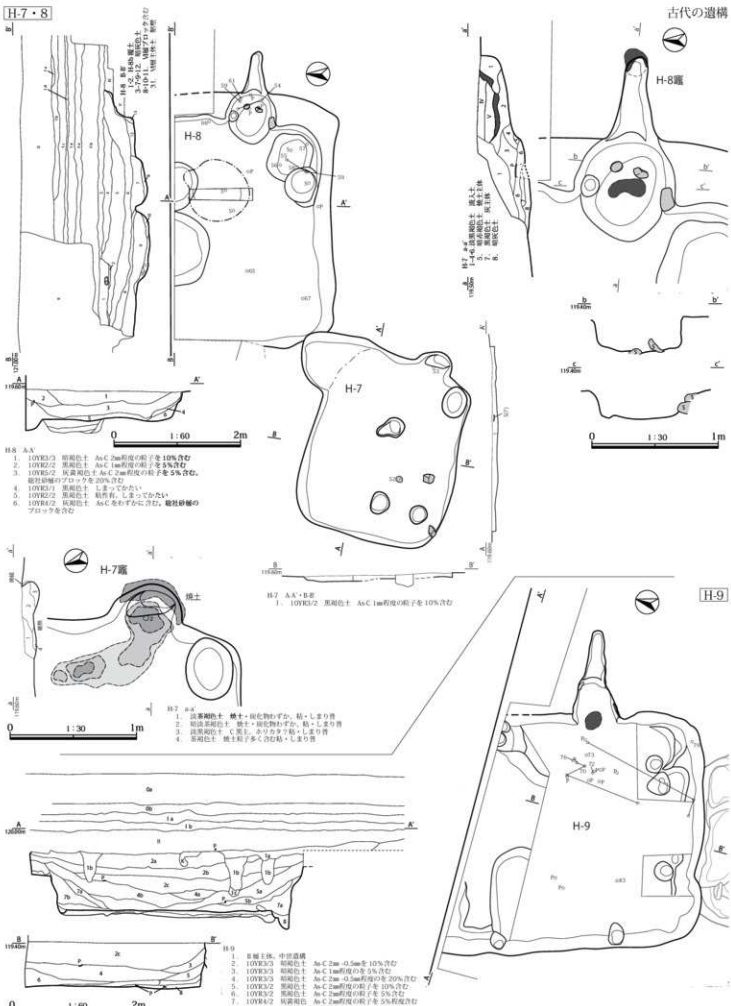
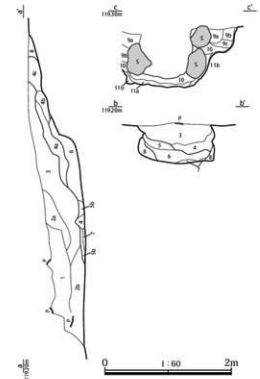
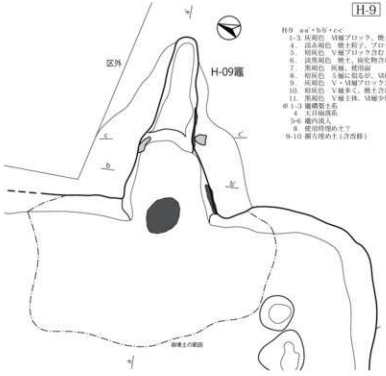
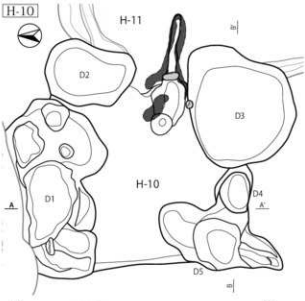

H-7・8
H-8
H-7
H-8竈
H-7竈
焼土
H-9
0 1:60 2m
0 1:30 1m
H-8 A-A'
1. 10YR3/3 明褐色土 As-C 2mm程度の粒子を10%含む
2. 10YR2/2 黒褐色土 As-C 1mm程度の粒子を5%含む
3. 10YR3/2 灰黄褐色土 As-C 2mm程度の粒子を5%含む。
砂質砂礫のブロックを20%含む
4. 10YR3/1 黒褐色土 しまってかたい
5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性有、しまってかたい
6. 10YR4/2 灰褐色土 As-C をわずかに含む。砂質砂礫の
ブロックを含む
H-7 A-A'・B-B'
1. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 1mm程度の粒子を10%含む
H-7 a-a'
1. 淡茶褐色土 焼土・炭化物わずか、粘・しまり普
2. 明淡茶褐色土 焼土・炭化物わずか、粘・しまり普
3. 淡黒褐色土 C 黒土、ホリカタ粘・しまり普
4. 茶褐色土 焼土粒子多く含む粘・しまり普
H-9
1. 表層土層、中世遺構
2. 10YR3/3 明褐色土 As-C 2mm -0.5mmを10%含む
3. 10YR3/3 明褐色土 As-C 1mm程度の粒子5%含む
4. 10YR3/3 明褐色土 As-C 2mm -0.5mm程度の粒子20%含む
5. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 2mm程度の粒子を10%含む
6. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 2mm程度の粒子を5%含む
7. 10YR4/2 灰黄褐色 As-C 2mm程度の粒子を5%程度含む
8. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性有

Fig.11 H-7~9



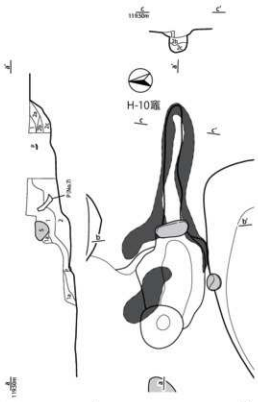


H-9 a-a'・b-b'・c-c'
1-3. 暗褐色　VI層ブロック、焼土含む
4. 淡赤褐色　焼土粒子、ブロック
5. 暗褐色　V層ブロック含む
6. 淡黒褐色　焼土、炭化物含む
7. 黒褐色　炭層、焼土層
8. 暗褐色　5層に似るが、VI層粒子含む
9. 黒褐色　V・VI層ブロック含む
10. 暗褐色　V層多く、焼土含む
11. 黒褐色　V層主体、VI層少量含む
※1-3 竈構築土系
4. 人工的盛土
5-6 竈内流入
9. 使用時埋め土？
9-10 掘方埋め土（改修）



H-10 A-A'
1. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 1mm程度の粒子を10%含む
2. 10YR2/3　暗褐色土　As-C 2mm程度の粒子を20%含む
3. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 1mm程度の粒子を20%含む
4. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 1mm程度の粒子を1%含む
5. 10YR5/3　にぶい黄褐色　As-C をわずかに含む
6. 10YR7/2　にぶい黄橙　粘性有

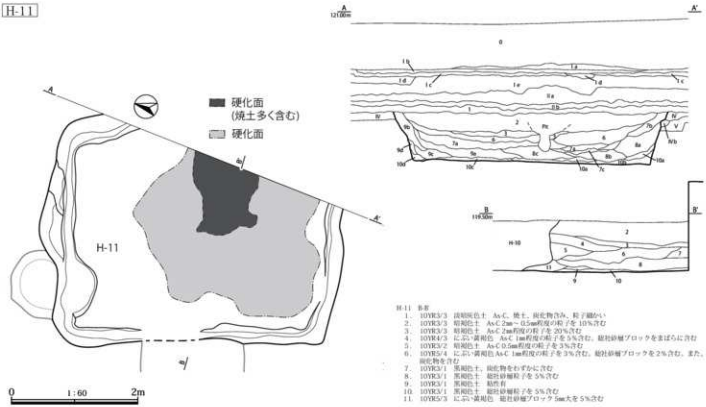
H-10 B-B'
1. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 1mm程度の粒子を10%含む
2. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 2mm程度の粒子を20%含む
3. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 2mm程度の粒子を20%含む、細砂層粒子を20%含む
4. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 2mm程度の粒子を5%含む
5. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 2mm程度の粒子を20%含む、細砂層ブロックをわずかに含む
6. 10YR5/4　にぶい黄褐色土　As-C 1mm程度の粒子を10%含む、細砂層粒子5mm程度
7. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 1mm程度の粒子を5%含む、細砂層粒子2mm程度を5%含む
8. 10YR3/2　黒褐色土　As-C 1mm程度の粒子を3%含む、細砂層粒子1mm程度を3%含む
9. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 1mm程度の粒子を5%含む
10. 10YR3/3　暗褐色土　As-C をわずかに含む、粘性有
11. 10YR2/3　にぶい黄褐色　細砂層ブロックを30%含む
12. 10YR2/2　黒褐色　粘性有
13. 10YR3/3　暗褐色土　As-C 1mm程度の粒子を7%含む
14. 10YR3/3　暗褐色土　As-C を2%程度含む、細砂層ブロックを10%含む



H-10 a-a'・b-b'・c-c'
1. 淡茶　焼土粒多、褐色粘土やや多、粘・しまり普
2. 淡茶　焼土粒多、褐色粘土多、粘・しまり普、炭混ざり？
3. 淡茶　焼土粒多、褐色粘土主体、粘・粘・しまり普
4. 暗灰　焼土粒多、褐色粘土少量、粘・しまり普

Fig.12　H-9・10

H-11



H-11 断面
1. 10YR3/3 暗褐灰色土 As-C、焼土、炭化物含み、粒子細かい
2. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm～0.5mm程度の粒子を 10%含む
3. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 20%含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 As-C 1mm程度の粒子を 5%含む、褐色砂質ブロックをまばらに含む
5. 10YR5/2 暗褐色土 As-C 0.5mm程度の粒子を 3%含む
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 As-C 1mm程度の粒子を 3%含む、褐色砂質ブロックを 2%含む、また、炭化物を含む
7. 10YR3/1 黒褐色土 炭化物をわずかに含む
8. 10YR3/1 黒褐色土 褐色砂質粒子を 5%含む
9. 10YR3/1 黒褐色土 褐色有
10. 10YR3/1 黒褐色土 褐色砂質粒子を 5%含む
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色 褐色砂質ブロック 5mm大を 5%含む

H-10・11 遺物出土状況

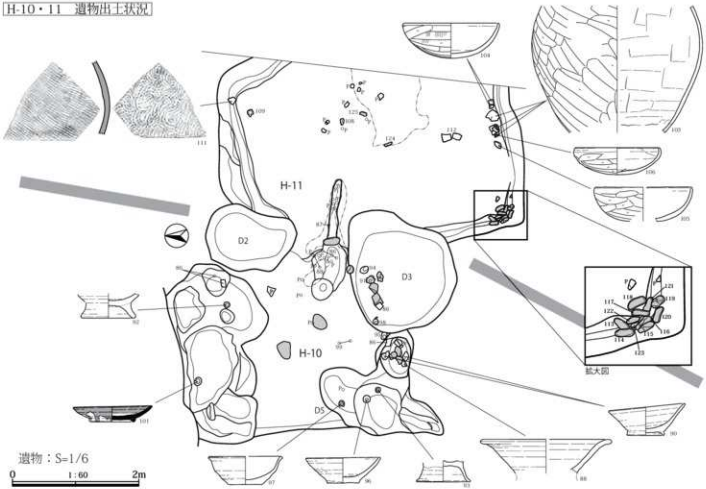


Fig.13 H-10・11

H-12
H-13
H-14
H-15
P1
P2
P3
D1
※水没により遺物No不明
H-12 A-A'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 10%含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性有、縄状砂礫のブロックを 10%含む
H-12 B-B'・C-C'・D-D'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度を 10%含む
2. 10YR3/2 灰黄褐色 縄状砂礫ブロックを 3%含む
H-13 A-A'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 20%含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm -1mm程度の粒子を 5%含む
3. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 20%含む、縄状砂礫ブロックを 1%含む
4. 10YR3/2 黒褐色土 縄状砂礫ブロックを 3%含む As-C 1mm程度の粒子を 1%含む
4. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 1mm程度の粒子を 3%含む、縄状砂礫粒子を 1%含む
5. 10YR7/3 にぶい黄橙 縄状砂礫ブロックを 3%含む
6. 10YR3/2 黒褐色土 縄状砂礫ブロックを 3%含む
7. 10YR3/2 黒褐色土 粘性有縄状砂礫ブロックを 1%程度含む
7. 10YR3/2 黒褐色土 粘性有
8. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を 3%含む、縄状砂礫の 5cmのブロックを 10%含む
9. 10YR4/1 灰褐色土 As-C 2mm -1mm程度の粒子を 1%含む、縄状砂礫ブロックを 5%含む
10. 10YR6/3 にぶい黄橙 縄状砂礫ブロックを 70%含む
11. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 縄状砂礫ブロックを 50%含む
12. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を 2%含む、縄状砂礫ブロックを 1%含む
13. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 粘性有、縄状砂礫ブロックを 10%含む
14. 10YR3/2 黒褐色土 粘性有、縄状砂礫粒子をわずかに含む
15. 10YR6/3 にぶい黄橙 縄状砂礫の 5mmのブロックを 50%含む、粘性有
16. 10YR3/3 暗褐色土 縄状砂礫の 1mm程度の粒子を 2%含む
H-13 B-B'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 15%程度含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を 20%程度含む、縄状砂礫ブロックを 1%含む
3. 10YR3/3 黒褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 20%程度含む、縄状砂礫の粒子 10%含む
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性有
5. 10YR4/1 灰褐色土 縄状砂礫のブロックを 50%含む、かたくしまっている
6. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 25%程度含む、炭化物を 1%含む
7. 10YR6/2 灰黄褐色土 縄状砂礫のブロック 1cmを 70%含む、H-13 東床面がかたくしまっている
8. 10YR5/2 灰黄褐色土 As-C 1mm粒子を 1%含む
9. 10YR5/2 灰黄褐色土 As-C をわずかに含む
10. 10YR2/2 黒褐色土 粘性有、炭化物を含む
H-14 B-B'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 15%含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を 20%含む
3. 10YR3/3 暗褐色土焼土ブロック 1cmを 20%含む、炭化物を 3%含む
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色 縄状砂礫粒子を 20%含む、粘性有
9. 10YR5/2 灰黄褐色 粘性有、一部に焼土を含む
10. 10YR4/2 灰黄褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 5%含む、縄状砂礫粒子を 5%含む
11. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 1mm程度の粒子を 2%含む
12. 10YR3/1 黒褐色土、粘性有
1. 10YR3/3 黒褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 5%含む
8. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 30%含む、炭化物焼土をわずかに含む
0 1:60 2m
0 1:30 1m

Fig.14 H-12~14

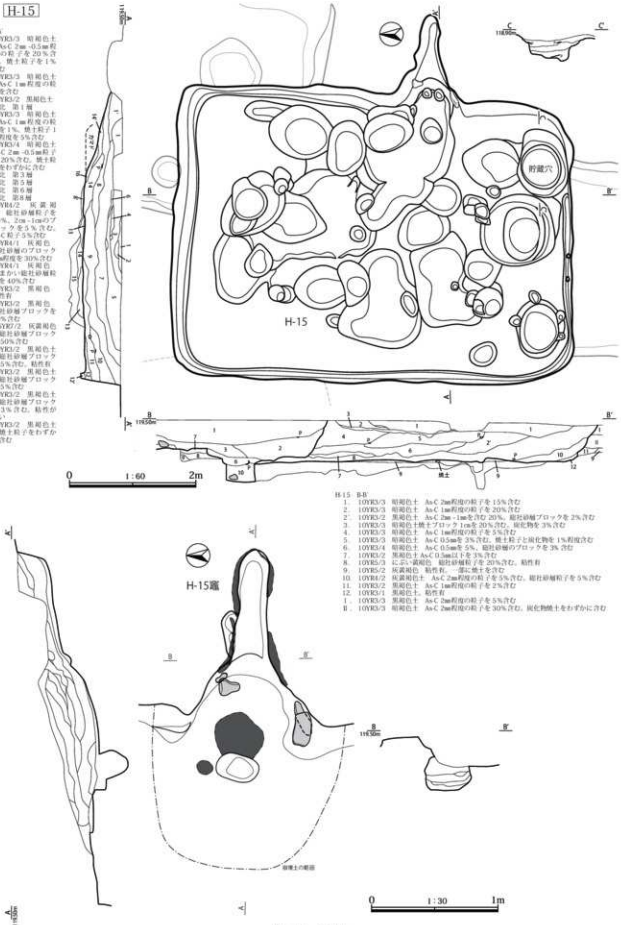

H-15
H-15 A-A'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm-0.5mm程度の粒子を20%含む。焼土粒子を1%含む
1'. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を含む
2. 10YR3/2 黒褐色土
3. 攪乱 第1層
4. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を1%、焼土粒子1mm程度を5%含む
5. 10YR3/4 暗褐色土 As-C 2mm-0.5mm粒子を20%含む。焼土粒子をわずかに含む
6. 攪乱 第3層
7. 攪乱 第5層
8. 攪乱 第6層
H. 攪乱 第8層
9. 10YR4/2 灰黄褐色 砂質砂層粒子を10%、2cm-1cmのブロックを5%含む。As-C粒子5%含む
10. 10YR4/1 灰褐色 砂質砂層のブロック1mm程度を30%含む
11. 10YR6/1 灰褐色 こまかい砂質砂層粒子を40%含む
12. 10YR3/2 黒褐色 粘性有
12'. 10YR3/2 黒褐色 砂質砂層ブロックを10%含む
13. 2.5YR2/2 灰黄褐色 砂質砂層ブロックを50%含む
14. 10YR3/2 黒褐色土 砂質砂層ブロックを5%含む。粘性有
14'. 10YR3/2 黒褐色土 砂質砂層ブロックを5%含む
15. 10YR3/2 黒褐色土 砂質砂層ブロックを3%含む。粘性が強い
16. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒子をわずかに含む
貯蔵穴
H-15
焼土
H-15 B-B'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を15%含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を20%含む
2'. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 2mm-1mmを含む20%。砂質砂層ブロックを2%含む
3. 10YR3/3 暗褐色土焼土ブロック1mmを20%含む。炭化物を3%含む
4. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度の粒子を5%含む
5. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 0.5mmを2%含む。焼土粒子と炭化物を1%程度含む
6. 10YR3/4 暗褐色土 As-C 0.5mmを5%。砂質砂層のブロックを3%含む
7. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 0.5mm以下を3%含む
8. 10YR3/3 にぶい黄褐色 砂質砂層粒子を20%含む。粘性有
9. 10YR5/2 灰黄褐色 粘性有。一部に焼土含む
10. 10YR4/2 灰黄褐色土 As-C 2mm程度の粒子を5%含む。砂質砂層粒子を5%含む
11. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 1mm程度の粒子を2%含む
12. 10YR3/1 黒褐色土 粘性有
I. 10YR3/3 黒褐色土 As-C 2mm程度の粒子を5%含む
H. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を30%含む。炭化物焼土をわずかに含む
H-15底
0 1:60 2m
0 1:30 1m

Fig.15 H-15

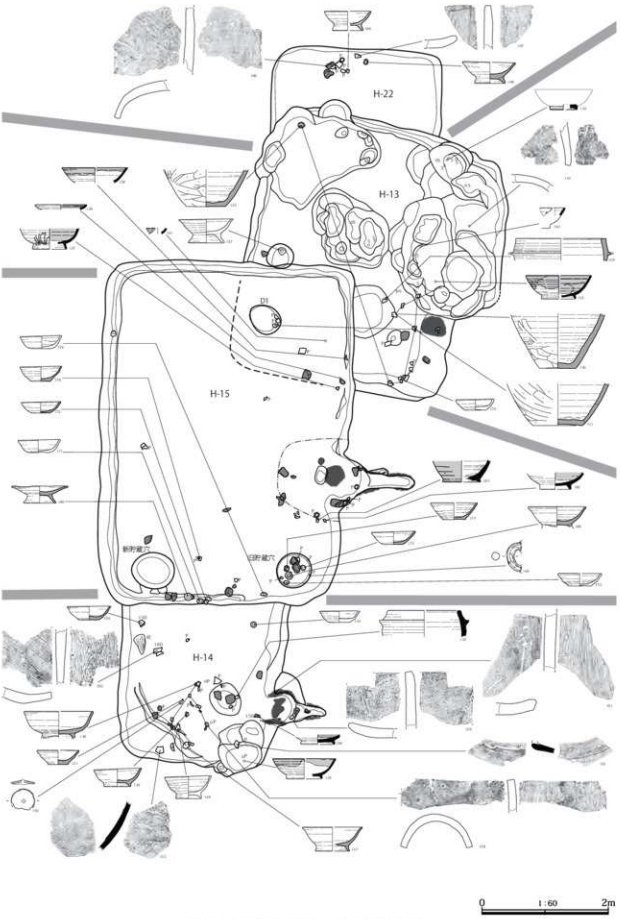


Fig.16　H-13・14・15・22　遺物出土状況

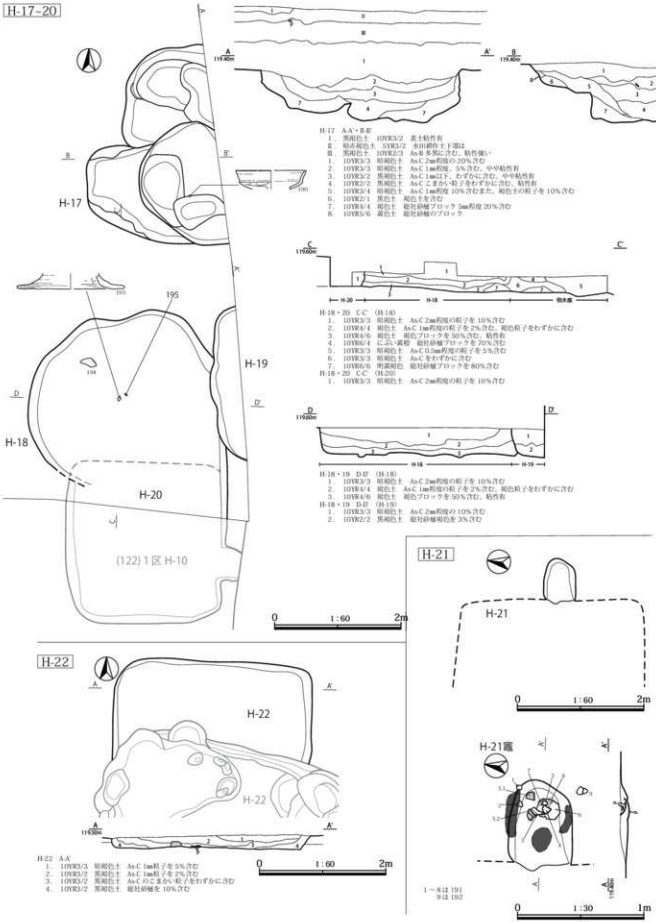
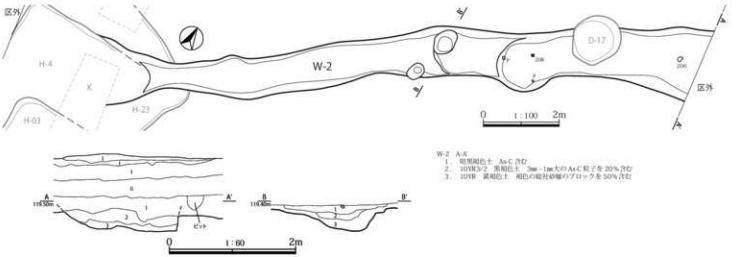

H-17~20
H-17
H-18
H-19
H-20
(122) 1 区 H-10
H-17 A-A'・B-B'
Ⅰ 黒褐色土 10YR3/2 表土粘性有
Ⅱ 暗赤褐色土 5YR3/2 赤目砂色土下面は
Ⅲ 黒褐色土 10YR2/3 As-B 多混に含む、粘性強い
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の20%含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm程度、5%含む、やや粘性有
3. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 1mm以下、わずかに含む、やや粘性有
4. 10YR2/2 黒褐色土 As-C こまかい粒子をわずかに含む、粘性有
5. 10YR3/4 暗褐色土 As-C 1mm程度 10%含むまた、褐色土の粒子を 10%含む
6. 10YR2/1 黒色土 褐色土を含む
7. 10YR4/4 褐色土 砂礫層ブロック 5mm程度 20%含む
8. 10YR5/6 黄色土 砂礫層のブロック
H-18・20 C-C' (H-18)
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 10%含む
2. 10YR4/4 褐色土 As-C 1mm程度の粒子を 2%含む、褐色粒子をわずかに含む
3. 10YR4/6 褐色土 褐色ブロックを 50%含む、粘性有
4. 10YR6/4 にぶい黄橙 砂礫層ブロックを 70%含む
5. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 0.5mm程度の粒子を 5%含む
6. 10YR3/3 暗褐色土 As-C をわずかに含む
7. 10YR6/6 明黄褐色 砂礫層ブロックを 60%含む
H-18・20 C-C' (H-20)
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 10%含む
H-18・19 D-D' (H-18)
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の粒子を 10%含む
2. 10YR4/4 褐色土 As-C 1mm程度の粒子を 2%含む、褐色粒子をわずかに含む
3. 10YR4/6 褐色土 褐色ブロックを 50%含む、粘性有
H-18・19 D-D' (H-19)
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 2mm程度の 10%含む
2. 10YR2/2 黒褐色土 砂礫層褐色を 3%含む
H-21
H-21
H-21竈
H-22
H-22
H-22 A-A'
1. 10YR3/3 暗褐色土 As-C 1mm粒子を 5%含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 As-C 1mm粒子を 2%含む
3. 10YR3/2 黒褐色土 As-C のこまかい粒子をわずかに含む
4. 10YR3/2 黒褐色土 砂礫層を 10%含む
0 1:60 2m
0 1:30 1m

Fig.17 H-17~22

溝跡



土坑

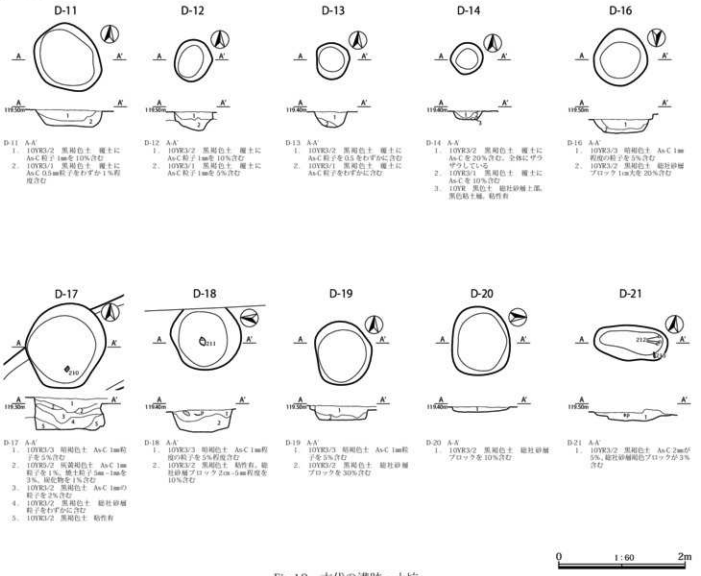
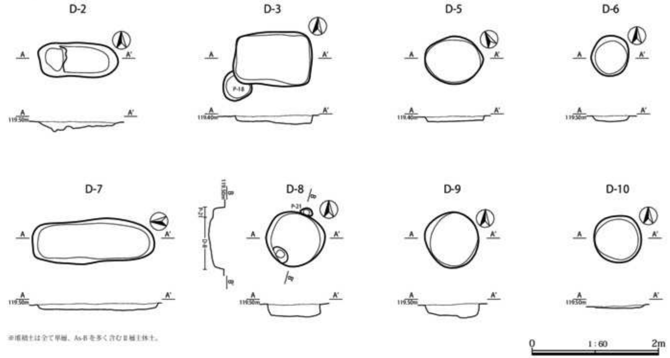


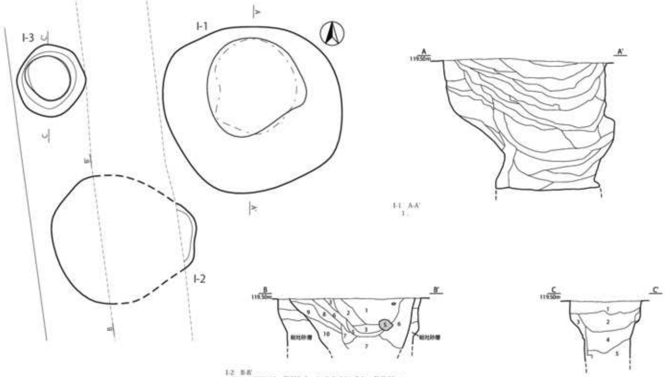
Fig.18 古代の溝跡・土坑

土坑



※埋没土は全て単層、As-Bを多く含むII層主体土。

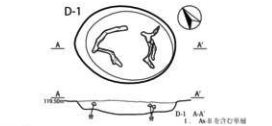
井戸跡



I-2 B-B'
1. 10YR3/2 黒褐色土 As-Bを50%含む、粘性弱い
2. 総社砂層粒子5mmを含む10%（As-Bを含む）
3. 総社砂層粒子10mmを含む20%（As-Bを含む）
4. 総社砂層粒子5mmを含む20%（As-Bを含む）
5. 総社砂層粒子5mmを含む30%（As-Bを含む）
6. 総社砂層粒子90%一部に黒色土含まれる（As-Bを含む）
7. 総社砂層粒子10mm-5mm70%含む（As-Bを含む）
8. 総社砂層粒子10mm-5mm50%含む（As-Bを含む）
9. 総社砂層ブロックを含む（As-Bを含む）
10. 10YR2/2 黒褐色 総社砂層粒子5%、As-Bを20%程度含む（As-Bを含む）
11. 総社砂層粒子30%（As-Bを含む）
12. 総社砂層20%（As-Bを含む）

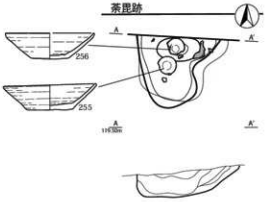
I-3 C-C'
1. 10YR3/2 黒褐色 As-B 50%を多く含む、粘性は弱い
2. 10YR2/2 黒褐色 As-B 30%を多く含む、1層よりAs-Bの含みは少ないか
3. 2.5YR4/2 明灰黄 総社砂層を含む
4. 10YR2/2 黒褐色 As-B 20%含む、粘性有
5. 10YR2/1 黒色 As-Bをわずかに含む、粘性有

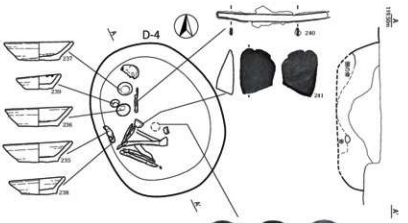
Fig.19 中世の土坑・井戸跡



D-1

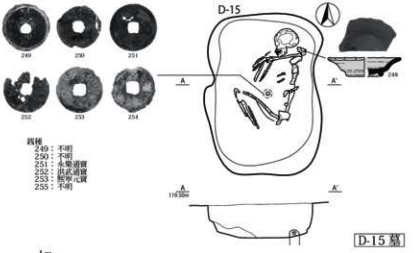
茶毘跡





銭種
242：洪武通寶
243：開元通寶
244：元和通寶
245：治平元寶
246：開元通寶
247：景德元寶

D-4 墓



銭種
249：不明
250：不明
251：永樂通寶
252：洪武通寶
253：熙寧元寶
255：不明

D-15 墓

0　1:30　1m

Fig.20　中世墓関係

Tab.7　中世の井戸観察表

番号	位置（グリッド）	時期	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	平面形状	出土遺物	備考
11	X79・Y307	—	2.62	2.62	2.00	方形	—	A-6 を切る
12	X79・Y306	—	2.25	2.05	—	不整円形	—	E-1 に切られる
13	X79・Y306	—	1.14	1.10	1.45	円形	—	

※（ ）は残存値、〔 〕は推定値、不明は－

Tab.8　中世の土坑観察表

番号	位置（グリッド）	時期	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	平面形状	出土遺物	備考
D-1	X77・Y307	—	0.80	0.61	0.09	楕円形	—	
D-2	X77・Y308	—	1.28	0.53	0.11	不整長方形	—	
D-3	X77・Y310	—	1.32	0.86	0.12	長方形	—	P-1 を切る
D-4	X78・Y310	—	1.21	1.00	0.46	楕円形	—	D-22 を切る
D-5	X78・Y309	—	0.92	0.76	0.10	楕円形	—	
D-6	X77・Y307	—	0.64	0.59	0.15	方形	—	
D-7	X79・Y308	—	1.32	0.68	0.11	長方形	—	
D-8	X80・Y309	—	0.90	0.86	0.21	方形	—	P-21 と重複
D-9	X81・Y308	—	0.89	0.86	0.21	方形	—	
D-10	X81・Y306	—	0.75	0.74	0.06	円形	—	
D-15	X78・Y310	—	1.27	0.89	0.22	不整長方形	—	
D-22	X79・Y310	—	0.80	(0.77)		不整形	—	調査区壁で確認

※（ ）は残存値、〔 〕は推定値、不明は－

Tab.9　中世のピット観察表

番号	位置（グリッド）	時期	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	平面形状	出土遺物	備考
P-1	X78・Y306	—	0.19	0.18	0.15	円形	—	
P-2	X78・Y307	—	0.21	0.15	0.10	方形	—	
P-3	X79・Y306	—	0.20	0.18	0.23	方形	—	
P-4	X79・Y307	—	0.16	0.15	0.08	円形	—	
P-5	X77・Y309	—	0.15	0.12	0.08	方形	—	
P-6	X77・Y309	—	0.23	0.18	0.11	楕円形	—	
P-7	X76・Y309	—	0.28	0.25	0.15	不整方形	—	
P-8	X76・Y309	—	0.19	0.16	0.25	方形	—	
P-9	X76・Y310	—	0.21	0.17	0.14	楕円形	—	
P-10	X76・Y310	—	0.23	0.20	0.20	楕円形	—	
P-11	X77・Y310	—	0.30	0.19	0.21	整形	—	
P-12	X77・Y310	—	0.20	0.14	0.08	楕円形	—	
P-13	X79・Y309	—	0.35	0.28	0.02	楕円形	—	
P-14	X79・Y309	—	0.37	0.31	0.09	楕円形	—	
P-15	X80・Y309	—	0.35	0.26	0.06	不整長方形	—	
P-16	X81・Y310	—	0.38	0.26	—	方形	—	
P-17	X77・Y309	—	0.18	0.14	0.30	楕円形	—	
P-18	X77・Y310	—	0.46	(0.46)	0.05	方形	—	D-3 に切られる
P-19	X78・Y310	—	0.22	0.21	0.17	方形	—	
P-20	欠番	—					—	
P-21	X80・Y309	—	0.19	(0.12)	0.18	不整方形	—	D-8 と重複

※（ ）は残存値、〔 〕は推定値、不明は－

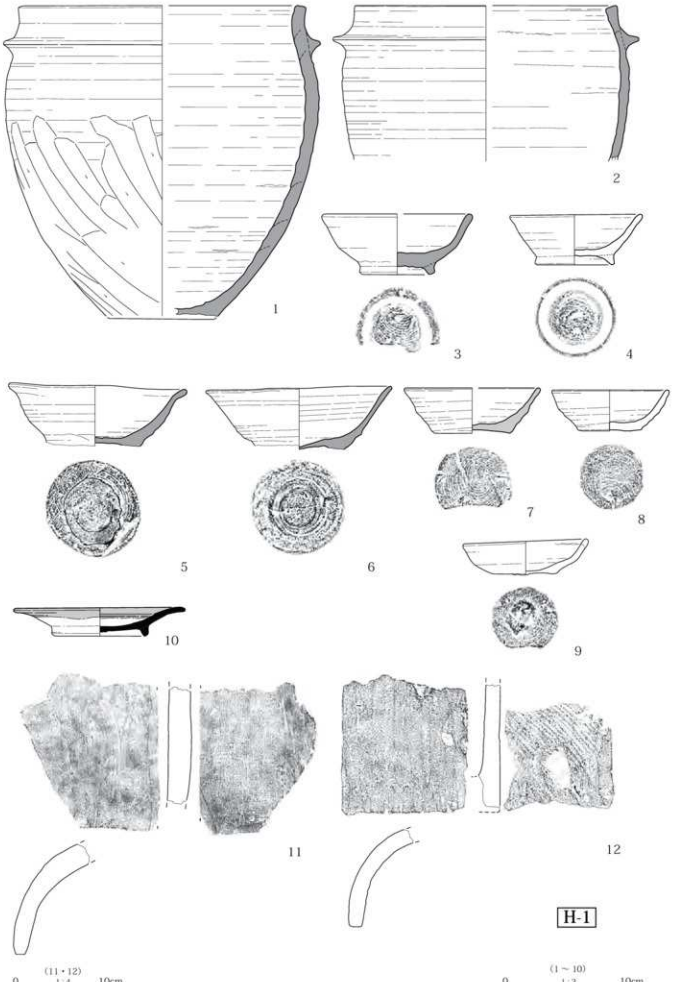


Fig.21　出土遺物（1）

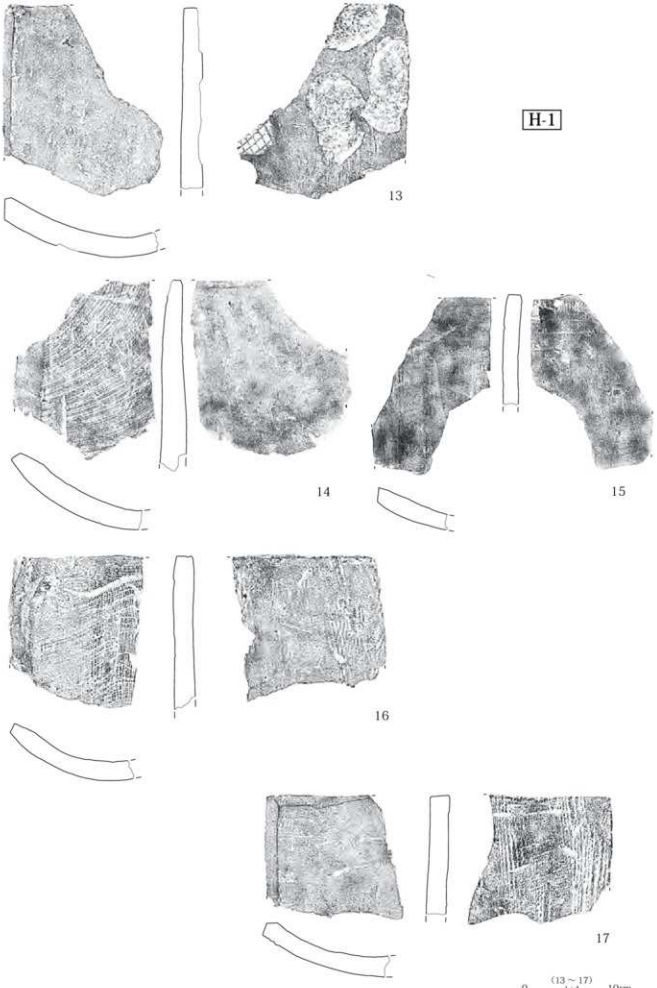


Fig.22　出土遺物（2）

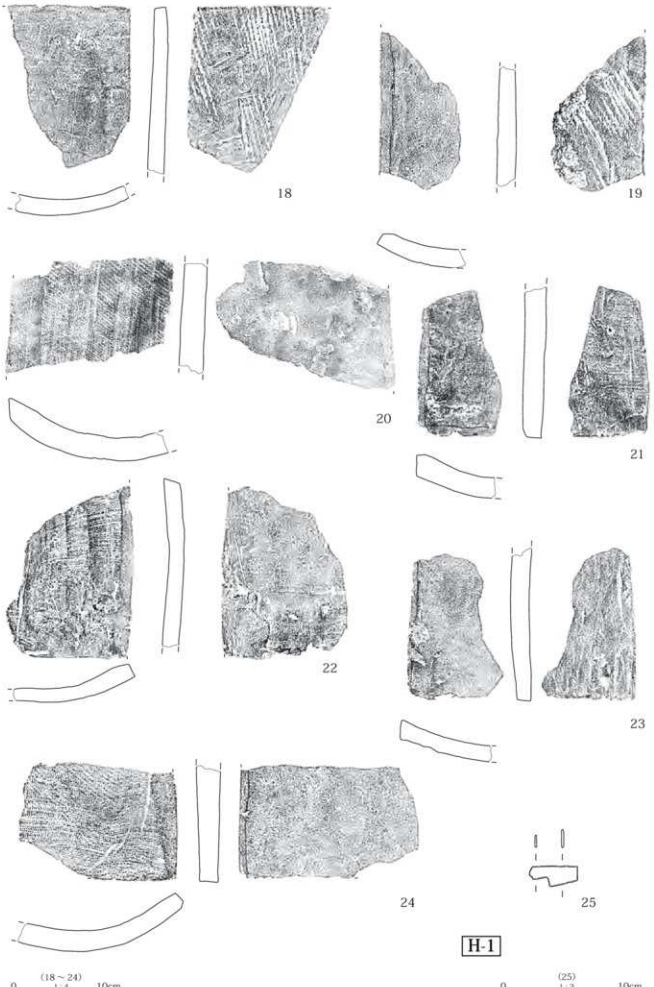


Fig.23　出土遺物（3）

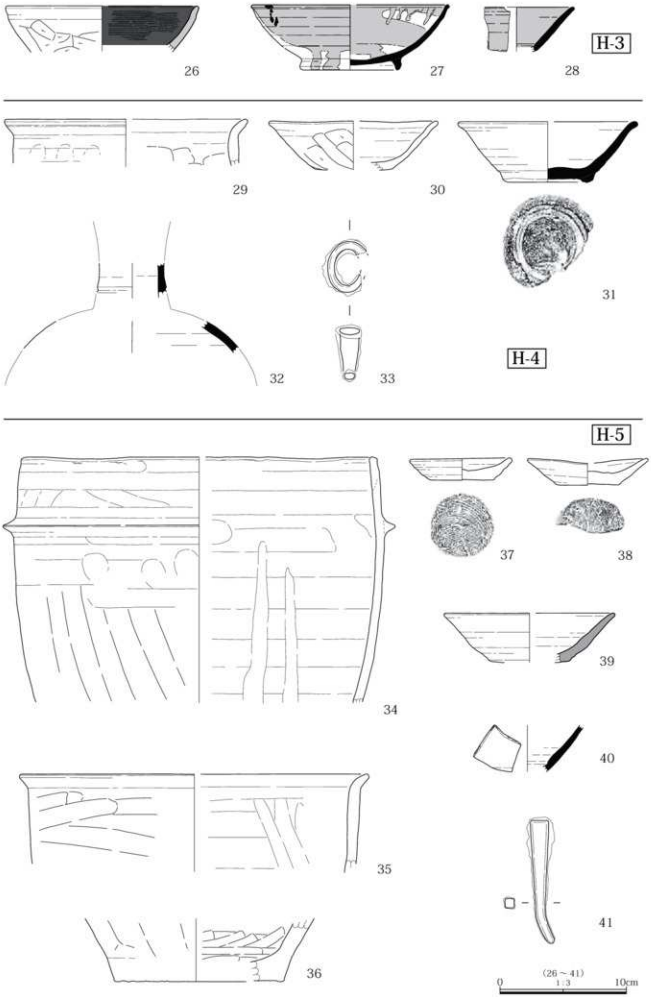


Fig.24　出土遺物（4）

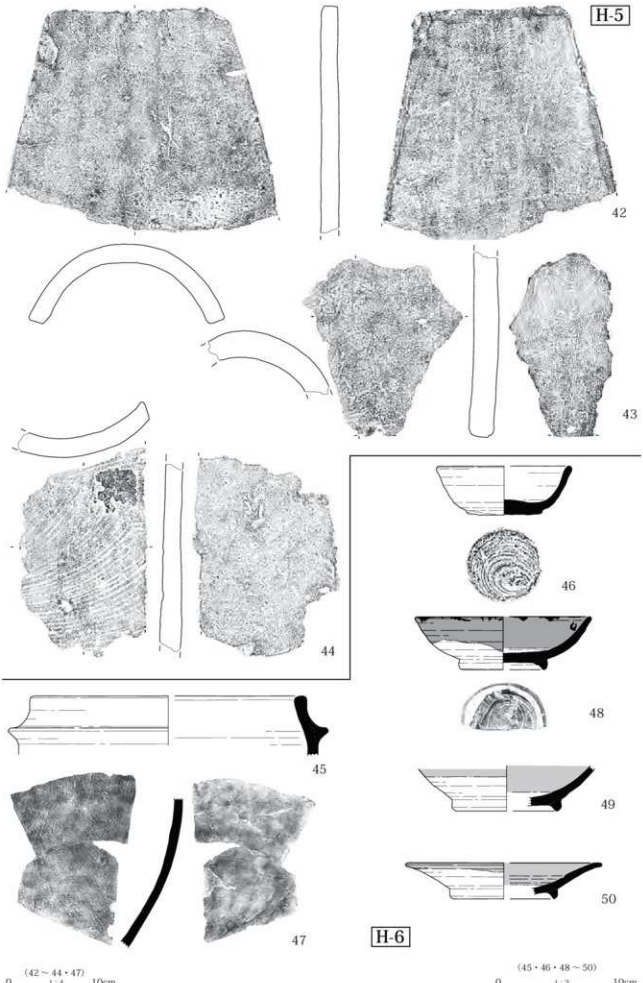

H-5
42
43
44
45
46
47
48
49
50
H-6
(42～44・47)
0 1:4 10cm
(45・46・48～50)
0 1:3 10cm

Fig.25　出土遺物（5）

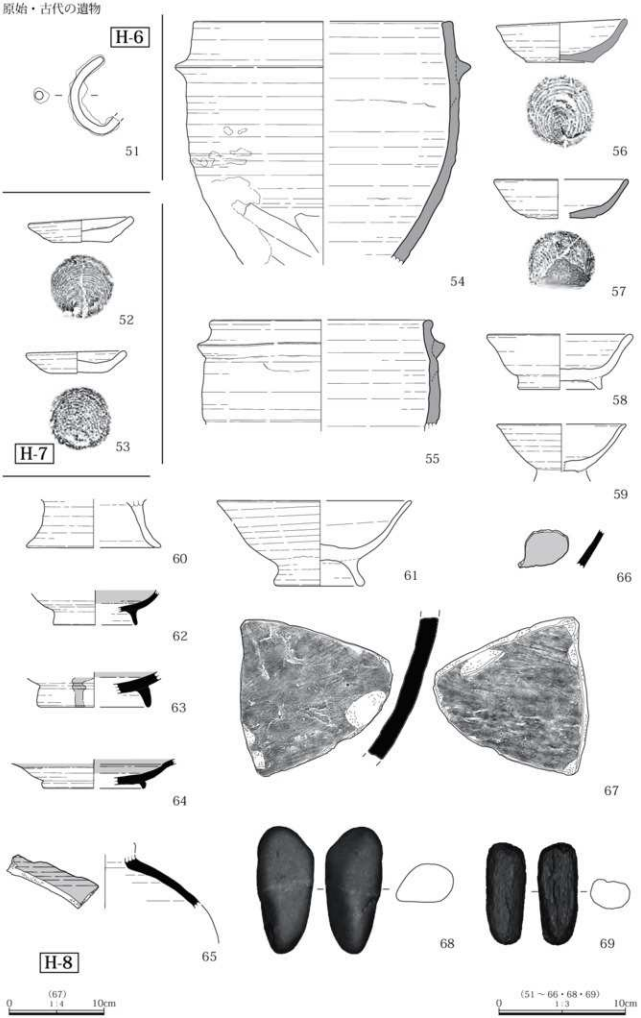

H-6
51
52
53
H-7
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
H-8
(67)
0 1:4 10cm
(51～66・68・69)
0 1:3 10cm

Fig.26　出土遺物（6）

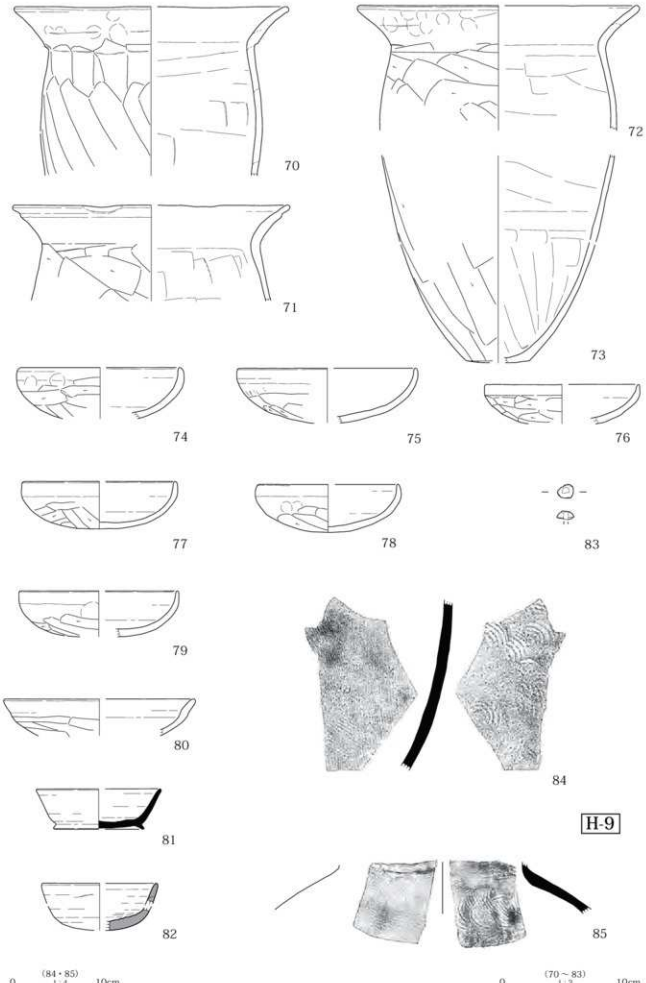

70
71
72
73
74
75
76
77
78
83
79
80
81
82
84
H-9
85
(84・85)
1:4
0
10cm
(70～83)
1:3
0
10cm

Fig.27　出土遺物（7）

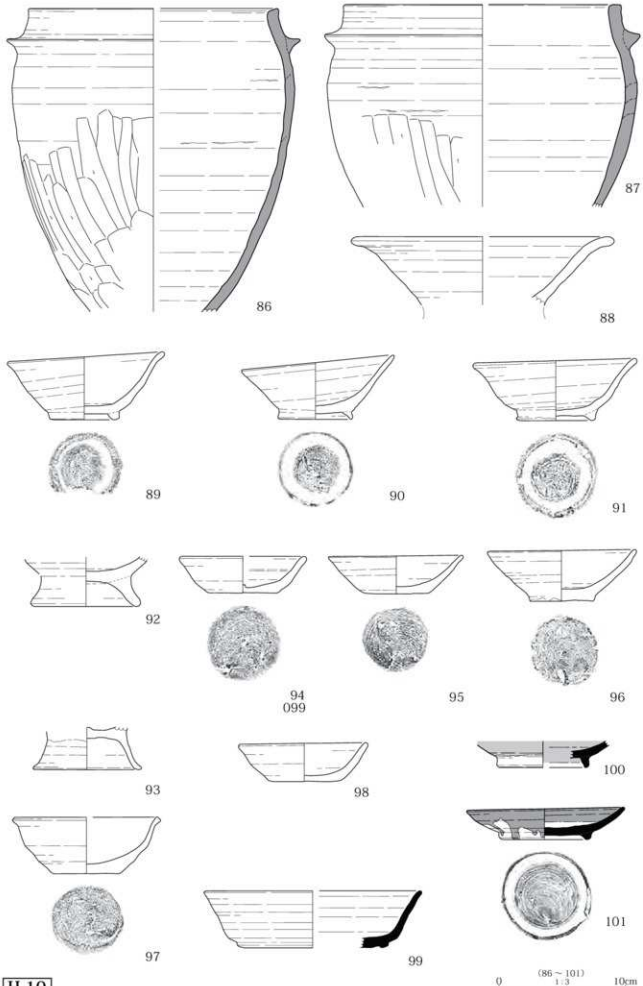

86
87
88
89
90
91
92
94
099
95
96
93
98
100
97
99
101
H-10
(86～101)
1:3
0
10cm

Fig.28　出土遺物（8）

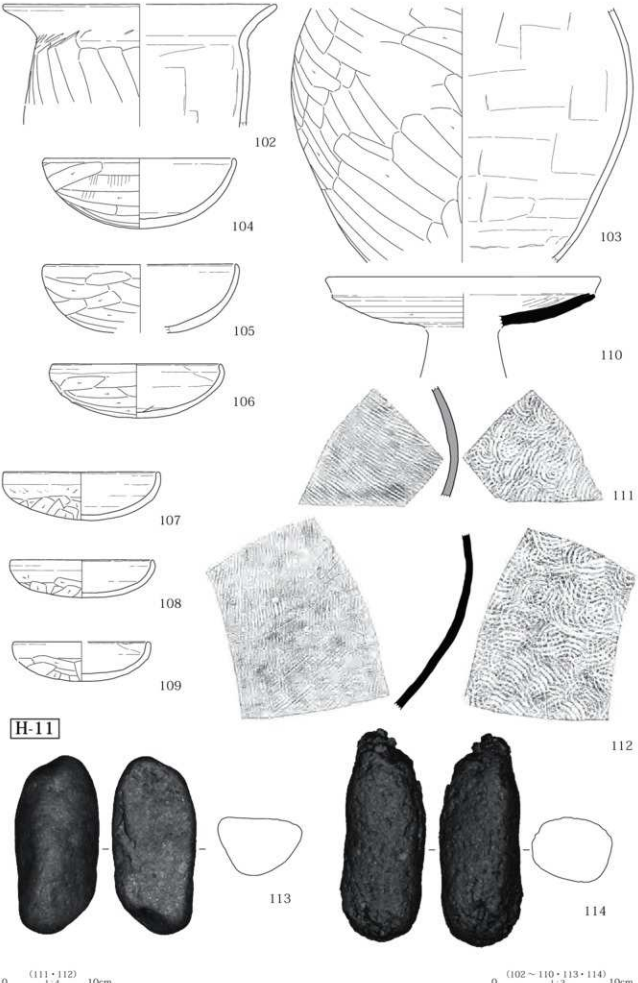

102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
H-11
113
114
0 (111・112) 1:4 10cm
0 (102～110・113・114) 1:3 10cm

Fig.29　出土遺物（9）

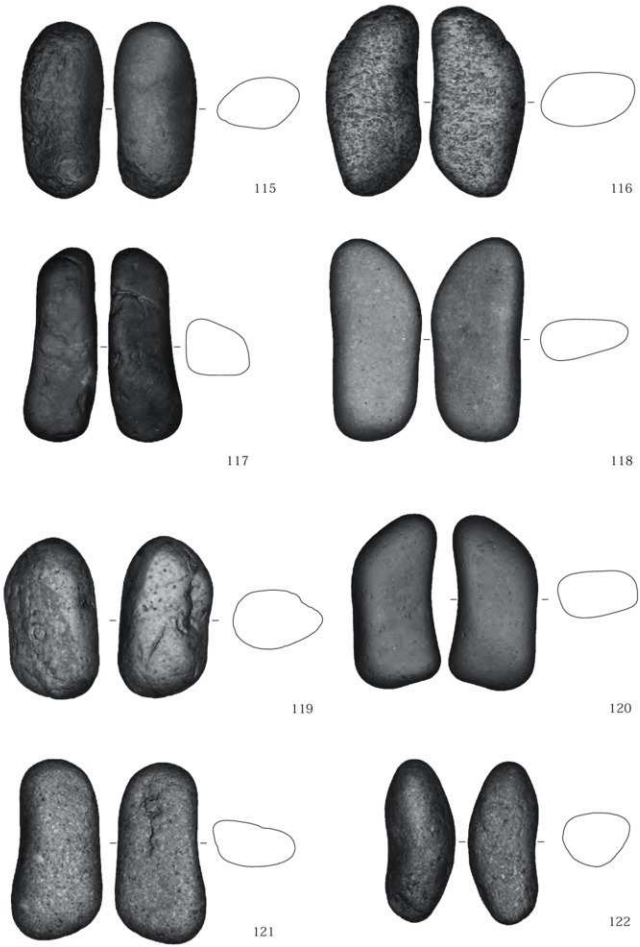


Fig.30　出土遺物（10）

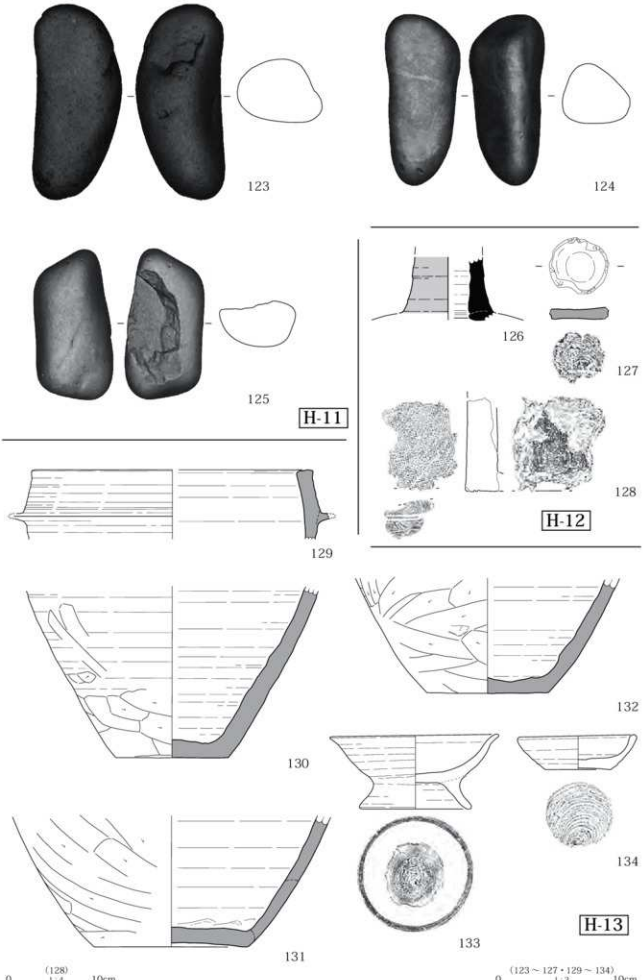
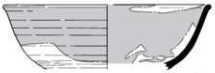
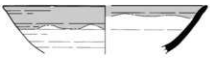


Fig.31　出土遺物（11）

135


136

137


138

139

143

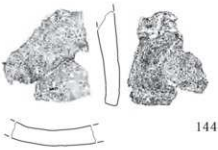
140

141

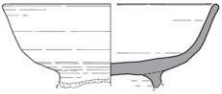
142

H-13

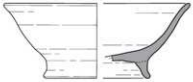
H-14


144

145


146

152


147

153

148

149

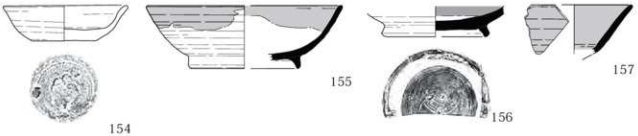
150

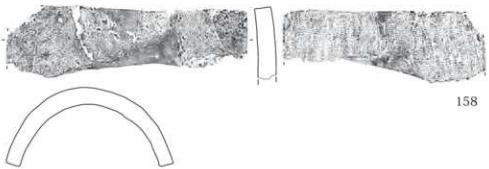
151

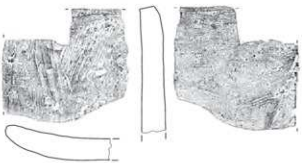
(144・152・153)
0 1:4 10cm

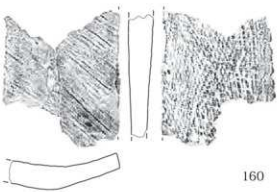
(135～143・145～151)
0 1:3 10cm

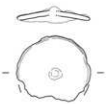
Fig.32　出土遺物（12）

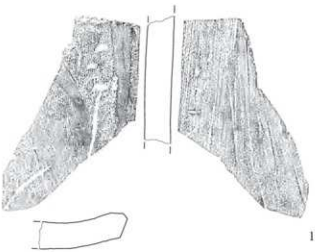












(158～161)
0 1:4 10cm

(154～157・162)
0 1:3 10cm

Fig.33　出土遺物（13）

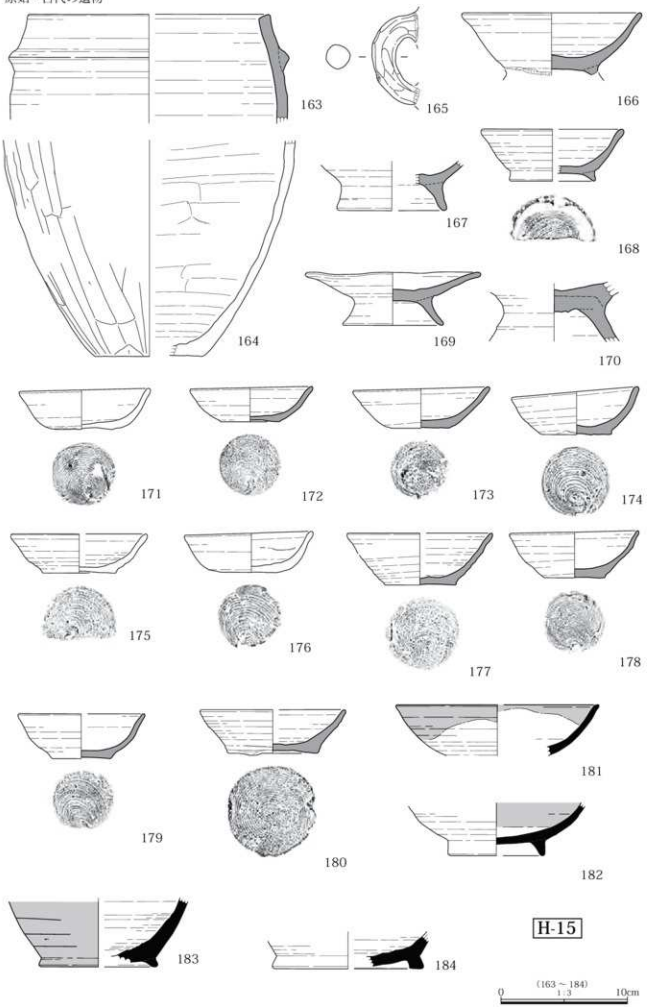


Fig.34　出土遺物（14）

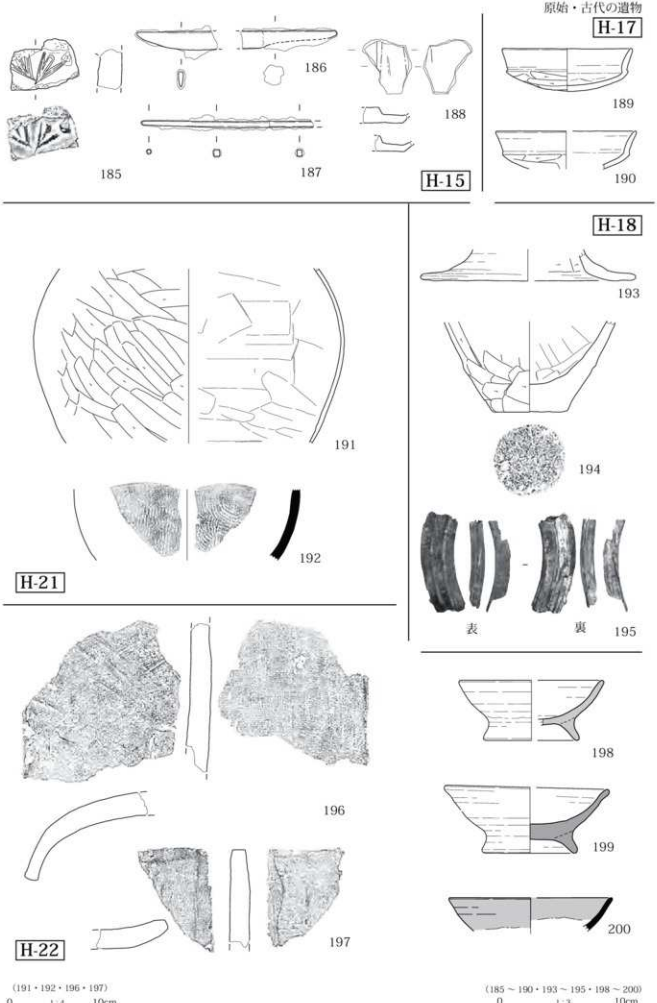
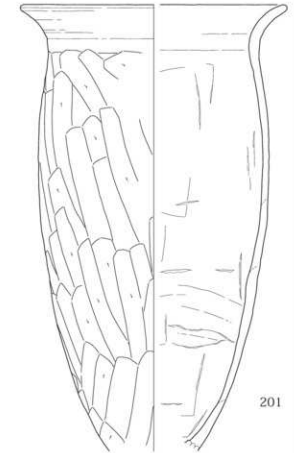
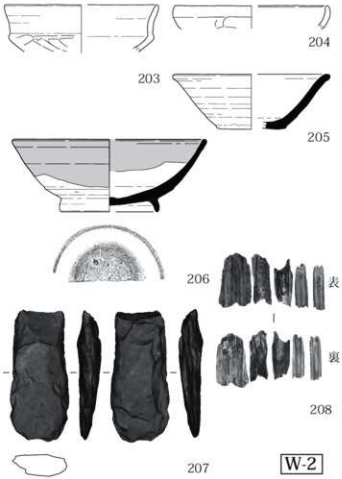
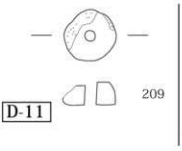
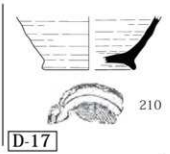


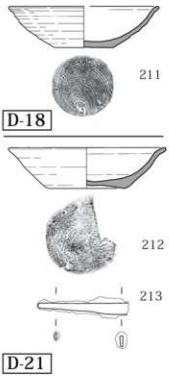
Fig.35　出土遺物（15）











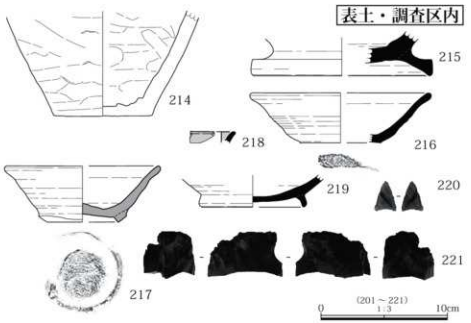
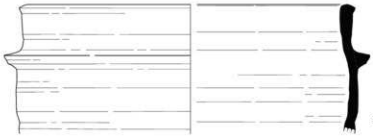
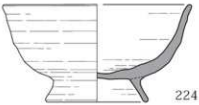
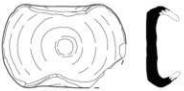
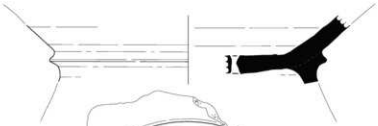


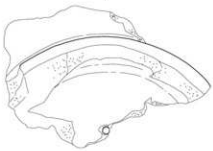
Fig.36　出土遺物（16）

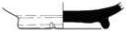












※H-6から流入

I-1

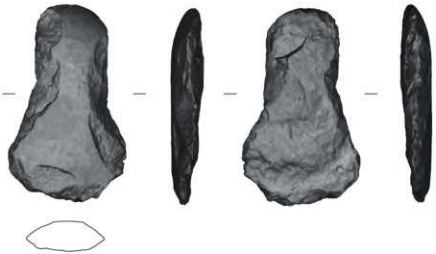
I-4

(231)
0 1:4 10cm

(222～230・232)
0 1:3 10cm

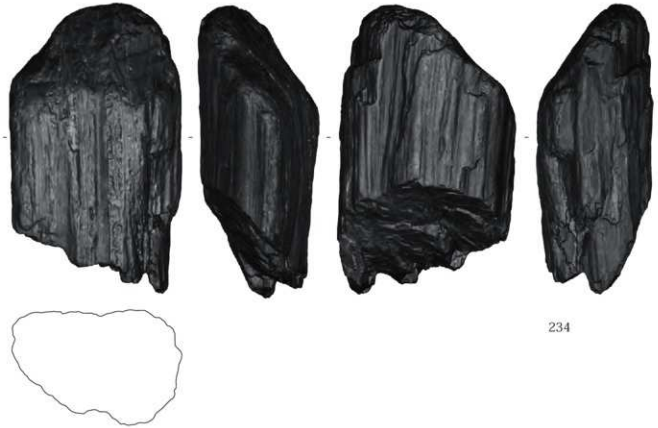
Fig.37　出土遺物（17）

I-4



233

3D モデル



234

3D モデル

(233・234)
0 1:3 10cm

Fig.38　出土遺物（18）

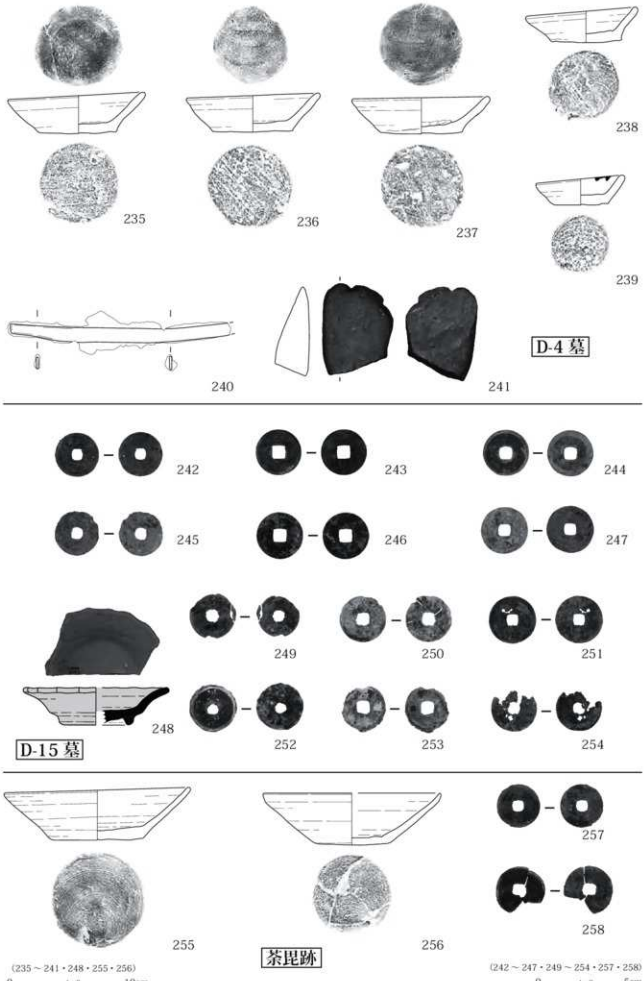


Fig.39　出土遺物（19）

Tab.10　出土遺物観察表（1）

（ ）推定値　（ ）現存値

図版No.	遺構	出土	種別	器種	法量	口径（cm） （）推定値	底径	器高	胎土	色調	施土	調整	備考
001	H-1	カマド	須恵器	甕	口縁～胴部 1/4	<21.4>	—	(24.5)	粗性	にぶい黄橙	黄石・輝石	外：ロクロ調整　ケズリ 内：ロクロ調整	古代型
002	H-1		須恵器	皿	口縁～胴部	<20.6>	—	(2.23)	粗性	にぶい黄橙	輝石・黄石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
003	H-1		須恵器	坏	口縁～底部 1/2	<11.4>	<5.2>	4.8	粗性	明黄褐	輝石・黄石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
004	H-1		土師器	土器	口縁～底部 1/2	10.5	8.0	4.0	普通	橙	黄石・輝石・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	高台部付的な貼付部回転ヘラケズリ
005	H-1		須恵器	坏	口縁～底部 2/3	13.9	—	(5.0)	粗性	橙	黄石・輝石・小礫	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	高台部欠損 内面黒色土で接合？
006	H-1		須恵器	坏	口縁～底部 1/2	14.7	—	(5.0)	粗性	にぶい黄橙	角閃石・黄石・輝石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	高台部欠損
007	H-1		須恵器	坏	口縁～底部 1/2	10.6	6.0	3.6	粗性	橙	黄石・輝石・角閃石・石英	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 浅内面
008	H-1		土師器	土器	口縁～底部 ほぼ完形	9.2	5.0	3.2	普通	橙	角閃石・黄石・輝石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
009	H-1		土師器	土器	口縁～底部 3/4	9.8	5.0	2.8	普通	橙	輝石・黄石・角閃石・石英	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
010	H-1		瓦胎陶器	段皿	口縁～高台部 7/8	13.2	7.0	2.3	良	赤（褐色） 橙（褐色）	黄石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	赤褐色土？焼成 白色 砂不少
011	H-1		瓦	丸瓦	凹行	長さ (11.5)	幅 (13.2)	厚さ 2.4	粗性	にぶい赤橙	黄石・赤褐	外：ヘラナデ 内：布目	
012	H-1		瓦	丸瓦	凹行	長さ (12.3)	幅 (11.5)	厚さ 1.6	普通	にぶい黄橙	輝石・黄石・小礫	外：ヘラナデ 内：布目ケ→布目	丸型部との接合痕？
013	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (19.0)	幅 (16.9)	厚さ 2.3	不良	褐灰	黄石・輝石	外：布目 内：指ナデタテ	
014	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (19.3)	幅 (15.3)	厚さ 2.4	不良	黄褐灰	輝石・黄石	外：布目ケ→布目 内：ヘラナデ	
015	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (18.8)	幅 (12.8)	厚さ 1.7	普通	灰	黄石・輝石・小礫	外：布目 内：縄タタキ	
016	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (18.1)	幅 (13.9)	厚さ 2.0	微良	にぶい黄橙	黄石・輝石	外：布目 内：縄タタキ	
017	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (12.5)	幅 (9.56)	厚さ 2.0	不良	灰	黄石・輝石・小礫	外：ヘラナデ 内：縄タタキ	
018	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (17.9)	幅 (12.26)	厚さ 1.6	やや粗性	にぶい黄橙	黄石・輝石	外：布目　ヘラナデ 内：縄タタキ	
019	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (14.9)	幅 (9.6)	厚さ 1.9	不良	灰	黄石・輝石	外：ヘラナデ 内：縄タタキ	
020	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (11.8)	幅 (17.8)	厚さ 2.5	微良	橙	黄石・輝石・小礫	外：布目 内：ヘラナデ	内面黒色炭化物
021	H-1	カマド	瓦	平瓦	凹行	長さ (10.0)	幅 (8.6)	厚さ 2.2	良	灰	黄石・輝石	外：布目 内：ヘラナデ	焼ヌ白土一部残存 1箇所 粘土塊に布目圧痕 1箇所に保存
022	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (13.7)	幅 (7.8)	厚さ 1.7	やや粗性	灰	黄石・輝石・小礫	外：布目ケ→布目 内：ヘラナデ	
023	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (15.6)	幅 (9.7)	厚さ 2.0	不良	褐灰	黄石・輝石・雲母	外：ヘラナデ 内：ヘラナデ	
024	H-1		瓦	平瓦	凹行	長さ (12.2)	幅 (13.9)	厚さ 2.0	良	灰	黄石・輝石・石英or雲母？	外：布目 内：ヘラナデ	
025	H-1		銅製品	不明	凹行	長さ (3.6)	幅 (1.6)	厚さ 0.2		銅製			銅製？ 重量 3g
026	H-3		須恵器	坏	口縁～体部 破片	<13.0>	—	(3.0)	普通	灰白（にぶい黄橙） 内：黒	黄石・輝石・角閃石	外：ロクロ調整　ケズリ 内：ロクロ調整　ミガキ	
027	H-3		瓦胎陶器	坏	口縁～高台部 1/3	7.1	7.4	5.2	良	赤（褐色） 暗（オリーブ灰）	黄石・輝石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	焼ヌ白土一部残存 1箇所 粘土塊に布目圧痕 1箇所に保存
028	H-3		瓦胎陶器	坏	口縁～体部 破片	—	—	(3.5)	普通	赤（褐色） 暗（オリーブ灰）	黄石・輝石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
029	H-4		土師器	甕	口縁部 破片	<19.0>	—	(3.8)	良	橙	輝石・角閃石・黄石	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	口ヨ、ロクロ痕 内面に炭化物
030	H-4		土師器	坏	口縁～底部 破片	<13.2>	<6.2>	(3.9)	普通	橙	輝石・黄石・角閃石	外：ヨコナデ　ケズリ 内：ヨコナデ	外面底部に黒斑あり
031	H-4		須恵器	坏	口縁～底部 破片	<13.8>	6.2	4.8	不良	灰白	黄石・輝石・角閃石・石英・小礫	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
032	H-4		瓦胎陶器	長胴甕	口縁～胴部 破片	—	—	(12.5)	普通	赤（褐色） 暗（オリーブ灰）	輝石・黄石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	口縁上端に ヘラ状工具による刻目
033	H-4		鞴羽口製品			先径 7.7	基径 (2.1)	厚さ 0.4		銅製			銅合金 重量 7g
034	H-5	カマド	土師器	羽釜脚	口縁～胴部 破片	<27.4>	—	(19.4)	普通	赤褐	角閃石・黄石・輝石・小礫	外：ナデ 内：ナデ	脚に右向～脚体あり
035	H-5	カマド	土師器	土器	口縁～胴部 破片	<27.4>	—	(7.1)	不良	黒褐	黄石・輝石・角閃石	外：ナデ 内：ナデ	脚のも
036	H-5		土師器	土器	脚～底部 破片	—	<14.0>	(5.0)	普通	明赤褐	黄石・輝石・角閃石	外：ヘラナデ 内：ヨコナデ	
037	H-5		土師器	甕	口縁～底部 4/5	7.8	5.0	1.8	やや粗性	にぶい橙	黄石・角閃石・輝石・石英	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 浅内面
038	H-5		土師器	坏	口縁～底部 2/3	<9.4>	<5.0>	2.1	微良	橙	黄石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
039	H-5		須恵器	坏	口縁～底部 1/3	<13.8>	<6.4>	(3.9)	粗性	橙	輝石・黄石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
040	H-5		石製	臼	体部 破片	—	—	(3.7)	良	赤（褐色） 暗（灰白）	輝石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
041	H-5	カマド	鞴羽口製品			先径 6.7	基径 6.4	厚さ 0.7		銅製			銅製　44g
042	H-5	カマド	瓦	丸瓦	3/5	長さ (25.5)	幅 (20.1)	厚さ 1.6	粗性	にぶい 赤褐	小礫・長石・輝石	外：ヘラナデ 内：布目	高さ 8.0 cm
043	H-5	西土坑	瓦	丸瓦	凹行 破片	長さ (15.5)	幅 (13.5)	厚さ 1.6	普通	灰	小礫・長石・輝石	外：ヘラナデ 内：布目	
044	H-5	西土坑	瓦	平瓦	凹行 破片	長さ (14.8)	幅 (8.4)	厚さ 1.9	やや粗性	灰	輝石・長石	外：布目ケ→布目 内：ヘラナデ	焼付着
045	H-6		須恵器	坏	口縁～底部 破片	<21.0>	—	(4.7)	普通	灰白	輝石・角閃石・長石・石英	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
046	H-6		須恵器	坏	口縁～底部 1/2	10.4	5.8	3.9	不良	黄灰	輝石・長石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 浅内面
047	H-6	カマド	須恵器	甕	胴部 破片	—	—	(5.58)	良	灰	黄石・輝石	外：平行タタキ（縄敷き？） 内：	重量　24g
048	H-6		瓦胎陶器	坏	口縁～高台部 破片	<13.8>	<6.4>	4.2	普通	赤（褐色） 暗（オリーブ灰）	輝石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	口縁部に煤付着 浅型高台
049	H-6		瓦胎陶器	坏	口縁～高台部 破片	—	<8.0>	(3.6)	普通	赤（褐色） 暗（灰オリーブ）	黄石・輝石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
050	H-6		瓦胎陶器	段皿	口縁～高台部 破片	<15.0>	<8.0>	2.8	普通	赤（褐色） 暗（褐灰）	黄石・輝石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	赤褐色土？焼成 白色 砂粒 多
051	H-6		銅製品	鞴羽口製品		先径 6.4	基径 9.1	厚さ 1.2		銅製			銅製　21g
052	H-7		土師器	甕	口縁～底部 完形	8.0	4.8	2.0	普通	橙	長石・輝石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
053	H-7	カマド	土師器	甕	口縁～底部 完形	7.6	4.8	1.8	普通	明赤褐	黄石・輝石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 浅小丸
054	H-8	カマド	須恵器	坏	口縁～胴部 破片	<20.0>	—	(19.2)	粗性	明赤褐	黄石・輝石	外：ロクロ調整　ケズリ 内：ロクロ調整	外面に粘土付着
055	H-8		須恵器	坏	口縁～胴部 破片	<17.0>	—	(8.8)	やや粗性	橙	輝石・角閃石・長石・石英・小礫	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
056	H-8		須恵器	坏	口縁～底部 4/5	10.0	5.2	3.4	粗性	橙	長石・輝石・小礫	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 浅内面
057	H-8		須恵器	坏	口縁～底部 破片	<10.4>	5.0	3.1	粗性	浅黄橙	黄石・輝石・石英	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
058	H-8	西穴	土師器	土器	口縁～高台部 破片	11.2	6.4	4.4	普通	橙	長石・輝石・石英	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転ヘラケズリ
059	H-8	カマド	土師器	土器	口縁～底部 1/3	<13.4>	—	(5.1)	普通	橙	長石・輝石・小礫・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	高台部欠損
060	H-8		土師器	土器	高台部 破片	—	<10.4>	(3.8)	普通	浅黄橙	黄石・輝石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	高足高台
061	H-8	カマド	土師器	土器	口縁～高台部 3/4	14.2	6.6	6.8	普通	橙	長石・輝石・小礫・雲母・角閃石・石英	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
062	H-8		瓦胎陶器	坏	口縁～底部 破片	—	<8.4>	(2.8)	普通	赤（褐色） 暗（灰オリーブ）	輝石・長石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
063	H-8		瓦胎陶器	坏	口縁～底部 破片	—	<8.0>	(2.8)	普通	赤（褐色） 暗（オリーブ灰）	輝石・長石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
064	H-8		瓦胎陶器	坏	口縁～底部 破片	—	<7.8>	(2.3)	普通	赤（褐色） 暗（灰オリーブ）	輝石・長石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
065	H-8		瓦胎陶器	短頸壺	頸部 破片	—	—	(4.2)	普通	赤（褐色） 暗（灰オリーブ）	輝石・長石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	

Tab.11　出土遺物観察表（2）

遺構No.	遺構	出土	種別	器種	部位	法量（cm）口径	底径	器高	形成	色調	胎土	調整	備考
066	H-8		石鏃	鳥	脚部 欠損			(3.0)	普通	赤（RO）オリーブ褐	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	越前焼
067	H-8		須恵器	大甕	胴部	—	—	(15.4)	普通	灰	長石・輝石	外：ヘラケズリ 内：ナデ	転用砥石か
068	H-8		石製品	鳥偏石		長7.9	幅 4.7	厚さ 3.1	—	—	蛇紋		重量 21.0g
069	H-8		石製品	鳥偏石		長7.8	幅 5.1	厚さ 3.1	—	—	結晶片岩		重量 101g
070	H-9		土師器	甕	口縁～胴部 1/3	21.4	—	(13.4)	良	橙	角閃石・輝石・長石	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ ヘラナデ	
071	H-9		土師器	甕	口縁～胴部 1/6	≪21.6≫	—	(7.5)	良	橙	長石・輝石・角閃石	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ ケズリ	
072	H-9		土師器	甕	口縁～胴部 1/6	≪22.0≫	—	(9.9)	普通	橙	輝石・長石	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
073	H-9		土師器	甕	胴～底部 1/6	—	≪5.0≫	(16.5)	良	明赤褐	長石・輝石・角閃石・小礫	外：ケズリ（胴）・底部） 内：ヨコナデ	
074	H-9		土師器	坏	口縁～底部 1/4	≪12.6≫	—	(4.0)	普通	明赤褐	角閃石・長石・輝石	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
075	H-9		土師器	坏	口縁～底部 1/4	≪14.0≫	—	(4.3)	普通	橙	角閃石・長石・輝石・石英	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
076	H-9		土師器	坏	口縁～底部 1/4	≪12.0≫	—	(3.1)	普通	にぶい橙	輝石・長石・角閃石・雲母	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
077	H-9		土師器	坏	口縁～底部 1/3	12.0	—	3.7	普通	明赤褐	長石・輝石・角閃石	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
078	H-9		土師器	坏	口縁～底部 1/3	11.0	—	3.8	良	橙	輝石・長石・角閃石・石英	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
079	H-9		土師器	坏	口縁～底部 1/3	12.4	—	(3.0)	普通	明褐	長石・輝石・角閃石・石英	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
080	H-9		土師器	坏	口縁～体部 1/6	≪15.0≫	—	(2.9)	普通	橙	輝石・長石・角閃石	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
081	H-9		須恵器	坏	口縁～底部 1/6	≪9.6≫	≪7.0≫	3.2	普通	灰白	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
082	H-9		須恵器	坏	口縁～底部 1/3	≪9.0≫	—	(3.7)	普通	褐灰	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	埋土掘立 1T=掘建・底部
083	H-9	床直	銅製品	不明	破片	長2.3	幅 1.1	厚さ (0.7)	—	—	銅製		銅線の断片と思われる 重量 1g
084	H-9		須恵器	甕	胴部 破片	—	—	(18.0)	普通	暗灰	長石・輝石	外：ボリタキ 内：ヨコナデ ケズリ	
085	H-9	上面	須恵器	甕	胴～胴部 破片	—	—	(4.7)	普通	灰	長石・輝石・角閃石・雲母	外：ボリタキ 内：ヨコナデ ケズリ	
086	H-10		須恵器	須恵	口縁～胴部 1/4	≪19.6≫	—	(24.0)	やや 軟質	灰褐褐	長石・輝石・角閃石・雲母	外：ロクロ整形 ケズリ 内：ロクロ整形	
087	H-10	カマド	須恵器	須恵	口縁～胴部 破片	≪21.8≫	—	(16.1)	やや 軟質	褐灰	長石・輝石	外：ロクロ整形 ケズリ 内：ロクロ整形	
088	H-10	D4	土師質土器	大鍋	口縁～体部 1/3	≪20.0≫	—	(5.4)	やや 軟質	明赤褐	輝石・長石・小礫	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
089	H-10	D4	土師質土器	坏	口縁～底部 1/2	12.2	5.0	5.4	軟質	明赤褐	長石・輝石・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
090	H-10	D4	土師質土器	坏	口縁～底部 完形	12.0	5.6	5.1	軟質	赤褐	長石・輝石・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
091	H-10	D3	土師質土器	坏	口縁～底部 3/4	12.1	5.6	4.9	軟質	橙	長石・輝石・小礫	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
092	H-10	D2	土師質土器	坏	体～底部 1/3	—	6.2	(3.9)	軟質	橙	輝石・長石・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
093	H-10	D5	土師質土器	坏	底～底部 破片	—	6.4	(3.4)	普通	橙	長石・輝石・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	高足高台
094	H-10	D3	土師質土器	坏	口縁～底部 1/3	9.6	5.7	2.9	還元	にぶい 褐灰	長石・角閃石・輝石・小礫	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
095	H-10	D4	土師質土器	坏	口縁～底部 1/4 (復元径)	10.5	5.1	3.1	軟質	にぶい 褐灰	輝石・長石・角閃石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	内面底に黒斑あり 底部回転糸切り
096	H-10	D5	土師質土器	坏	口縁～底部 法式不明	11.6	5.0	4.1		灰白	輝石・長石・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
097	H-10	D5	土師質土器	坏	口縁～底部 1/4	11.2	5.4	4.5	軟質	にぶい 褐灰	輝石・長石・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
098	H-10	D3	土師質土器	坏	口縁～底部 1/4	9.9	5.6	3.1	還元	黒褐	長石・角閃石・輝石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
099	H-10		須恵器	坏	口縁～底台部 破片	≪17.0≫	≪10.8≫	4.5	良	青灰	輝石・長石・小礫	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	見込に白石見えか 陶器か、高台
100	H-10		灰釉陶器	瓶	口縁～底台部 破片 (1/3)	—	≪8.6≫	(2.1)	普通	赤（RO）オリーブ褐	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	光ヶ丘1号窯跡 Ⅳ-雑下
101	H-10	D1	灰釉陶器	瓶	口縁～底台部 破片 (1/3)	12.3	6.6	2.6	良	赤（RO）オリーブ褐	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	石石子窯跡 IZK 地下東山72号窯跡 掘り・発掘調査時用
102	H-11		土師器	甕	口縁～胴部 1/3	21.4	—	(8.7)	良	橙	輝石・角閃石・長石・雲母	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヘラナデ	胴部中位張あり
103	H-11		土師器	甕	胴部 破片	—	—	(20.1)	良	橙	長石・輝石・角閃石	外：ケズリ 内：ヘラナデ	
104	H-11		土師器	坏	口縁～底部 3/4	15.0	—	5.6	普通	明赤褐	輝石・長石・雲母	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
105	H-11		土師器	坏	口縁～底部 1/2	15.0	—	(5.4)	良	明赤褐	長石・輝石・角閃石	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
106	H-11		土師器	坏	口縁～底部 破片	13.2	—	4.3	良	橙	角閃石・輝石・長石	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヘラナデ・ヨコナデ	
107	H-10		土師器	坏	口縁～底部 1/3	12.2	—	3.9	良	明赤褐	輝石・長石・角閃石・雲母	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	体部に黒斑あり
108	H-11		土師器	坏	口縁～底部 1/4	11.2	—	3.0	普通	にぶい 橙	輝石・長石・角閃石	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
109	H-11		土師器	坏	口縁～底部 1/2	10.6	—	3.1	良	橙	角閃石・輝石・長石	外：ヨコナデ ケズリ 内：ヨコナデ	
110	H-11		須恵器	高盤	杯体部 破片	—	—	(2.6)	不良	青灰	輝石・長石	外：ロクロ整形 ケズリ 内：ロクロ整形ヘラナデ	内面平滑 転用砥か 図上集め
111	H-11		須恵器	甕	胴部 破片	—	—	(11.7)	軟質	橙	長石・輝石	外：ボリタキ 内：ロクロ整形ケズリ	
112	H-11		須恵器	甕	胴部 破片	—	—	(18.0)	不良	灰	長石・輝石	外：ボリタキ 内：ロクロ整形ケズリ	
113	H-11		石製品	鳥偏石		長5.6	幅 3.0	厚さ 4.5	—	—	安山石		重量 63.7g
114	H-11		石製品	鳥偏石	頭部 欠損	長7.0	幅 6.4	厚さ 5.0	—	—	安山石		重量 86.5g
115	H-11		石製品	鳥偏石		長6.0	幅 6.5	厚さ 9.0	—	—	安山石		重量 104g
116	H-11		石製品	鳥偏石		長5.5	幅 7.3	厚さ 9.2	—	—	閃緑岩		重量 82.9g
117	H-11		石製品	鳥偏石		長5.5	幅 5.6	厚さ 8.5	—	—	安山石		重量 64.9g
118	H-11		石製品	鳥偏石		長6.0	幅 7.1	厚さ 9.2	—	—	安山石		重量 65.9g
119	H-11		石製品	鳥偏石		長5.8	幅 7.4	厚さ 7.7	—	—	凝灰石		重量 69.9g
120	H-11		石製品	鳥偏石		長5.5	幅 6.8	厚さ 5.7	—	—	北武石		重量 64.9g
121	H-11		石製品	鳥偏石		長5.4	幅 7.4	厚さ 5.5	—	—	安山石		重量 61.8g
122	H-11		石製品	鳥偏石		長5.0	幅 5.5	厚さ 4.2	—	—	安山石		重量 46.9g
123	H-11		石製品	鳥偏石		長5.5	幅 6.8	厚さ 5.5	—	—	安山石		重量 83.2g
124	H-11		石製品	鳥偏石		長5.6	幅 5.8	厚さ 4.6	—	—	北武石		重量 62.3g
125	H-11		石製品	鳥偏石		長5.7	幅 6.5	厚さ 5.6	—	—	閃緑岩		重量 46.4g
126	H-12		灰釉陶器	長頸瓶	頸部 破片	—	—	(5.0)	普通	赤（RO）オリーブ褐	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	埋土集石
127	H-12		須恵器	土師片製円盤		長2.4	幅 4.5	厚さ 0.9	軟質	褐灰	長石・角閃石・輝石		底部回転糸切り
128	H-12		瓦	軒平瓦	瓦当部 破片	長7.9 (9.6)	幅 (9.0)	厚さ 3.5	普通	灰	長石・輝石	瓦当：押圧 2 本に沿ヘラ 外：凸目 内：ナデ	B-6 第 19 分隊調査 「長石こめられた粘土」 PZ5P0086
129	H-13		須恵器	須恵	口縁～胴部 破片	≪21.6≫	—	(5.5)	やや 軟質	灰白	輝石・長石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
130	H-13		須恵器	土釜か	胴～底部 破片	—	9.0	(12.5)	軟質	明赤褐	輝石・長石・角閃石	外：ロクロ整形 ケズリ 内：ロクロ整形	

Tab.12　出土遺物観察表（3）

図版No.	遺構	出土	種別	器種	部位	法量 (cm) 口径	底径	最大径	形式	色調	胎土	調整	備考
131	H-13		須恵器	土釜か	脚・底部 1/5	—	12.2	10.6)	離性	赤褐	輝石・長石・角閃石	外：ケズリ 内：ロクロ整形	底部ナデ
132	H-13		須恵器	土釜か	脚・底部 1/5	—	9.8	(9.1)	離性	褐	輝石・長石・小礫	外：ケズリ 内：ロクロ整形	
133	H-13	岩穴	土師質土器	椀	口縁・高台部 9/10	13.2	5.9	8.4	離性	淺黄橙	輝石・角閃石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 口唇土器
134	H-13		土師質土器	椀	口縁・底部 4/5	9.1	5.2	2.8	離性	橙	輝石・長石・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
135	H-13		須恵器	椀	口縁・高台部 1/4	<8.0>	<10.0>	5.8	普通	素：灰白 釉：オリーブ灰	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	型ヶ丘1号窯式 Sa 第5
136	H-13		須恵器	椀	口縁・体部 1/9	<10.2>	—	(5.1)	普通	素：灰白 釉：灰白	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
137	H-13		須恵器	椀	体・高台部 1/6	—	<8.0>	(5.2)	普通	素：灰黄 釉：灰白	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
138	H-13		須恵器	椀	口縁・体部 1/9	<14.0>	—	(3.8)	普通	素：灰白 釉：灰白	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
139	H-13		須恵器	椀	口縁部 1/8	<12.4>	—	(1.3)	良	素：灰白 釉：オリーブ灰	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
140	H-13		須恵器	椀	口縁部 1/8	—	—	(2.0)	普通	素：灰黄 釉：オリーブ灰	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	142 を元に器形推定
141	H-13		須恵器	椀	体部 1/8	—	—	(1.3)	普通	素：灰黄 釉：オリーブ灰	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	釉有 15
142	H-13		須恵器	椀	底・高台部 1/4	—	<6.4>	(1.3)	普通	素：明黄褐 明オリーブ	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	140 を元に器形推定
143	H-13		須恵器	短頸壺	脚部 破片	—	—	(4.0)	良	灰	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
144	H-13		瓦	丸瓦	破片 (9.0)	幅 (8.8)	厚さ 1.8	長 —	良	黒	長石・輝石	外：ヘラナデ 内：布目	内面に粘着（人）
145	H-14	D1	須恵器	皆瓶	口縁・頸部 破片	<17.6>	—	(6.6)	普通	黄灰	輝石・長石・小礫	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
146	H-14		須恵器	椀	口縁・高台部 1/2	16.8	7.0	(6.6)	不良	にぶい： 黄橙	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
147	H-14		須恵器	椀	口縁・高台部 1/2	<14.0>	<8.0>	5.9	離性	にぶい： 黄橙	輝石・長石・小礫	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
148	H-14		土師質土器	椀	口縁・高台部 9/10	11.2	6.0	5.6	離性	橙		外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
149	H-14		須恵器	椀	口縁・高台部 3/4	11.5	6.2	4.8	やや離性	黒		外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
150	H-14		須恵器	坏	口縁・底部 3/4	10.0	4.8	3.4	離性	にぶい： 黄橙		外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 石持ち
151	H-14		須恵器	坏	口縁・底部 1/3	10.2	4.8	3.5	離性	橙		外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
152	H-14		須恵器	大甕	脚部 破片	—	—	(2.4)	良	灰	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
153	H-14		須恵器	大甕	脚部 破片	—	—	(12.2)	良	灰	長石・輝石	外：平行タタキ 内：同心円当て目	
154	H-14		土師質土器	椀	口縁・底部 1/2	9.6	5.0	2.9	離性	橙		外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
155	H-14	岩穴	須恵器	椀	口縁・高台部 1/3	<15.4>	<8.4>	5.0	普通	素：灰白 釉：灰白	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	型ヶ丘1号窯式（蛇窯） SK 第7
156	H-14		須恵器	椀	体・高台部 1/4	—	7.8	(2.4)	良	素：灰白 釉：オリーブ灰		外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	型ヶ丘1号窯式 Sa 第9 底部回転糸切り
157	H-14		須恵器	椀蓋	口縁・底部 破片	—	—	(3.9)	普通	素：灰白 釉：灰白	輝石・長石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
158	H-14		瓦	丸瓦	破片 (7.5)	幅 (17.7)	厚さ 1.4	長 —	普通	灰	長石・輝石	外：ヘラナデ 内：布目	
159	H-14	カマド	瓦	平瓦	破片 (13.5)	幅 (13.5)	厚さ 2.5	長 —	良	灰	長石・輝石	外：布目→ヘラ目 内：ヘラナデ	
160	H-14		瓦	平瓦	破片 (7.5)	幅 (7.1)	厚さ 2.0	長 —	離性	にぶい： 黄橙	輝石・長石	外：平行タタキ 内：ヘラ平行タキ	
161	H-14	カマド左袖	瓦	平瓦	破片 (21.9)	幅 (14.9)	厚さ 2.8	長 —	普通	灰		外：布目 内：縦ケズキ	
162	H-14		円筒埴輪	朝顔	破片 (5.5)	幅 (5.2)	厚さ 1.1			鉄製		上面に刷毛	鉄製刷毛痕 粘土 20g
163	H-15		須恵器	皆瓶	口縁・頸部 破片	<19.0>	—	(8.6)	離性	にぶい： 黄橙	輝石・長石・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
164	H-15		土師質土器	鍋	脚・底部 破片	—	8.4	(17.1)	離性	赤褐	輝石・長石・角閃石・小礫	外：ケズリ 内：ヘラナデ　コゲナデ	外面に粘土付着
165	H-15		土師器	長頸瓶か	脚部 破片	—	—	(7.3)	普通	にぶい： 黄橙	輝石・長石	ナデ	底部脚部の痕跡か
166	H-15		須恵器	椀	口縁・高台部 3/4	14.0	—	(4.9)	離性	橙	輝石・長石・角閃石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
167	H-15		須恵器	椀	体・高台部 1/3	—	8.2	(3.9)	離性	淺黄橙	輝石・長石・角閃石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	石持ち土器
168	H-15		須恵器	椀	口縁・高台部 1/3	<11.0>	<6.0>	4.1	離性	にぶい： 黄橙	輝石・長石・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
169	H-15		須恵器	椀	口縁・高台部 7/8	13.0	7.8	4.2	離性	淺黄橙	輝石・長石・角閃石・雲母・小礫	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	石持ち土器
170	H-15		須恵器	高盤か	底・高台部 破片	—	(4.7)	離性	橙	輝石・長石・角閃石・雲母・石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	内面は剥落して確認不	内面は剥落して確認不
171	H-15		土師質土器	椀	口縁・底部 3/4	10.2	5.0	3.3	離性	橙	輝石・長石・角閃石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 石持ち
172	H-15		須恵器	坏	口縁・底部 ほぼ完	9.6	4.6	2.8	離性	にぶい： 黄橙	輝石・角閃石・長石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 内面に二次焼成か
173	H-15		須恵器	坏	口縁・底部 1/3	10.6	5.3	4.6	やや離性	淺黄	輝石・長石・角閃石・雲母・石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
174	H-15		須恵器	坏	口縁・底部 1/3	9.9	5.6	3.8	やや離性	にぶい： 黄橙	角閃石・長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 「高」・「南」記号
175	H-15		土師質土器	坏	口縁・底部 1/2	10.6	5.8	3.1	離性	明赤褐	長石・角閃石・輝石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り
176	H-15		土師質土器	坏	口縁・底部 1/3	10.1	4.8	3.3	離性	橙	輝石・長石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 石持ち
177	H-15		須恵器	坏	口縁・底部 2/3	11.4	5.6	4.1	離性	明赤褐	長石・輝石・角閃石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 石持ち
178	H-15		須恵器	坏	口縁・底部 1/2	10.1	4.8	3.7	離性	橙	輝石・長石・角閃石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 石持ち
179	H-15		須恵器	坏	口縁・底部 1/3	<9.8>	4.6	3.6	離性	橙	長石・輝石・角閃石・雲母	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 石持ち
180	H-15		須恵器	坏	口縁・底部 1/2	11.3	7.0	3.3	離性	明赤褐	長石・輝石・雲母・角閃石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転糸切り 石持ち
181	H-15		須恵器	椀	口縁・高台部 1/8	<18.0>	—	(4.1)	良	素：灰白 釉：灰オリーブ	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
182	H-15		須恵器	椀	体・高台部 1/8	—	<7.2>	(4.2)	良	素：灰白 釉：灰オリーブ	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	
183	H-15		須恵器	長頸瓶	脚・高台部 破片	—	<9.0>	(5.5)	普通	素：灰白 釉：オリーブ黄	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	底部回転ヘラケズリ 鉄釉
184	H-15		須恵器	長頸瓶	脚・高台部 破片	<11.0>	(2.9)	良	素：灰白 釉：オリーブ黄	長石・輝石	外：ロクロ整形 内：ロクロ整形	鉄釉	鉄釉
185	H-15	五	軒丸瓦	丸瓦	破片 (7.3)	幅 (5.9)	厚さ 2.4		普通	灰	長石・輝石	凹部あり 顔料あり（ベンガラか？）が微量に（ごちゃんの高さ？）	凹部あり 顔料あり（ベンガラか？）が微量に（ごちゃんの高さ？）
186	H-15		鉄製品	刀子	刃部	長さ (6.4)	幅 1.3	厚さ 0.4		鉄製			重量 13g
186	H-15		鉄製品	刀子	茎部	長さ (7.6)	幅 1.4	厚さ 0.6		鉄製			重量 28g
187	H-15		鉄製品	鉄鏃	不明	長さ (13.7)	幅 0.5	厚さ 0.4		鉄製			重量 14g
188	H-15		鉄製品	不明	破片	長さ (4.6)	幅 (3.9)	厚さ 1.2		鉄製			錆塊品 鉄釉か 重量 70g
189	H-17		土師器	坏	口縁・底部 1/2	10.2	—	3.4	普通	橙	輝石・長石・角閃石・雲母・石	外：コゲナデ　ケズリ 内：ヘラナデ→コゲナデ	外面底部に黒斑あり
190	H-17		土師器	坏	口縁・底部 1/4	<11.0>	—	(3.0)	良	橙	輝石・長石・角閃石・雲母	外：コゲナデ　ケズリ 内：コゲナデ	土師？
191	H-21		土師器	甕	脚部 破片	—	—	(18.6)	普通	橙	輝石・長石・角閃石	外：ケズリ 内：ナデ	底部に内面からの穿孔痕？
192	H-21		須恵器	甕	脚部 破片	—	—	(7.5)	普通	灰	輝石・長石	外：平行タタキ　ロクロ整形 内：同心円当て目　ロクロ整形	
193	H-18		土師器	高坏	脚・底部 破片	—	<15.0>	(2.5)	不良	橙	輝石・長石・角閃石	外：コゲナデ 内：コゲナデ　ケズリ	土師？
194	H-18		土師器	甕	脚・底部 破片	—	5.7	(7.2)	普通	赤褐	輝石・長石・角閃石・小礫	外：ケズリ 内：ナデ	外面底部に木葉痕

Tab.13　出土遺物観察表（4）

図版No.	遺構	出土	種別	器種	法量	口径	底径	器高	胎土	色調	施文	調整	備考
195	H-18		銅	馬									重量　20g
196	H-22		瓦	丸瓦	瓦当	縦	厚さ		普通	灰	瓦石・横石	外：ヘラケズリ 内：布目	
197	H-22		瓦	平瓦	瓦当	縦	厚さ		普通	明赤褐	瓦石・横石	外：布目 内：ヘラケズリ	
198	H-22		須恵器	甕	口縁～底台部	<11.2>	<7.2>	4.8	粗密	紅灰・黒褐	横石・瓦石・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
199	H-22		須恵器	甕	口縁～底台部	<12.8>	7.0	5.1	粗密	橙	横石・瓦石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
200	H-22		灰釉陶器	甕	口縁～体部	<12.8>	—	(2.7)	普通	赤（灰白） 釉：灰白	瓦石・横石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	白色
201	H-23		土師器	鍋	口縁～胴部	<30.4>	—	(35.4)	普通	紅灰・黒褐	横石・瓦石・角閃石	外：ヨコナデ　ケズリ 内：ヨコナデ　ヘラナデ	指頭痕
202	H-23		土師器	鍋	口縁～胴部	<22.0>	—	(11.6)	普通	褐	横石・瓦石・角閃石・雲母	外：ヨコナデ　ケズリ 内：ヨコナデ　ヘラナデ	
203	W-2		土師器	坏	口縁～底部	<12.0>	—	(3.6)	普通	橙	横石・瓦石・角閃石	外：ヨコナデ　ケズリ 内：ヨコナデ	指頭痕
204	W-2		土師器	坏	口縁～底部	<12.0>	—	(3.8)	良	橙	横石・瓦石・角閃石・雲母	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	正式成型
205	W-2		土師器	坏	口縁～底部	<12.0>	<5.4>	4.4	普通	灰白	横石・瓦石・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
206	W-2		灰釉陶器	椀	口縁～底台部	<15.2>	7.6	5.7	普通	赤（灰白） 釉：灰白	横石・横石	外：ロクロ調整　ケズリ 内：ロクロ調整	白色　0.53 間式　10c 前半 底部回転糸切り
207	W-2		石製品	石摺	瓦当	縦	厚さ						重量　123g
208	W-2		銅	馬	鞍口								重量　7g
210	D-17		須恵器	椀	体～底台部	—	7.0	(4.2)	普通	灰	横石・瓦石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
211	D-18		須恵器	坏	口縁～底部	11.7	4.8	3.3	粗密	淡褐橙	横石・瓦石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 石英粒
212	D-21		須恵器	坏	口縁～底部	12.2	6.0	3.2	普通	灰	横石・瓦石・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 石英粒
213	D-21		鉄製品	刀子か		瓦当 (7.0)	縦 (0.9)	厚さ 0.2				鉄製	重量　9g
214	表土		陶器	瓶	胴～底部 破片	—	7.8	(8.3)	普通	紅灰・黒褐	瓦石・横石	外：ナデ 内：ナデ	底部内面に指痕 雲母　粘土
215	X77 Y310 E		須恵器	長頸瓶	口縁～底部 破片	—	<14.0>	(3.5)	普通	明白	瓦石・横石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	H-11 か
216	X82 Y310 E		須恵器	坏	口縁～底部 破片	<14.0>	<6.4>	3.9	普通	灰白	横石・瓦石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り H-17 か
217	X82 Y310 E		須恵器	椀	口縁～底部 破片	12.0	5.6	4.4	粗密	橙	横石・瓦石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り→付高台 H-17 か
218	表土		緑釉陶器	椀	口縁部 破片	—	—	(0.9)	普通	赤（灰 釉：オリーブ灰	横石・瓦石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	猿投窯　9c 後半 H-17 か
219	X82 Y310 E		灰釉陶器	椀	体～底台部 破片	—	<8.0>	(2.5)	普通	赤（灰白） 釉：オリーブ灰	横石・横石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	猿投窯　9c 後半
220	表土		石製品	石臼	瓦当	縦 2.3	厚さ 1.7	厚さ 0.4			頁岩石		重量　7g
221	表土		黒曜石	石鏃	瓦当	縦 0.6	厚さ 0.3	厚さ 0.3			頁岩石		重量　77g
222	H-2		須恵器	須恵器	口縁～胴部 破片	<24.8>	—	(10.2)		灰	角閃石・横石・石英・小礫	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
223	H-2		須恵器	器台?	口縁～底部 破片	—	—	(5.4)	普通	灰白		外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部に焼成前の穿孔
224	H-2		須恵器	椀	口縁～底台部 破片	<14.8>	7.8	7.7	不良	橙	角閃石・瓦石・横石・小礫	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	口之辻焼?に変更
225	H-2		須恵器	甕	口縁～底部 破片	—	5.2	2.7	良	灰	横石・横石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
226	H-2		灰釉陶器	長頸瓶	胴部 破片	—	—	(3.0)	普通	赤（灰白） 釉：オリーブ灰	横石・横石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
227	H-2		灰釉陶器	椀	体～底台部 破片	—	<7.0>	(3.1)	普通	赤（灰白） 釉：オリーブ灰	横石・横石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
228	H-2		灰釉陶器	椀	体～底台部 破片	—	6.6	(2.1)	普通	灰白	横石・瓦石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
229	H-2		灰釉陶器	椀	体～底台部 破片	—	6.2	(2.6)	普通	赤（灰白） 釉：オリーブ灰	横石・横石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	
230	H-2		緑釉陶器	椀	体～底台部 破片	—	<4.8>	(1.9)		赤（淡褐相） 釉：オリーブ灰	横石・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り
231	**H-2**		**瓦**	**平瓦**	**瓦当**	**縦**	**厚さ**	**厚さ**	**不良**	**黒灰**		**外：布目** **内：縄多目**	
232	**L-1**		**土師質土器**	**鍋**	**口縁～胴部** **破片**	**9.5**	**4.6**	**3.1**	**やや粗代**	**紅灰・黒褐**	**横石・瓦石・角閃石**	**外：ロクロ調整** **内：ロクロ調整**	**底部回転糸切り** **石英粒**
232	H-2		石製品	石摺	瓦当 15.6	縦 8.5	厚さ 0.4				緑色片岩		重量　418g
232	H-2		石造物	庭石	瓦当 23.0	縦 13.6	厚さ 9.3				緑色片岩		重量 3,800g
241	D-4		石製品	指石か	瓦当 0.4	縦 0.4	厚さ 0.4				頁岩石	上端と下端の間で出土 重量 1.17g	
239	D-4		かわらけ	灯明皿	口縁～底部 破片	6.8	4.2	2.4	普通	紅灰・橙	横石・瓦石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	口縁部に煤付着 底部回転糸切り
238	D-4		かわらけ	椀	口縁～底部 破片	8.5	5.6	2.8	普通	紅灰・橙褐	横石・瓦石・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 石英粒
235	D-4		かわらけ	椀	口縁～底部 注記記載	10.7	6.0	3.3	普通	紅灰・橙褐	横石・瓦石・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整　ナデ	底部板押圧痕
236	D-4		かわらけ	椀	口縁～底部 破片	10.3	6.2	3.1	普通	紅灰・橙	横石・瓦石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整　ナデ	底部回転糸切り（大切痕）→板押圧痕
237	D-4		かわらけ	椀	口縁～底部 破片	10.6	6.4	3.1	普通	紅灰・橙	横石・瓦石・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整　ナデ	底部回転糸切り 二重輪郭
242	D-4		銭	洪武通寶	完形	瓦当 2.5	縦 0.6	厚さ 0.1			銅製	洪武通寶（明 1368）	重量 3g
243	D-4		銭	開元通寶	完形	瓦当 2.4	縦 0.6	厚さ 0.1			銅製	開元通寶（唐 621）　月光堂（鎌倉の場二郎銭、江戸期発行）	重量 2 g
244	D-4		銭	元祐通寶	完形	瓦当 2.4	縦 0.7	厚さ 0.1			銅製	元祐通寶（北宋 1086）	重量 3 g
245	D-4		銭	治平元寶	径は完形	瓦当 2.4	縦 0.6	厚さ 0.1			銅製	治平元寶（北宋 1064）	重量 3g
240	D-4		銭	開元通寶	完形	瓦当 2.5	縦 0.9	厚さ 0.1			銅製	開元通寶（唐 621） 背五月	重量 3g
246	D-4		銭	景德元寶	完形	瓦当 2.5	縦 0.6	厚さ 0.1			銅製	景德元寶（北宋 1004）	重量 3g
247	D-4		銭製品	小刀	端部欠損	瓦当 (17.5)	縦 1.1	厚さ 0.2			銅製		重量　38g
269	D-11		石製品	石玉	径は完形	瓦当 0.4	縦 0.3	厚さ 0.6			滑石製		重量 2g
248	D-15		青磁	輪花皿	口縁～底台部 破片	<11.3>	<2.5>	3.0	普通	紅灰・橙	横石・瓦石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	蓮華文輪花皿
250	D-15		銭	不明	径は完形	瓦当 2.5	縦 0.6	厚さ 0.1			銅製	銭・摩耗により不鮮明	重量 3g
251	D-15		銭	不明	径は完形	瓦当 2.4	縦 0.6	厚さ 0.1			銅製	銭・摩耗により不鮮明	重量 3g
251	D-15		銭	永樂通寶	径は完形	瓦当 2.5	縦 0.6	厚さ 0.1			銅製	永樂通寶（明 1411）	重量 2g
249	D-15		銭	洪武通寶	完形	瓦当 2.4	縦 0.5	厚さ 0.1			銅製	洪武通寶（明 1368）	重量 3g
254	D-15		銭	熙寧元寶	径は完形	瓦当 2.4	縦 0.7	厚さ 0.1			銅製	熙寧元寶（北宋 1068）	重量 3g
252	D-15		銭	不明	端部欠損	瓦当 2.4	縦 0.5	厚さ 0.1			銅製	銭の一部欠により不鮮明	重量 3g 永樂通寶か
255	表土		かわらけ	椀	口縁～底部 破片	14.6	7.2	4.2	普通	紅灰・橙	横石・瓦石・角閃石	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 石英粒
256	表土		かわらけ	椀	口縁～底部 完形	14.0	6.0	4.1	普通	紅灰・橙褐	横石・瓦石・角閃石・雲母	外：ロクロ調整 内：ロクロ調整	底部回転糸切り 石英粒
257	表土		銭	元豊通寶	完形	瓦当 2.3	縦 0.6	厚さ 0.1			銅製	元豊通寶（北宋 1078）	重量 3g
258	表土		銭	景德元寶	右下欠損	瓦当 2.5	縦 0.6	厚さ 0.1			銅製	景德元寶（北宋 1004）	重量 3g 裏面文字
	D-4		骨	人								歯骨	骨骨のない頭骨・顎、歯 3 人分？
	D-15		骨	人	完形							歯骨 成年男性？ 年齢 40 代？	成人女性？ 年齢 40 代？

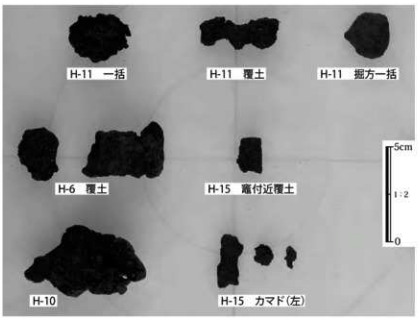


Fig.40　元総社蒼海遺跡群（142）出土の鉄塊系遺物

Tab.14　竪穴建物跡出土土器・陶磁器・瓦一覧表（重量比）

遺構名	土師器（g）		須恵器（g）		釜（g）	陶器（g）	磁器（g）	瓦（g）		小計（g）
	小型品（坏・埦他）	大型品（甕類）	小型品（坏・埦他）	大型品（甕類）	羽釜・土釜	灰釉・緑釉	白磁・青磁	平・丸軒平・軒丸		
H-1	190	451	1,452	372	1,830	152	0	9,783		14,230
H-2(Ⅱ-4)	240	208	984	2,364	1,124	648	4	806		6,378
H-3	0	40	102	18	0	110	0	0		270
H-4	302	894	968	914	174	40	0	12		3,304
H-5	54	106	304	754	2,908	8	8	4,008		8,150
H-6	256	316	696	802	284	242	0	906		3,502
H-7	30	100	324	66	0	4	0	24		548
H-8	1	654	1,032	1,176	776	130	8	88		3,865
H-9	1,017	3,542	172	1,214	0	0	0	80		6,025
H-10	258	492	1,727	168	2,204	188	0	44		5,081
H-11	1,490	3,140	196	1,104	14	0	0	0		5,944
H-12	48	122	102	114	0	57	0	404		847
H-13	130	178	572	726	3,580	398	0	992		6,576
H-14	164	12	1,688	1,436	488	210	0	2,326		6,324
H-15	470	394	5,678	2,092	3,644	637	0	688		13,603
H-17	190	160	18	0	0	0	0	0		368
H-18	84	426	0	32	0	0	0	0		542
H-21	0	312	0	60	0	0	0	0		372
H-22	10	32	480	56	0	18	0	1,220		1,816
H-23	24	976	68	18	0	0	0	0		1,086
合計（g）	4,958	12,555	16,563	13,486	17,026	2,842	20	21,381		88,831

中世井戸跡の調査

晴天の下、進む調査

古代竪穴建物跡の調査

写真図版

雷雨後の夕日

度重なる雷雨の被害

遺物取り上げの最中

調査を終えて

H-1　完掘（西から）

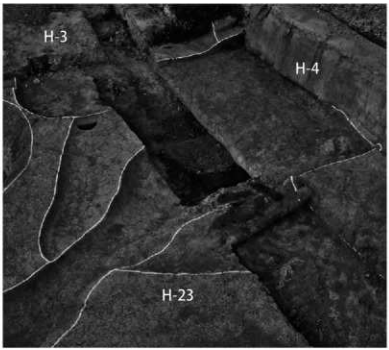
H-1　遺物出土状況（西から）

H-1　掘方調査状況　手前は H-16　（西から）

H-1　竈上面遺物出土状況（西から）

H-1　竈調査状況（北西から）

H-3　調査状況（西から）



H-3・4・23　完掘（北東から）

H-4　遺物出土状況（南から）

H-23　遺物出土状況（西から）

H-5　完掘（東から）

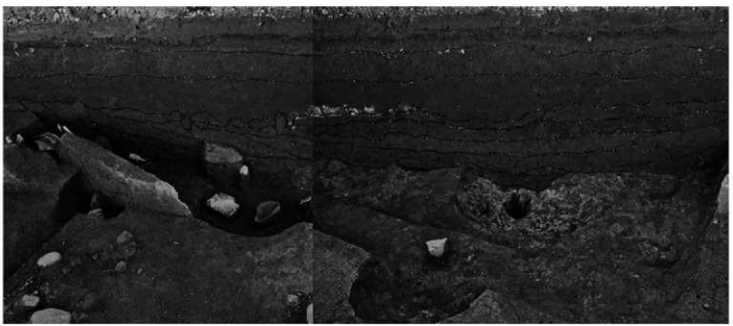
H-5　完掘（北から）

H-5　竈（北から）

H-5　竈（垂直・上が南）

H-5　竈　土層断面（東から）

H-5　竈遺物出土状況（垂直・上が南）



H-5　遺物出土状況と土層断面（東から）

H-6　完掘（西から）

H-6　竈　完掘（西から）

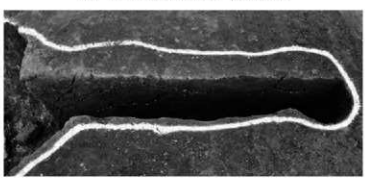
H-6　竈　燃焼部壁面（西から）

H-6　竈　煙道部壁面（南から）

H-6　竈　燃焼部壁面（西から）

H-6　竈　燃焼部土層断面（南西から）

H-6　竈　煙道入口の土層断面（西から）

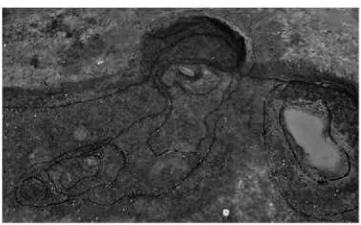


H-6　竈　煙道部土層断面（南から）

H-7　完掘（西から）

H-7　床面中央の遺物出土状態（西から）

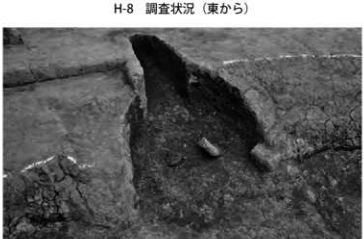
H-7　竈　完掘（西から）



H-7　竈前面の被熱状態（西から）

H-8　完掘（西から）

H-8　調査状況（東から）



H-8　竈　完掘（北西から）

H-9　完掘（西から）

H-9　掘方（北から）

H-9　竈　調査状況（南から）

H-9　竈　完掘（西から）

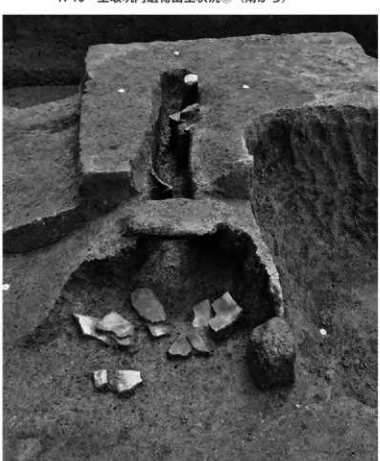
H-9　竈　煙道口の立石（西から）

H-10　完掘・遺物出土状況（西から）

H-10　土取坑内遺物出土状況①（北から）

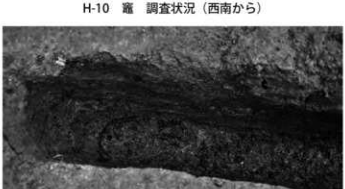
H-10　土取坑内遺物出土状況②（南から）

H-10　土取坑内遺物出土状況③（北から）



H-10　竈（西から）

H-10　竈　調査状況（西南から）



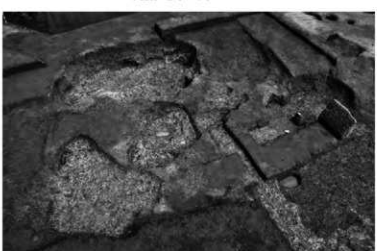
H-10　竈　煙道底検出の炭化物層（北から）

H-11　完掘（西から）

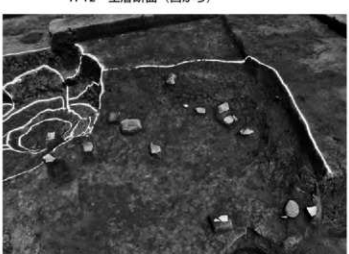
H-11　土層断面（西から）

H-12　完掘（西から）

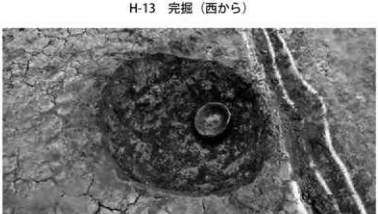
H-12　土層断面（西から）



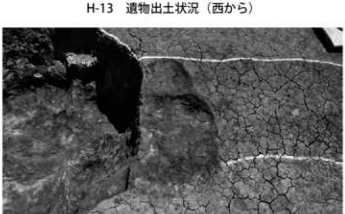
H-13　完掘（西から）



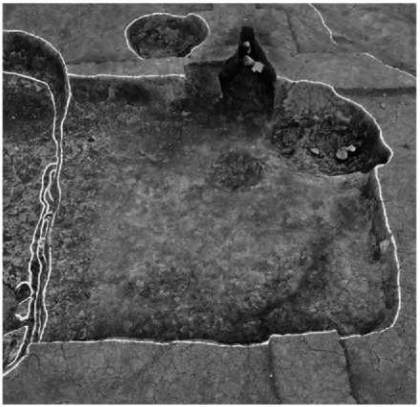
H-13　遺物出土状況（西から）



H-13　旧貯蔵穴（西から）



H-13　竈残骸（西から）



H-14　完掘（西から）

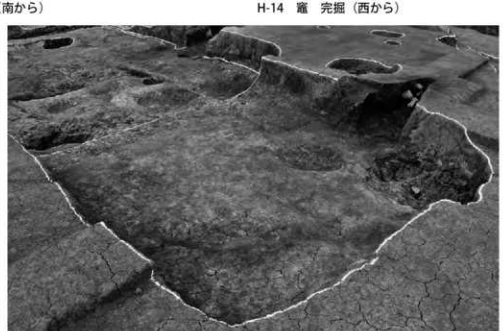
H-14　遺物出土状況（西から）

H-14　遺物出土状況（南から）

H-14　竈　調査状況（南から）

H-14　竈　完掘（西から）

H-14　竈　煙道部（東から）



H-14　完掘（南西から）

H-15　完掘・掘方（西から）

H-15　竪穴部　南壁際遺物出土状況（北から）

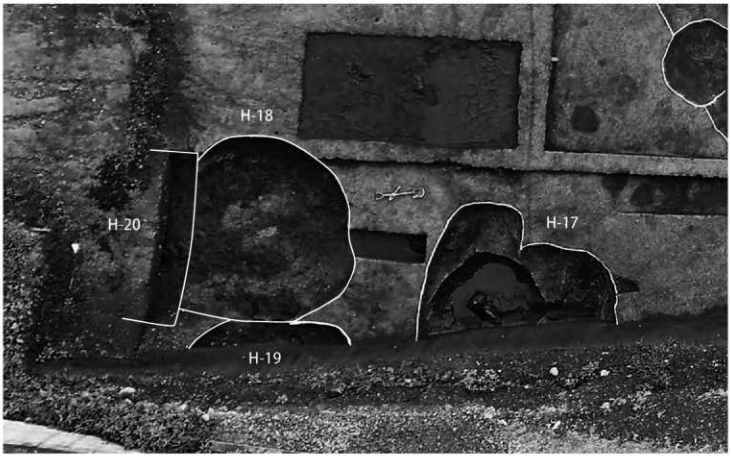
H-15　旧貯蔵穴　調査状況（北から）

H-15　竈　完掘（西から）

H-15　竈　煙道部（東から）

H-16　完掘　手前H-1　（北から）

H-17　調査状況（西から）



H-17～20　調査状況　この空撮後に豪雨によって被災　（垂直・上が西）

H-18　調査状況（南から）

H-21　竈（西から）

H-22　完掘　左側 H-13（東から）

H-22　遺物出土状況（北から）

W-2　完掘　手前は H-23（南西から）

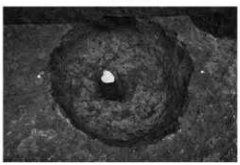
W-2　土層断面（西から）

W-2　遺物出土状況（西から）

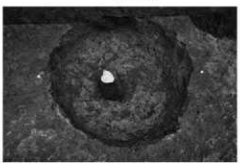
D-11（南から）

D-16（南から）

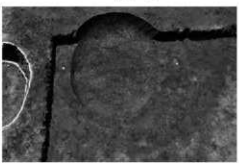
D-17（北から）



D-18（西から）



D-19（南から）



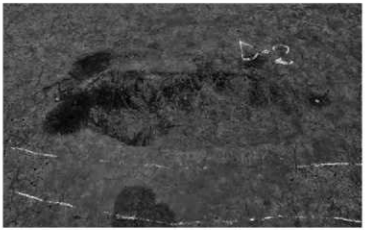
D-20（南から）

D-21 遺物出土状況（南から）

I-4 [旧 H-2]　土層断面（南から）

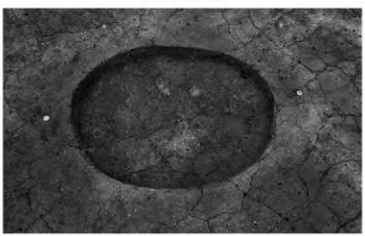
I-4 [旧 H-2]　（南から）

I-4 [旧 H-2]　断ち割り（北東から）



D-2 （南から）

D-3 （南から）

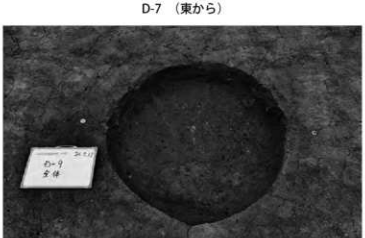


D-5 （南から）

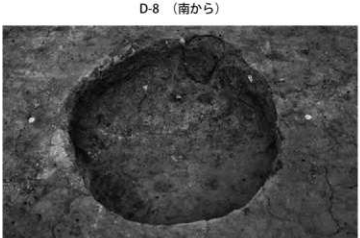
D-6 （南から）

D-7 （東から）

D-8 （南から）



D-9 （東から）



D-10 （南から）

D-1　動物埋葬遺構　（東から）

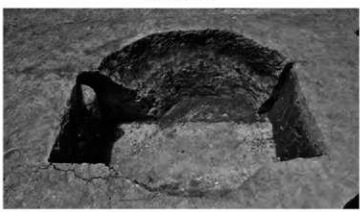
D-4・15　（東から）

D-4　人骨検出状況　（東から）

D-15　人骨検出状況　（東から）

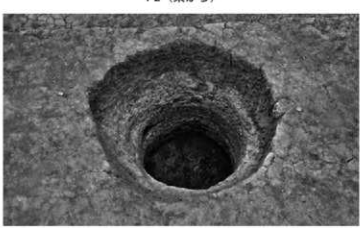
I-1（東から）

I-1　土層断面（東から）



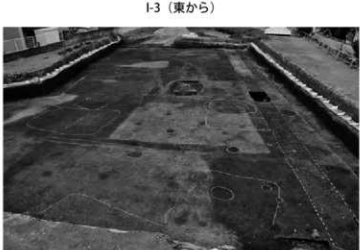
I-2（東から）

I-2　土層断面（東から）

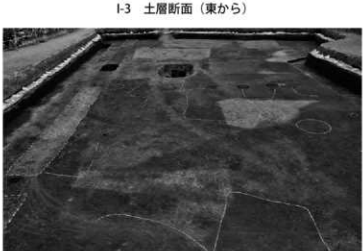


I-3（東から）

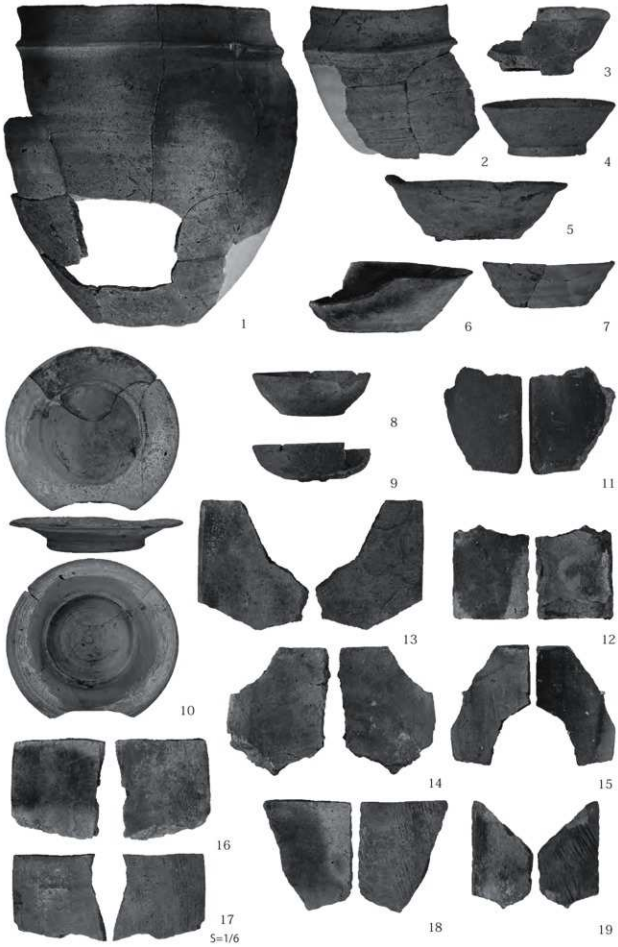
I-3　土層断面（東から）



中世遺構確認面（北から）



中世遺構確認面（南から）

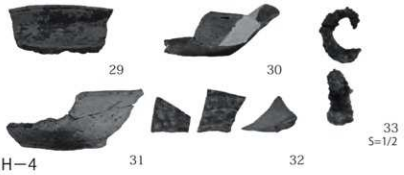


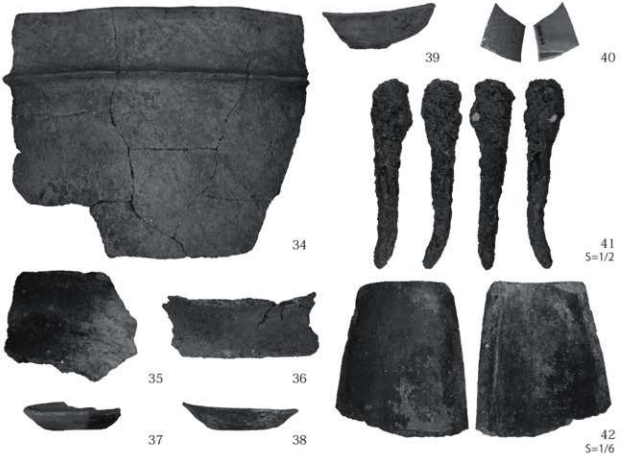
H−1

S=1/3

20
21
22
H−1
23
S=1/6
24
25
S=1/2

26
28
H−3
27


29
30
33
S=1/2
H−4
31
32


39
40
34
41
S=1/2
35
36
37
38
42
S=1/6

S=1/3

H−5

43
S=1/6

44
S=1/6

H−5

H−6

45

46

47

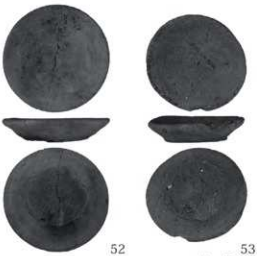
S=1/6

48

51
S=1/2

50

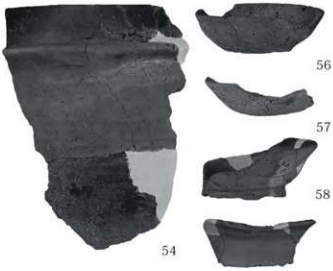
49



52

53

H−7



54

56

57

58

60

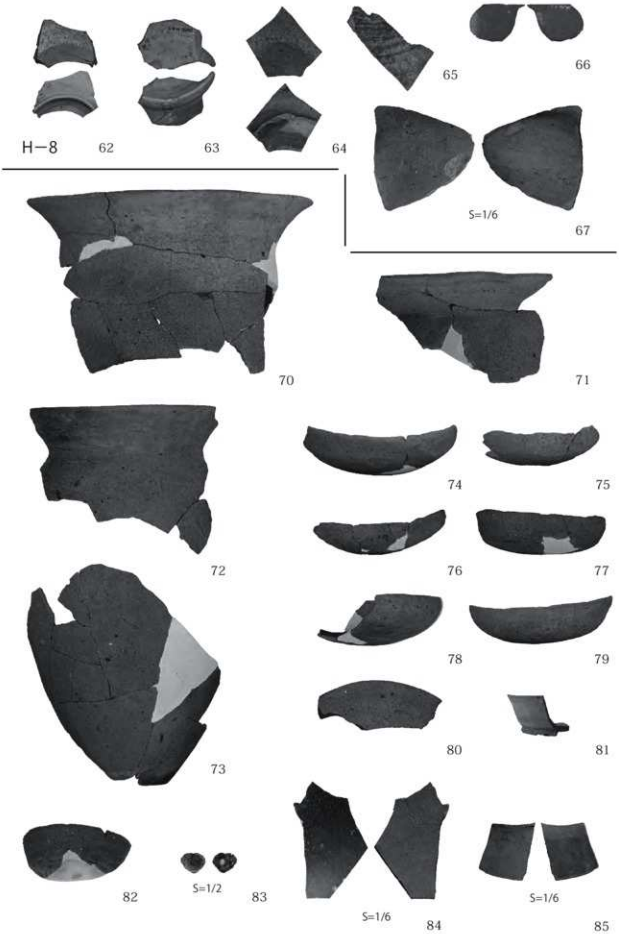
55

59

61

H−8

S=1/3


H−8
62
63
64
65
66
S=1/6
67
70
71
72
74
75
76
77
73
78
79
80
81
82
S=1/2
83
S=1/6
84
S=1/6
85

S=1/3

H−9

H−10

86

87

88

89

90

91

92

94

95

96

93

97

98

99

100

101

H−11

102

S=1/3

103

104

105

106

107

109

108

110

111

112

H−11 S=1/6 S=1/6

126

127

128

S=1/6

H−12

S=1/3

129

131

130

132

133

134

135

136

137

138

139

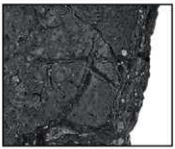
140

142

141

143

S=1/6 144



H−13

H−14

145

146

147

S=1/3

148

149

150

151

S=1/6 152

156

S=1/6 153

155

154

157

S=1/6 158

S=1/6 159

S=1/6 160

H−14 S=1/6 161

S=1/2 162

H−15 164

163

165

S=1/3

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

178

177

180

179

181

182

183

184

S=1/2

186

185

S=1/2

187

188

S=1/2

H−15

189

190

H−17

S=1/3

H−21

191

192

201

H−23

202

H−18

193

194

195

H−22

S=1/6

196

S=1/6

197

198

199

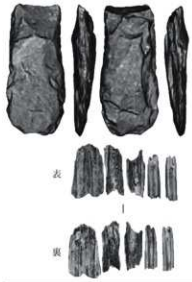
200

203 204 205

206

W−2

S=1/3


W−2
207
S=1/6
表
裏
208

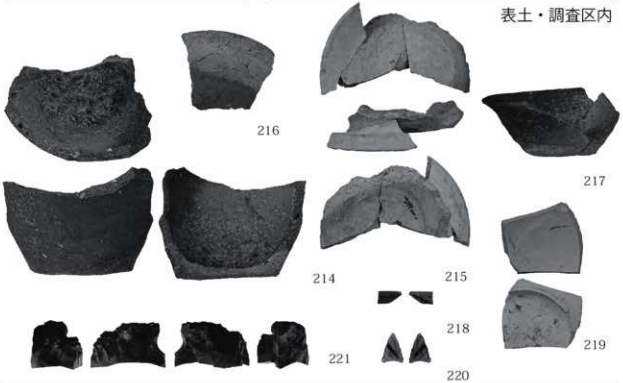
D−11
S=1/1
209

D−18
211

D−21
212
S=1/1
213

D−17
210

表土・調査区内


216
217
214
215
218
219
221
220

I−4
222
224
223
225
226

S=1/3

I−4

227

228

229

230

S=1/6

231

(I-1) 232

S=1/6

233

S=1/6

234

D−4

235

236

237

238

239

241

S=1/2

240

255

256

茶毘跡

248

D−15　墓

S=1/3

報告書抄録

ふりがな	もとそうじゃおうみいせきぐん（142）
書名	元総社蒼海遺跡群（142）
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
編著者名	水井智教　関口信夫　谷畑美帆　寺内勝彦
編集機関	山下工業株式会社 〒371-0244　群馬県前橋市鼻毛石町 207-8
発行機関	前橋市教育委員会事務局　文化財保護課
発行年月日	2022 年 2 月 28 日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
元総社蒼海遺跡群（142）	群馬県前橋市元総社町 1348-1 他	2A256	0142	36°38′95″	139°029′18″	R3. 4.19 ～ R3. 8.16	687m²	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業

主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
縄文時代	—	縄文土器（小破片） 黒曜石、石器	縄文時代の遺構は検出されなかった。しかし、縄文時代の遺物は調査区内各所から出土している。
古墳時代 奈良時代 平安時代	竪穴建物跡 23 軒 溝跡 1 条 土坑 10 基 井戸跡 1 基 ピット 3 基	土師器、須恵器、土師質土器、白色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、青磁、瓦、石製品、鉄製品、銅製品、馬歯	竪穴建物跡の主体は平安時代であった。 青磁・白磁といった貿易陶磁器や緑釉陶器・灰釉陶器が多数出土し、図示し得ただけでも 34 点の灰釉陶器と 3 点の緑釉陶器、4 点の磁器がある。
中世・近世	土坑 8 基 井戸跡 3 基 動物埋葬遺構 1 基 中世墓 3 基 茶毘跡 1 基	カワラケ、青磁、石製品、鉄製品、銭、人骨	農地の一角が墓域へと転換する可能性が考えられ、中世墓と茶毘跡が南北ほぼ一直線上に並ぶ様子からは、農地内の地境に共同墓地が形成された可能性を想起させる。

元総社蒼海遺跡群（142）

―前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2022 年　2 月 28 日　印刷・発行

編　集　山下工業株式会社
発　行　前橋市教育委員会
印　刷　朝日印刷工業株式会社